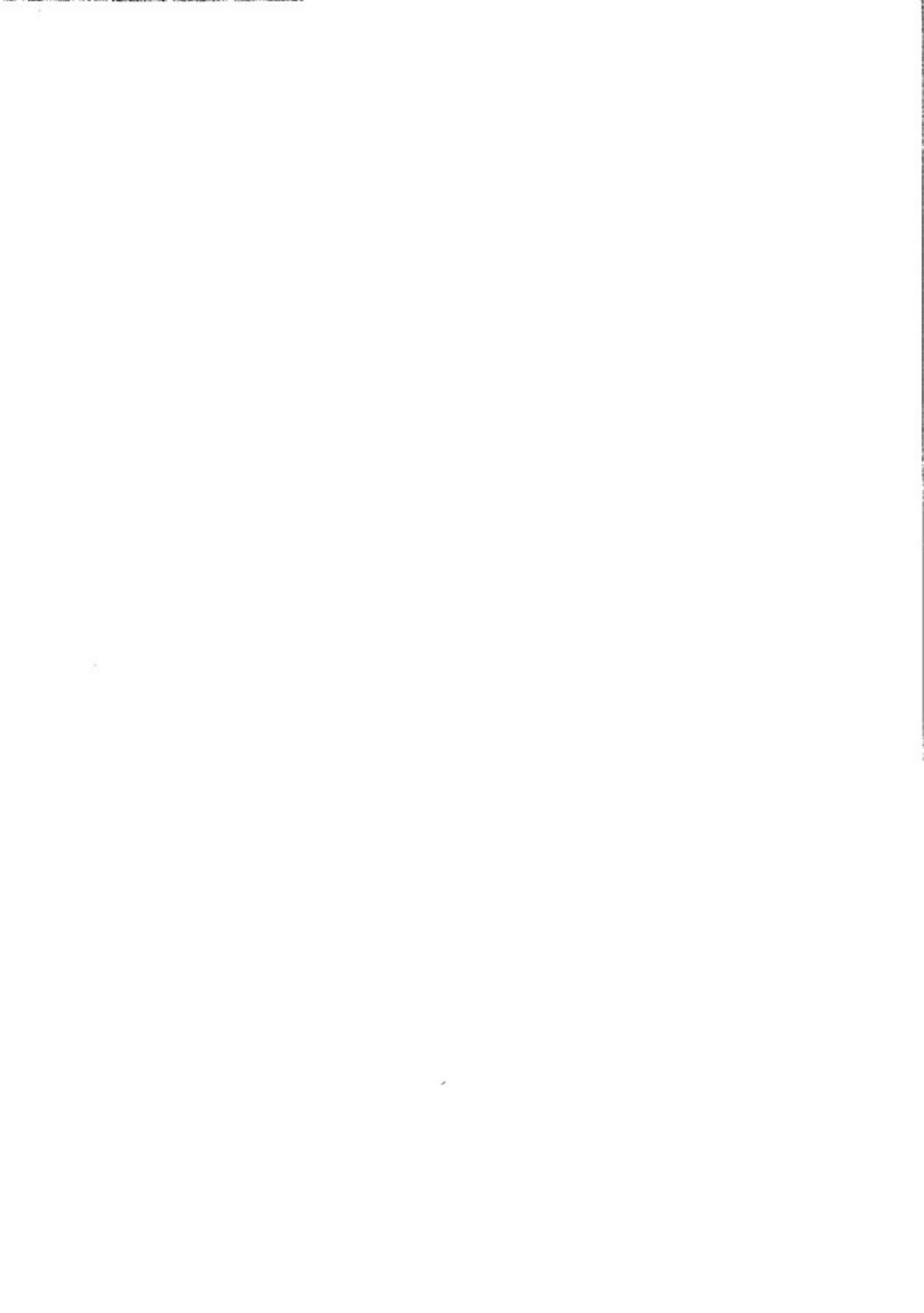


# 蔀屋北遺跡発掘調査概要・Ⅲ

2006年3月

大阪府教育委員会



## はじめに

平成13年度から行っております、なわて水環境保全センター建設に伴う藤屋北遺跡の発掘調査は、施設建設の順序にしたがって順次実施しております。そのうち水処理施設約17,200m<sup>2</sup>を三分割し、四ヵ年にわたって実施したA～C地区の調査が平成16年度をもって終了しました。すでに平成15年度と16年度にA地区とC地区の概要報告書を刊行致しましたが、今回、中央部分にあたるB地区の調査概要を報告する運びとなりました。

A地区の調査では馬の全身骨格を検出した土坑や、船材を転用した井筒を持つ井戸、竪穴住居などが検出され、C地区では20棟を超える建物や、船材を転用した井筒と井桁を組み合わせた井戸など集落の中心部の様相を呈する遺構が調査区全面にわたって検出されていますが、今回は、その結果を追認する成果を得ることができました。そして17,200m<sup>2</sup>の調査区全域に、古墳時代中期から後期にかけての広大な集落遺跡が展開していることが確認されました。

これまでの調査の結果、多数の遺物が出土しておりますが、そのなかには朝鮮半島から移入された土器や、製塙土器などが含まれており、さらに輪鏡や櫛などの木製品、馬歯や馬骨もみられました。

これらの成果は、古墳時代中期に朝鮮半島から馬とともにこの地に移り住んだ人々の存在を思わせ、日本書紀にも記されている「河内の馬飼い」との関連を強く印象づけるものといえます。

平成13年度に開始された、なわて水環境保全センター建設に伴う藤屋北遺跡の調査も5年が過ぎ、遺跡の性格等も徐々に明らかとなっていましたが、当該地における今後の調査成果をも加えることによって、河内の馬飼い集団の全貌が見えてくるものと考えます。

最後になりましたが、調査に際しまして地元住民の方々および関係者各位に多大なご協力をいただき、深く感謝いたしますとともに、今後とも一層のご理解とご協力をお願ひいたします。

平成18年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 丹上 務

## 例　　言

1. 本書は、寝屋川流域下水道事業なわて水環境保全センター建設に先立って、大阪府教育委員会が実施した、四條畷市砂・蔀屋に所在する蔀屋北遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は、大阪府土木部の依頼を受けた大阪府教育委員会が、文化財保護課調査第一グループ技師岩瀬 透を担当者として、平成15年4月16日から平成16年7月28日までの期間で実施した。遺物整理作業は、調査管理グループが技師竹原伸次・林口佐子・藤田道子を担当者として、現地調査と並行して実施した。
3. 調査の実施にあたっては、地元の砂・蔀屋自治会をはじめ四條畷市教育委員会、大阪府東部流域下水道事務所など、多くの方々のご協力を得た。
4. 写真測量は山建技術コンサルタント株式会社に委託して実施し、撮影フィルムは同社が保管している。
5. 本書に掲載した遺物写真の撮影は有限会社阿南写真工房に委託した。また、出土木製品の樹種鑑定は株式会社パリノ・サーヴェイに、保存処理は財団法人大阪市文化財協会に委託した。
6. 本書で用いた座標値は日本測地系（平面直角座標第VI系）で、遺構全体図には世界測地系座標値を併記している。
7. 本調査の調査番号は、03001（平成15年度）、04001（平成16年度）である。
8. 本書の執筆・編集は主に岩瀬が当たったが、鶴山まり（現財団法人大阪府文化財センター）が第2章3項の一部を分担執筆した。
9. 本書は300部作成し、一部あたりの単価は1,456円である。

# 目 次

## はじめに

### 例言

第1章 調査の経過と方法	1
1 調査の方法	1
第2章 調査の成果	2
1 層序	2
2 各面検出遺構の概要	6
3 古墳時代中期および後期の遺構と遺物	8
4まとめ	74

## 挿 図 目 次

第1図 調査区位置図	第21図 堀立柱建物跡5平・断面図
第2図 土層柱状図	第22図 井戸131000平・立面図
第3図 第1遺構面検出里道堤内出土銅錢拓影	第23図 井戸枠軸用船材実測図
第4図 堀立柱建物跡1平・断面図	第24図 土坑131097平・断面図
第5図 堀立柱建物跡3平・断面図	第25図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図(1)
第6図 堀立柱建物跡4平・断面図	第26図 土坑130567平・断面図
第7図 堀立柱建物跡7平・断面図	第27図 土坑130567遺物出土状況
第8図 堀立柱建物跡8平・断面図	第28図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図(2)
第9図 堀立柱建物跡10平・断面図	第29図 土坑131001平・断面図
第10図 カマド131300平・断面図	第30図 上坑131001遺物出土状況
第11図 カマド131301平・断面図	第31図 土坑131002平・断面図
第12図 土坑131083平・断面図	第32図 土坑131002遺物出土状況
第13図 土坑130357平・断面図	第33図 土坑131103平・断面図
第14図 溝130288平・断面図	第34図 上坑131103遺物出土状況
第15図 古墳時代後期遺構出土遺物実測図	第35図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図(3)
第16図 古墳時代後期遺構平面図	第36図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図(4)
第17図 積穴住居址130475平・断面図	第37図 土坑130965平・断面図
第18図 積穴130475カマド平・断面図	第38図 上坑130965遺物出土状況
第19図 積穴住居址130902平・断面図	第39図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図(5)
第20図 堀立柱建物跡2平・断面図	第40図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図(6)

第41図 土坑1 3 0 7 6 5 平・断面図	第54図 溝1 3 0 2 4 0 出土遺物実測図(2)
第42図 土坑1 3 0 7 6 5 遺物出土状況	第55図 溝1 3 0 2 4 0 出土遺物実測図(3)
第43図 上坑1 3 0 7 6 4 平・断面図	第56図 溝1 3 0 2 4 0 出土遺物実測図(4)
第44図 土坑1 3 0 7 6 4 遺物出土状況	第57図 溝1 3 0 2 4 0 出土遺物実測図(5)
第45図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図(7)	第58図 溝1 3 0 2 4 0 出土遺物実測図(6)
第46図 周溝1 3 1 1 0 1 平・断面図	第59図 溝1 3 0 6 7 0 平・断面図
第47図 周溝1 3 1 1 0 1 内検出主体部平・断面図	第60図 溝1 3 0 6 7 0 遺物出土状況
第48図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図(8)	第61図 溝1 3 0 6 7 0 出土遺物実測図(1)
第49図 周溝1 3 1 2 5 0 平・断面図	第62図 溝1 3 0 6 7 0 出土遺物実測図(2)
第50図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図(9)	第63図 溝1 3 0 2 3 6 平・断面図
第51図 溝1 3 0 2 4 0 平・断面図	第64図 溝1 3 0 2 3 6 遺物出土状況
第52図 溝1 3 0 2 4 0 遺物出土状況	第65図 溝1 3 0 2 3 6・1 3 0 2 3 9 出土遺物実測図
第53図 溝1 3 0 2 4 0 出土遺物実測図(1)	付図 古墳時代中・後期遺構平面図

## 図 版 目 次

図版1 調査区全景	図版7 第13遺構面全景
図版2 調査区全景(北より)	図版8 第13遺構面南西半部全景(南より)
第12遺構面全景(北より)	第13遺構面北西半部全景(北より)
図版3 掘立柱建物跡3	図版9 竪穴住居址1 3 0 4 7 5
柱穴1 3 1 0 4 3	竪穴住居址1 3 0 4 7 5 カマド
柱穴1 3 1 0 4 3 磚板検出状況	図版10 竪穴住居址1 3 0 9 0 2
柱穴1 3 1 0 7 4	掘立柱建物跡2
柱穴1 3 1 0 7 4 磚板検出状況	図版11 掘立柱建物跡5
図版4 掘立柱建物跡4	柱穴1 3 1 0 5 8
掘立柱建物跡3、4	柱穴1 3 1 0 5 3
図版5 掘立柱建物跡8	柱穴1 3 1 2 2 1
柱穴1 2 0 0 1 0	柱穴1 3 1 2 2 4
柱穴1 2 0 0 1 4	図版12 井戸1 3 1 0 0 0
柱穴1 2 0 0 1 5	井戸1 3 1 0 0 0 井戸枠内掘削後
柱穴1 2 0 0 1 6	井戸枠1
図版6 カマド1 3 1 3 0 0	井戸枠2
カマド1 3 1 3 0 1	図版13 上坑1 3 0 5 6 7 製塙土器出土状況

	土坑130567製塙上器出土狀況	大溝130240中·下層遺物出土狀況
	部分擴大	況3
圖版14	土坑131001遺物出土狀況	同上部分擴大
	土坑131002遺物出土狀況	大溝130240中·下層遺物出土狀況
圖版15	土坑130965遺物出土狀況	況4
	土坑130764遺物出土狀況西半上層	大溝130240中·下層遺物出土狀況
	土坑130764遺物出土狀況西半中層	況5
	土坑130764遺物出土狀況西半下層	大溝130670遺物出土狀況1
	土坑130764遺物出土狀況東半中層	同上部分擴大
	土坑130764遺物出土狀況東半下層	大溝130670遺物出土狀況2
	土坑130764遺物出土狀況東半中層	同上部分擴大
圖版16	周溝131101	溝130236遺物出土狀況1
	周溝131101內檢出主体部	同上部分擴大
圖版17	周溝131101周溝內遺物出土狀況1	井戶131000出土遺物
	同上部分擴大	周溝131101出土遺物
	周溝131101周溝內遺物出土狀況2	圖版22 大溝130240出土遺物
	同上部分擴大	圖版23 大溝130240出土遺物
	周溝131250	圖版24 大溝130670出土遺物
圖版18	大溝130240	溝130236出土遺物
	大溝130240上層遺物出土狀況1	
	同上部分擴大	
	大溝130240上層遺物出土狀況2	
	同上部分擴大	
圖版19	大溝130240中·下層遺物出土狀況1	
	同上部分擴大	
	大溝130240中·下層遺物出土狀況2	
	同上部分擴大	

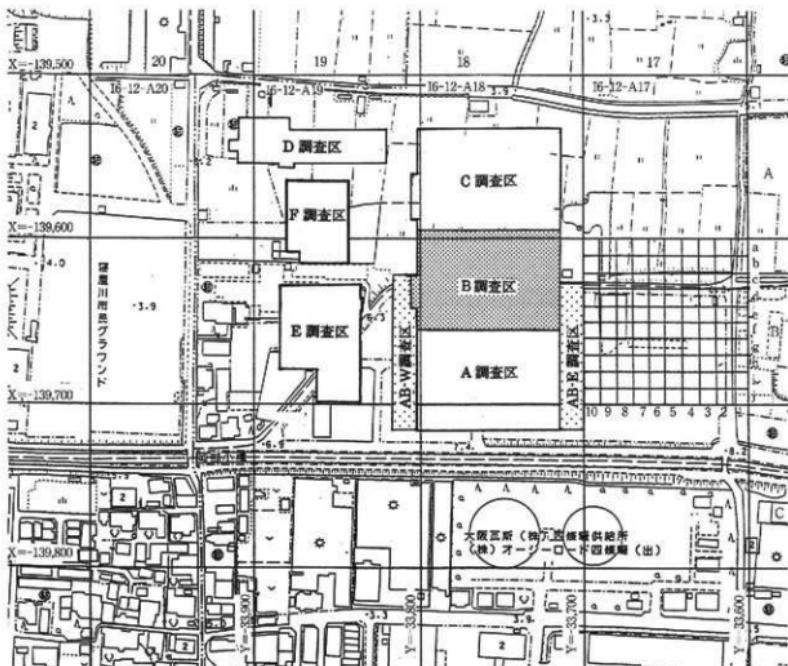
# 第1章 調査の経過と方法

本章で本来触れるべき調査の経過については、2004年3月に刊行されている「藤屋北遺跡発掘調査概要・I」で記されているのでここでは省略する。

## 1 調査の方法

なわて水環境保全センター建設の第1期工事は、水処理施設、機械施設、砂ろ過施設などの建設を行うが、建設の順序に従ってA地区からF地区の6つの調査区に分割して発掘調査を実施している。そのうち水処理施設は約17,200m<sup>2</sup>と広大なため、南北に長い当該地を南側のA地区、中央のB地区、北側のC地区に三分割して、A、C、Bの順に調査した。先行したA・C地区についてはすでに概報が刊行されており、本書が報告するのは中央部のB地区の成果である。

調査区の地区割は、1/2500地形図（都市計画図）を基本（東西2km、南北1.5km）として、この地図を300等分し、100m四方の区画を設定する。この区画は南北方向のアルファベットと東西方向のアラビア数字で表現し、南北に北から南へA～Oの15列、東西に東から西へ1～20の20列



第1図 調査区位置図

で、表示する場合は南北を優先する。さらに100m区画を100等分して10m四方の区画を設定し、この区画は南北方向のアルファベットと東西方向のアラビア数字で表現し、南北に北から南へa～jの10列、東西に東から西へ1～10の10列で、表示する場合は南北を優先する。この10mメッシュの区割りに基づく地区単位で、出土遺物の取り上げを行っている。

なお、今回の調査では13面の遺構面を確認したため、検出した遺構には、はじめに2桁の面番号(01～13)、その後に面ごとの検出順に4桁(0001～)の遺構番号を表す6桁の番号を付して登録した。

## 第2章 調査の成果

### 1 層序

B地区は、水処理施設建設地を三分割したうちの中央部分にあたるが、そのほぼ中央を南北に横断する里道が存在しており、里道の北側は水田、南側は工場となっていた。

調査前の原況は、里道の南側では旧地表から2m前後の客土による盛り土が施されており、地表面はT.P.+7m、北側ではT.P.+5.8mであったが、試掘のデータに基づいて、調査以前に調査地全体をT.P.+3.6mまで機械掘削した。

B地区はこの状況下で調査に着手したが、先行して進められたA・C地区の結果を踏まえて、C地区に隣接する里道およびその北側はT.P.+3.25mまで、里道の南側はさらに機械掘削によって近・現代の層をT.P.+3.1mまで除去し、それ以下は人力によって、層ごとに掘削した。

B地区では、調査の結果13面の遺構面の存在を確認したが、そのなかには限られた範囲のみ存在した面が3面あり、調査区全域で存在が確認された面は10面であった。各遺構面には検出順に第1面から順次面番号を付している。これは各調査区に共通する方法であるが、前述の如く機械掘削の深度が異なったため、同一番号を付された面が各調査区で対応する結果とはならなかつた。

B地区では、A・C地区的調査結果に基づいて、南部ではT.P.+0.5m、北部ではT.P.+1.2m付近までを調査対象としたが、両調査区と同様に、最終遺構面以下の土層堆積状況を知るためにトレンチを設定し、T.P.-1m付近まで掘削した。その結果、当地における縄文時代後期以降の地形形成に関する重要な知見を得ることができた。

まず、T.P.-1mの縄文時代からT.P.+0.5mの弥生時代中期頃までは、ほぼフラットな自然堆積層が続く。その上層では、C地区の西半部からB地区の北西半部にかけて、河川の氾濫により堆積したものと思われる砂層によって自然堤防が形成されており、その上面から弥生時代後期の遺物が出土している。この地形はB地区中央から南へ、あるいはC地区中央から東へと、概ね10

mで8%の比高差を持って傾斜し、その後は緩やかに下ったあとわずかに上がる。

その上面には、0.3m内外の厚みを持って青灰色のシルトが地形に沿って覆うように堆積し、その上面が第13面で、古墳時代中期の遺構面となる。標高は低地でT.P.+0.6m内外、自然堤防上の高台でT.P.+1.4m内外を測った。遺構はほぼ全域で検出されたが、C地区の西半部からB地区の北西半部にかけての高台の地域で特に集中していた。

その上層には、黒灰色シルトの堆積がみられた。下層と同様に地形に沿って覆うように堆積しており、傾斜面及び低地では0.2m内外と比較的厚いが、高台上では最大で0.1m弱と薄く、まったくみられない部分も存在した。この層は古墳時代中期の遺物包含層で、遺物が大量に出土した。上面が第12面で、古墳時代後期の遺構が検出された。標高は低地でT.P.+0.7m内外、自然堤防上の高台でT.P.+1.5m内外を測った。

その上層には暗緑色粘質土の堆積がみられた。調査区の北東半部の低地でのみ確認された層で、0.3m弱と比較的厚く堆積する。この層は古墳時代後期の遺物包含層で、須恵器、上師器、下駄などが出土した。上面が第11面で、7世紀の遺構が検出された。標高はT.P.+0.9m内外を測った。

その上層には暗緑色強粘性粘土の堆積がみられた。下層と同様に地形に沿って覆うように堆積しており、0.2m～0.3m弱と比較的厚い。この層からは須恵器、土師器、携帯用砥石などが出土した。上面が第10面で、8世紀の遺構が検出された。標高は低地でT.P.+0.9m内外、自然堤防上の高台でT.P.+1.6m内外を測った。

その上層は、まず北半部の高台に暗緑灰色の砂が薄く堆積し、その後、地形に沿って覆うように暗緑灰色の粘土が堆積している。明確な遺構は検出されなかったが、両隣の調査区との関わりから、上面を第9面とした。出土遺物から8世紀後半に比定できる。標高は低地でT.P.+1.0m内外、自然堤防上の高台でT.P.+1.7m内外を測った。

その上層は、第9面と同様に、まず地形に沿って覆うように北半部の高台に灰緑色粘質土が堆積し、その後、中央部から南側に炭酸ノジュールを含む緑灰色の粘土が堆積する。その際中央部が0.5mの幅で盛り上がり、東西方向の土手を形成する。土手の頂部と両側裾部との比高差は、北で0.1m、南で0.4mを測った。南半部の標高はT.P.+1.1mで、それまでの自然地形による傾斜面を、土手を築いて意図的に段を形成することによって、より効率的な土地利用を図ったものといえる。北半部の標高はT.P.+1.9m、中央部土手北裾部はT.P.+1.3mを測った。上面が第8面となる。

その上層は、土手の南側の低地にのみ暗緑灰色の粘質土が堆積する。厚みは0.1mから0.15mと薄く、土手を超えるまでには至らない。標高はT.P.+1.2m内外で、上面が第7面となる。土手の北側では、この段階で新たな上層の堆積は認められなかった。

さらにその上層は、土手の南側の低地にのみ暗緑灰色の粘土が堆積する。厚みは0.2m内外で、標高はT.P.+1.3mを測った。上面が第6面となる。土手の北側では、この段階でも新たな土層の堆積は認められなかった。

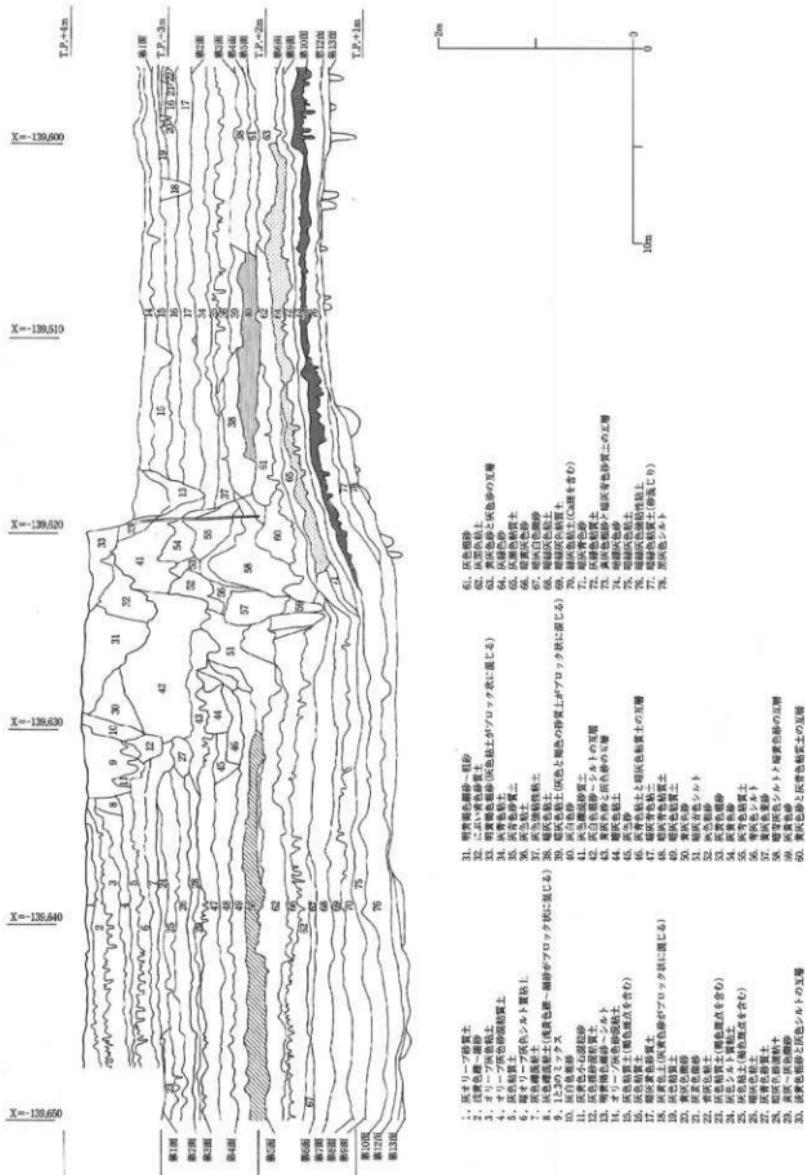
その上層は、まず地形に沿って覆うように北半部の高台に灰緑色の砂が薄く堆積し、その後、調査区全体に灰黒色の粘土が厚く堆積する。調査区中央を東西方向に走る幅2.5mの大畦畔が存在し、その南側はほぼフラットでT.P.+1.9mを示す。一方、北端部はT.P.+2.2mで、そこから中央に向かって約0.3mの比高差を持って緩やかに傾斜する。上面が第5面で、大畦畔、それに直交する畦畔、土坑などが検出され、出土遺物から、第5面は11世紀に比定された。

その上層は、北半部は暗灰色砂質土が薄く堆積し、その上面が第4面のベースで、畦畔などが検出された。中央では灰色の粗砂が堆積し、その上面が第4面のベース、南半部では黄灰色の砂を挟んで暗灰色の砂質土が堆積し、その上面が第4面のベースとなる。標高はいずれもT.P.+2.2m内外と、ほぼフラットとなる。調査区の中央部、第5面で大畦畔を検出した位置の上側に、東西方向に走る幅10m、最大高0.8mの堤状の構造物を検出した。堤は砂とシルトを盛り上げ形成され、杭を打ち込んで補強されている。検出位置や方向からみて、讃良郡条里の一角の坪境に当たる里道と考えられる。出土遺物から、第4面は11世紀後半に比定される。

その上層は、北半部は暗灰色粘土が堆積し、その上面が第3面のベースとなる。中央では灰青色粘土のみが堆積し、その上面が第3面のベース、南半部では黄灰色の砂を挟んで暗灰色粘土が堆積し、その上面が第3面のベースとなる。標高は南部がT.P.+2.6m内外、北部がT.P.+2.3m内外で、南が高い。調査区の中央部には里道がみられる。里道は幅13m、最大高1.2mを測り、南に拡張されたことがわかった。

その上層は、北半部は灰色粘土、灰青色砂質土、灰青色粘土が順に堆積し、灰青色粘土上面が第2面のベースとなる。中央では灰青色粘土のみが堆積し、その上面が第2面のベース、南半部では灰色の砂を挟んで暗灰色の砂混じり粘土が堆積し、その上面が第2面のベースとなる。標高はいずれもT.P.+2.7m内外で、ほぼフラットとなる。里道は同位置にあり、幅13m、最大高1.2mと変化はみられない。

その上層は、北半部は暗灰黄色砂質土、灰色粘質土が順に堆積し、灰色粘質土上面が第1面のベースとなる。南半部では暗灰色粘土、灰色粘土が順に堆積し、その上面が第1面のベースとなる。標高はいずれもT.P.+3m内外で、ほぼフラットとなる。里道は同位置にあり、幅13m、最大高0.8mを測った。出土遺物から第1面は15世紀に比定される。



第2図 土層柱状図

## 2 各面検出遺構の概要

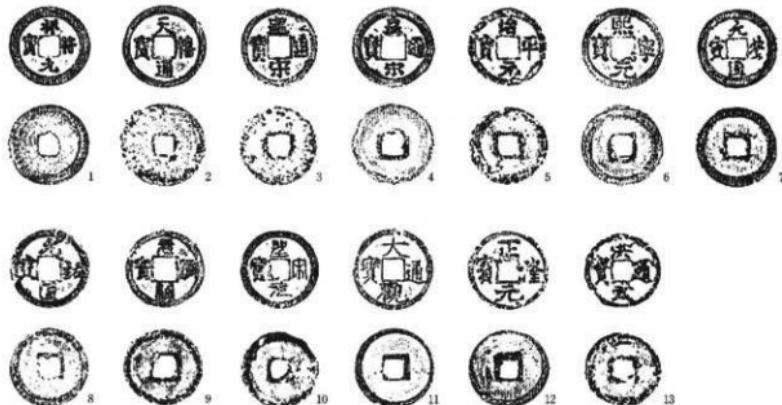
前項で触れたように、B地区では先行して調査されたA・C両調査区の結果を踏まえて、C地区に隣接する里道およびその北側はT.P.+3.25mまで、A地区に隣接する里道の南側はT.P.+3.1mまで機械掘削したうえで、人力によって層ごとに掘削をした。そして、検出した各遺構面には、検出順に第1面から順次面番号を付した。これは各調査区に共通する方法であるが、機械掘削の深度が異なったため、同一番号を付された面が各調査区で対応する面とはならなかった。これらの検証作業の詳細については、後日各調査区の成果を合わせて報告することが計画されているので、その際の課題としたい。

B地区では、限られた範囲にのみ存在した面3面を含む、計13面の遺構面を確認した。

第1面、第2面は中世の耕作面である。

第1面はT.P.+3m内外で検出された。調査区の中央で、東西方向に走る幅13mの里道が存在し、里道の両脇は水田となっている。里道は砂を堤状に盛り上げて形成されており、水田との比高差0.8mを測った。水田面から畦畔、溝、土坑、鋤溝、人あるいは牛馬の足跡などが検出された。出土した瓦器、土師器などから、第1面は15世紀に比定される。里道の堤を形成する砂層から、銅錢13枚が一括して出土した。大半は祥符元寶（北宋 1009年）をはじめとする北宋銭であるが、正隆元寶（金 1157年）、洪武通寶（明 1368年）が含まれていた。14世紀頃から流通していた本邦模鋳銭と思われる（第3図1～13）。

第2面は標高はT.P.+2.7m内外で検出された。里道は同位置にあり、幅13m、比高差1.2mを測った。里道の両脇は水田となっている。水田面から畦畔、溝、土坑、足跡などが検出された。出土した土師器から、第2面は13世紀に比定される。



第3図 第1遺構面検出里道堤内出土銅錢拓影 (S=2/3)

第3面から第9面は平安時代の耕作面である。C地区ではこの時期の居住域が検出されているが、この範囲はB地区にまでは及んでいない。

第3面は南部でT.P.+2.6m内外、北部でT.P.+2.3m内外と、南が高い状況で検出された。調査区の中央には、ほぼ同位置に里道がみられる。里道は幅13mで、比高差は北と1.2m、南と0.9mを測った。里道の両脇は水田となっている。水田面から畦畔、足跡などが検出された。出土した瓦器から、第3面は12世紀に比定される。

第4面はT.P.+2.2m内外で検出された。調査区の中央には、ほぼ同位置に里道がみられる。里道は幅10m、比高差0.8mを測った。里道の両脇は水田となっている。水田面から畦畔、足跡などが検出された。出土した土師器、瓦器、B類黒色土器などから、第4面は11世紀後半に比定される。

第5面は南側はほぼフラットでT.P.+1.9mを示す。一方、北端部はT.P.+2.2mで、そこから中央に向かって約0.3mの比高差を持って緩やかに傾斜する。調査区中央を東西方向に走る幅2.5mを測る大畦畔、それに直交する畦畔、土坑などが検出され、出土した土師器、A類黒色土器から、第5面は11世紀に比定される。この面より上層の畦畔は、讃良郡条里の地割り方向に対応するものである。

第6面は南側はほぼフラットでT.P.+1.4mを示す。一方、北端部はT.P.+1.9mで、そこから中央に向かって約0.5mの比高差を持って緩やかに傾斜する。畦畔、土坑、足跡などが検出され、出土した須恵器、土師器、A類黒色土器などから、第6面は10世紀に比定される。

第7面、第8面は南半部の低地にのみみられ、標高はそれぞれT.P.+1.2m、T.P.+1.1m内外で、第8面の段階で、それまでの自然地形の傾斜面を、土手を築いて意図的に段を形成することによって整地し、より効果的な土地利用を図ったものといえる。

第9面は低地でT.P.+1.0m内外、自然堤防上の高台でT.P.+1.7m内外で検出された。明確な遺構が検出されなかったが、上層からの出土遺物から9世紀初頭頃に形成された面といえる。

第10面は低地でT.P.+0.9m内外、自然堤防上の高台でT.P.+1.6m内外で検出された。水田面となっていたが、遺構は北半部の高台でのみ確認され、畦畔、溝などが検出された。出土した須恵器、土師器などから、第10面は8世紀に比定される。この面で検出された水田面の畦畔は、讃良郡条里的地割り方向と異なっており、小区画水田を形成する。

第11面は調査区の北東半部の低地でのみ確認された。標高はT.P.+0.9m内外で、畦畔、ピットなどの遺構が検出された。出土した須恵器、土師器などから、第11面は7世紀に比定される。この面の畦畔は第10面と同様に、小区画水田を形成するものである。

第12面は低地でT.P.+0.7m内外、自然堤防上の高台でT.P.+1.5m内外で検出された。古墳時代後期の遺構面であり、掘立柱建物跡、溝などが検出されたが、ベースとなる黒灰色シルトの堆積が高台上では最大で0.1m弱と薄く、まったくみられない部分も存在し、その部分では下層の遺構とともに確認された。

第13面は低地でT.P.+0.6m内外、自然堤防上の高台でT.P.+1.4m内外で検出された。古墳時代中期の遺構面であり、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸、土坑、溝などの遺構が検出された。遺構はほぼ全域に広がるが、C地区の西半部からB地区の北西半部にかけての高台の地域で特に集中してみられた。

### 3 古墳時代中期および後期の遺構と遺物

B地区では、第13面として認知された青灰色シルト上面で古墳時代中期の遺構が検出され、その上層の第12面の黒灰色シルト上面を遺構面として、古墳時代後期の遺構が認められたが、黒灰色シルトの堆積が薄く、あるいは場所によって認められない部分もあり、そのため第13面で後期の遺構が多数検出される結果となった。

今回の調査では、古墳時代の遺構が多数検出された。整理の段階においては大方の遺構について検討したが、紙面上の制約もあり、そのすべてを報告することは不可能であるため、詳細は本報告に譲る事とし、ここでは古墳時代後期および中期の遺構のうち、主要なものを抽出して、その概略を記すことにした。

#### 1 古墳時代後期の遺構と遺物

掘立柱建物跡、カマド、土坑、溝などがある。

##### 掘立柱建物跡1（第4図）

調査区の南西半部で検出した。南東および北西側に梁を持つ梁間2間×桁行間4間の掘立柱建物跡である。梁間3.5m、桁行間4.6mを測った。

柱穴は0.3m～0.5mの不整円形ないしは不整椭円形状の掘方を呈し、深さは0.2m内外と浅く、4ヶ所の柱穴から柱根が認められた。

建物を構成する各柱穴の掘方内から須恵器、土師器などが出土しており、これらにより、掘立柱建物跡1は古墳時代後期後半（TK4.3段階）に位置付けられるものと思われる。

##### 掘立柱建物跡3（第5図、図版3）

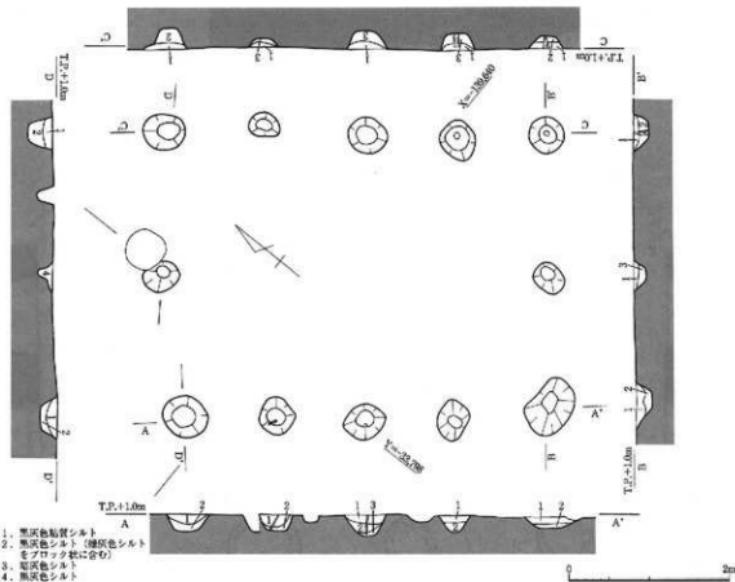
調査区の北西端部付近で検出した。北東および南西側に梁を持つ梁間2間×桁行間3間の掘立柱建物である。梁間3.6m、桁行間4.4mを測った。

柱穴は0.5m～1.0mの不整円形ないしは不整椭円形状の掘方を呈し、深さは0.5m～0.7mで、柱およびその痕跡は認められなかったが、南東側桁行の両コーナー柱穴から礎板が検出された。

建物を構成する各柱穴の掘方内から須恵器、土師器、製塙土器などが出土しており、これらにより、掘立柱建物跡3はTK4.3段階に位置付けられるものと思われる。

##### 掘立柱建物跡3出土遺物（第15図1～3）

須恵器（1～3） 1、2は杯蓋で、いずれも天井部と口縁部の稜線は不明瞭である。1は口



第4図 挖立柱建物跡1平・断面図

径12.0cm、2は口径16.0cmを測る。3は高杯脚部で、底径9.2cmを測る。

#### 掘立柱建物跡4（第6図、図版4）

調査区の北西端部付近の掘立柱建物跡3の南西側に隣接する位置で検出した。北西および南東側に梁を持つ梁間2間×桁行間3間の掘立総柱建物である。梁間3.7m、桁行間4.1mを測った。

柱穴は0.5m～1.0mの不整円形ないしは不整椭円形状の掘方を呈し、深さは0.4m～0.6mで、柱およびその痕跡、礎板などは認められなかった。

建物を構成する各柱穴の掘方内から須恵器、土師器、製塩土器などが出土しており、これらにより、掘立柱建物跡4はTK4 3段階に位置付けられるものと思われる。

#### 掘立柱建物跡4出土遺物（第15図4）

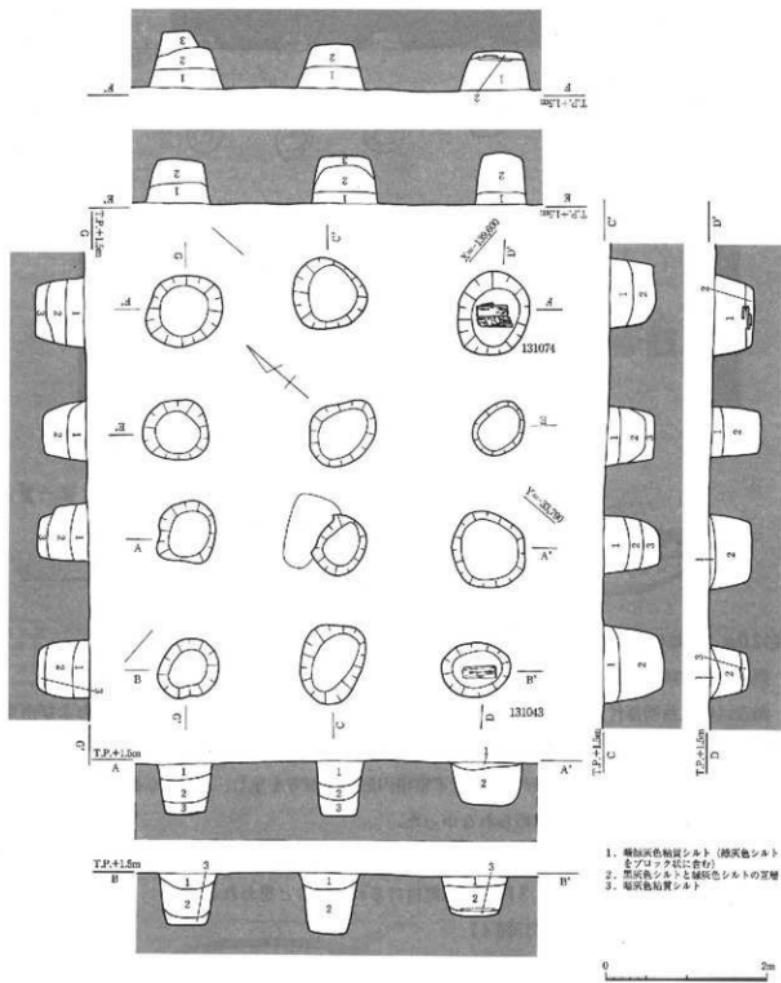
須恵器（4）4は壺もしくは甕の口縁部で、頸部にカキメを巡らせる。

#### 掘立柱建物跡7（第7図）

調査区の北西端部で検出した。北西および南東側に梁を持つ梁間3間×桁行間4間の掘立柱建物である。梁間3.7m、桁行間5.5mを測った。

柱穴は0.2m～0.6mの不整円形状の掘方を呈し、深さは0.3m～0.5mで、柱およびその痕跡は認められなかった。

建物を構成する各柱穴の掘方内から須恵器、土師器などが出土しており、これらにより、掘立



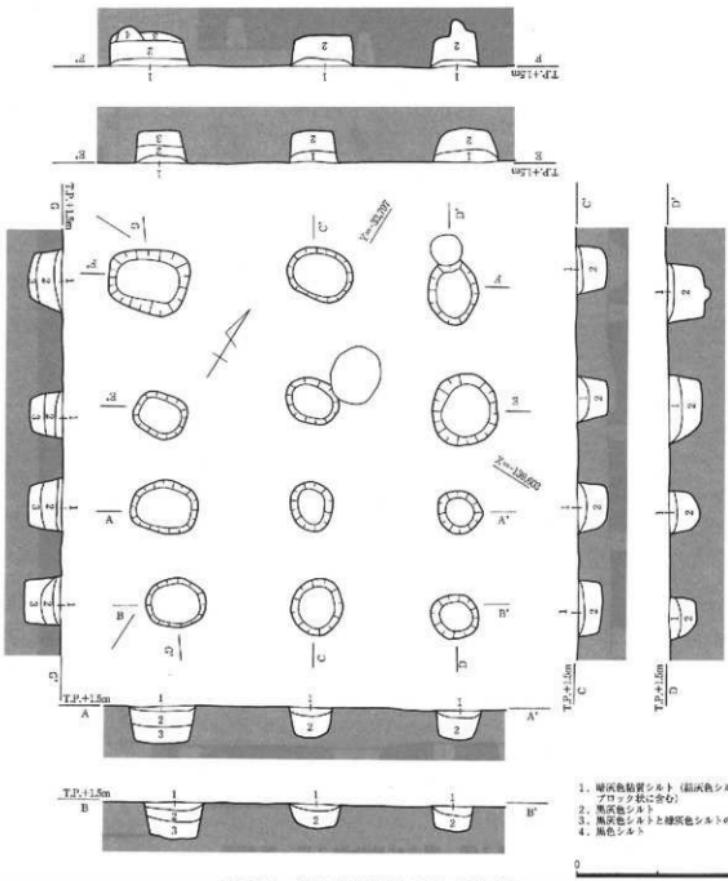
第5図 掘立柱建物跡3平・断面図

柱建物跡7は古墳時代後期初頭(MT15段階)に位置付けられるものと思われる。

#### 掘立柱建物跡7出土遺物(第15図5、6)

須恵器(5、6) 5、6は杯蓋である。口縁部との境界に明瞭な段を持つ。5は口径11.4cm、6は口径13.0cmを測る。

#### 掘立柱建物跡8(第8図、図版5)



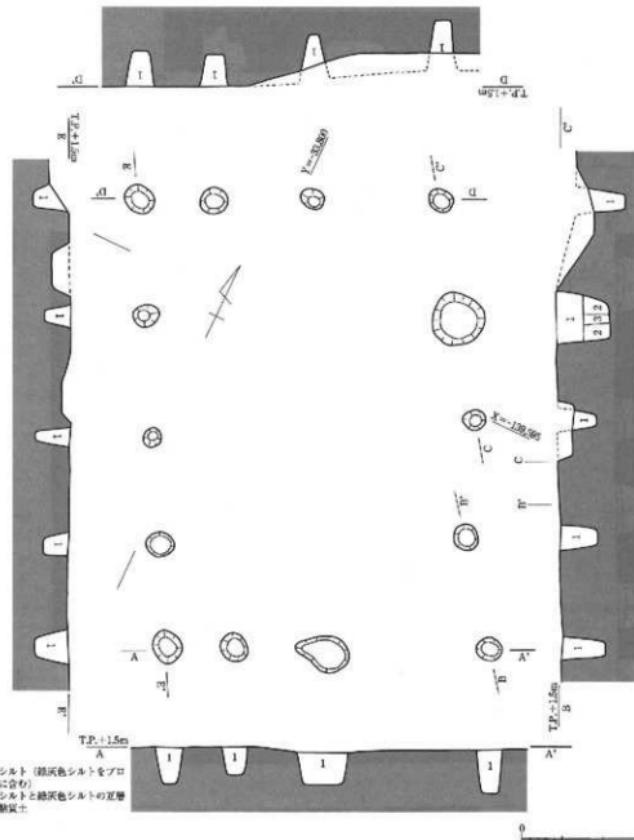
第6図 挖立柱建物跡 4 平・断面図

調査区の北西半部付近で検出した。北西および南東側に梁を持つ梁間2間×桁行間3間の掘立柱建物である。梁間3.9m、桁行間6.2mを測った。

柱穴は0.5m～0.9mの不整円形ないしは不整梢円形状の掘方を呈し、深さは0.4m～0.7mを測った。10ヶ所の柱穴のうちの7ヶ所で柱根が残存していた。樹種同定の結果、材質はシャシャンボ、ネジキ、リョウブの3種が確認された。

建物を構成する各柱穴の掘方内から須恵器、土師器、製塙土器などが出土しており、これらにより、掘立柱建物跡8はTK4.3段階に位置付けられるものと思われる。

掘立柱建物跡8 出土遺物（第15図7～11）



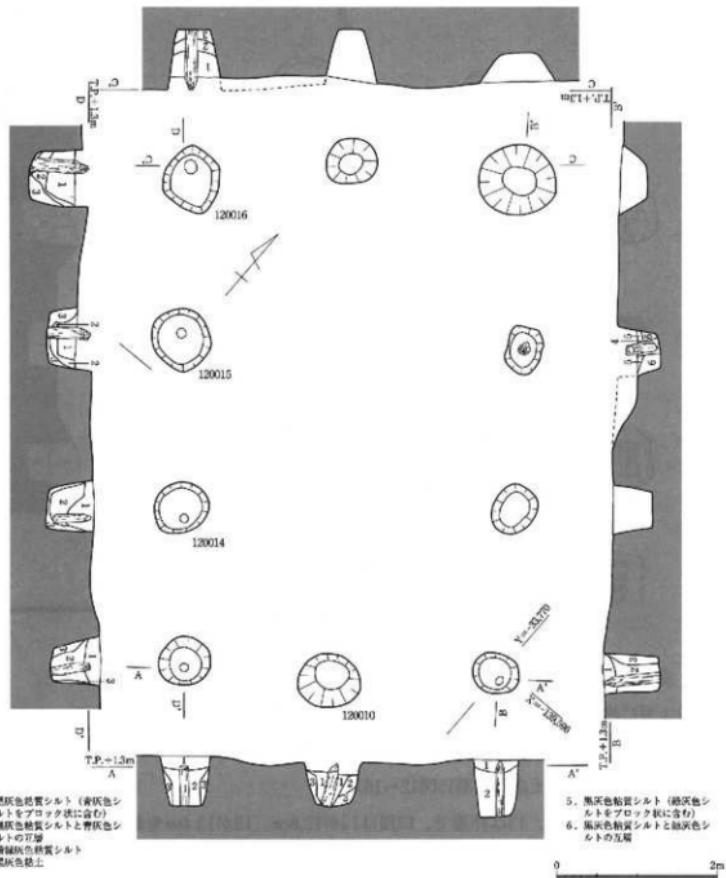
第7図 堀立柱建物跡7平・断面図

須恵器（7～9） 7は杯身で、口縁の立ち上がりはほぼ直立し、端部は丸くおさまる。口径11.3cmを測る。8の杯蓋は、天井部が低く、稜を持たない。9は高杯の脚部である。長方形の透かし孔を持つ。7はTK43段階まで遡る可能性があり、混入品の可能性がある。

土師器（10、11） 10は口径13.9cmを測る杯である。口縁部は短く直立し、底部をヘラケズリするため底平を呈する。11は瓶の口縁部で、端部は平坦面を持つ。外面はハケ調整、内面はナデ調整およびハケ調整を施す。

#### 掘立柱建物跡10（第9図）

調査区の北西半部の北端中央付近で検出した。プランの大部分はC地区にあり、南梁側の3ヶ所の柱穴がB地区で検出されたのみであったが、C地区的成果を重ね合わせると、南北に梁を持



第8図 掘立柱建物跡 8 平・断面図

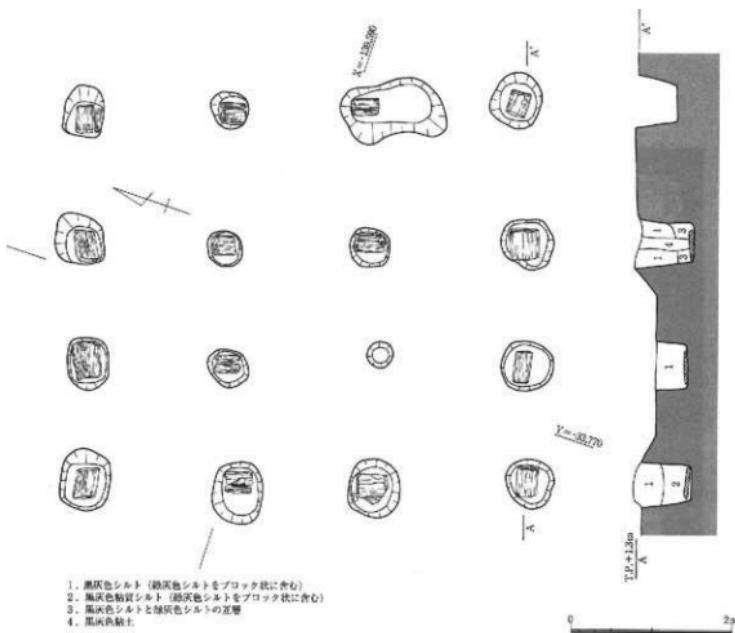
つ梁間3間×桁行間3間の掘立総柱建物となった。梁間4.7m、桁行間5.5mを測った。

B地区内の柱穴はいずれも0.5m内外の不整円形状の掘方を呈し、深さは0.7mで、礎板がみられた。柱材は認められなかったが、1ヶ所に柱痕が認められた。

B地区的柱穴から遺物は出土しなかったが、C地区での成果により、掘立柱建物跡10は古墳時代後期初頭～前半（MT 15～TK 10段階）に位置付けられるものと思われる。

カマド 131300（第10図、図版6）

調査区の北西半部の、掘立柱建物跡8の南西に隣接する位置で検出した。遺存状況が悪く、床面と奥壁の基底部の一部を除いて削平されており、全体の形状は把握できなかつたが、ほぼ中央



第9図 挖立柱建物跡10平・断面図

部には、支脚の抜き取り痕と思われる小穴が認められた。規模は0.8m×0.8mを測った。

炭層の上面に堆積した土層より、須恵器、土師器などが出土した。それらにより、カマド131300はTK4段階に位置付けられるものと思われる。

#### カマド131300出土遺物（第15図12～16）

須恵器（12～14） 12、13は杯蓋で、口径は12が12.8cm、13が13.4cmを測る。12の天井部内面に同心円文の当て具痕が残る。14は杯身で、立ち上がりは短く内傾し、口径13.7cmを測る。

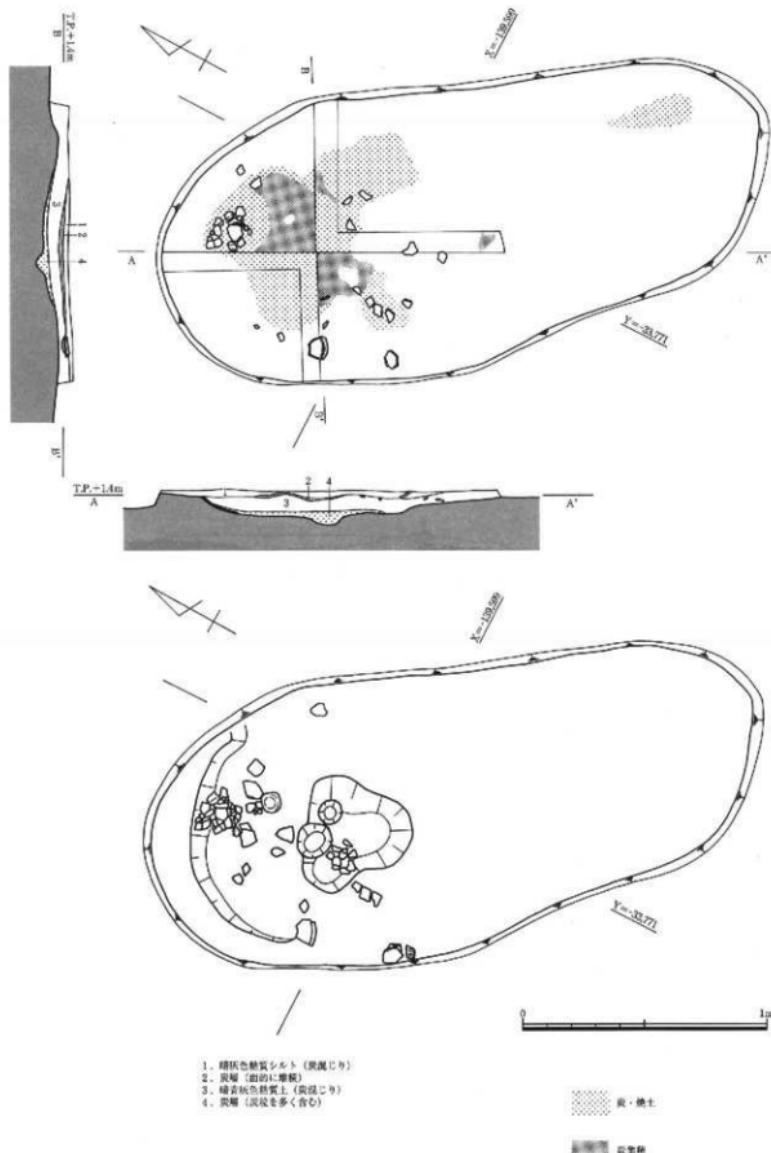
土師器（15、16） 15は体部が球形を呈する甕で、体部外面は縦または斜め方向のハケ調整を施し、上半部には煤が付着する。口径10.7cmを測る。16は土師器甕を模したミニチュア土製品である。口縁部を欠損する。底部を手づくね成形し、外面上半はハケ調整を施す。

#### カマド131301（第11図、図版6）

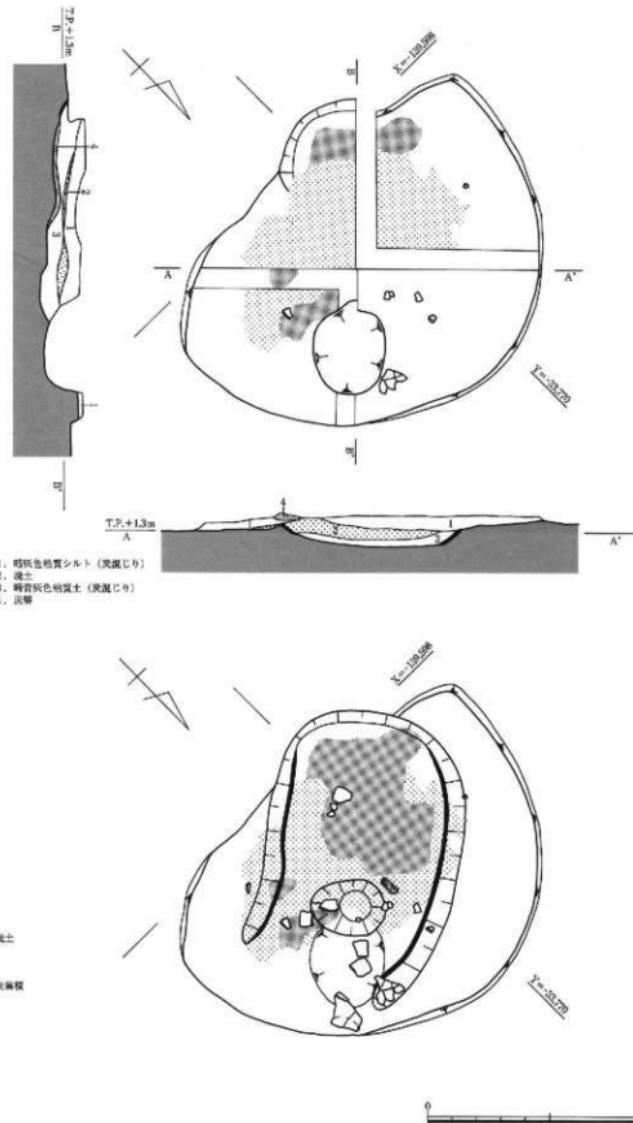
調査区の北西半部の、カマド131300の北東に隣接する位置で検出した。カマド131300と同様に遺存状況はよくないが、基底部は概ね残存しており、0.8m×1.2mの規模を測った。

炭層の上面に堆積した土層より、須恵器、土師器などが出土した。それらにより、カマド131301は古墳時代後期前半（TK10段階）に位置付けられるものと思われる。

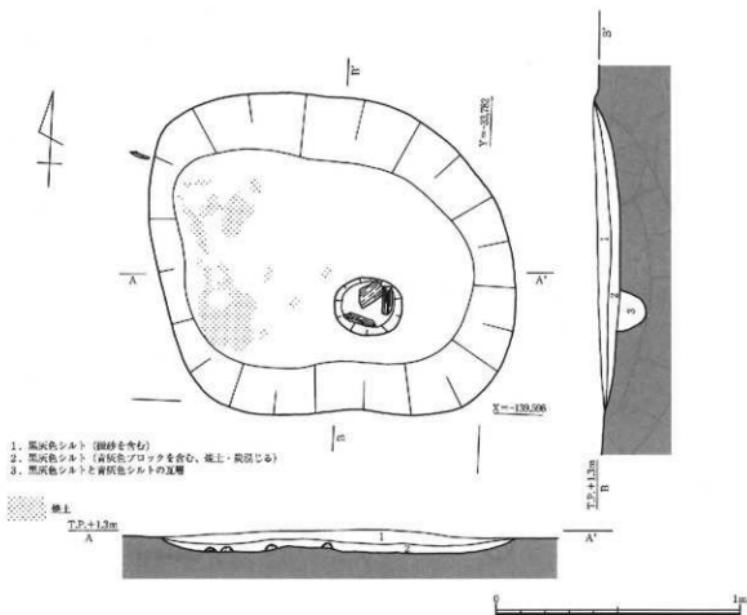
#### 土坑131083（第12図）



第10図 カマド131300平・断面図



第11図 カマド131301平・断面図



第12図 土坑131083平・断面図

調査区の北西半部で検出した。不整橢円形状を呈する土坑で、長軸1.5m、短軸1.3m、深さ0.1mを測った。埋土は青灰色のブロックが混じる黒灰色シルトで、炭や焼土を含む。埋土内から須恵器、土師器、韓式系上器、滑石製有孔円板などが出土した。それらにより、土坑131083はTK10段階に位置付けられるものと思われる。

#### 土坑131083出土遺物（第15図17～19）

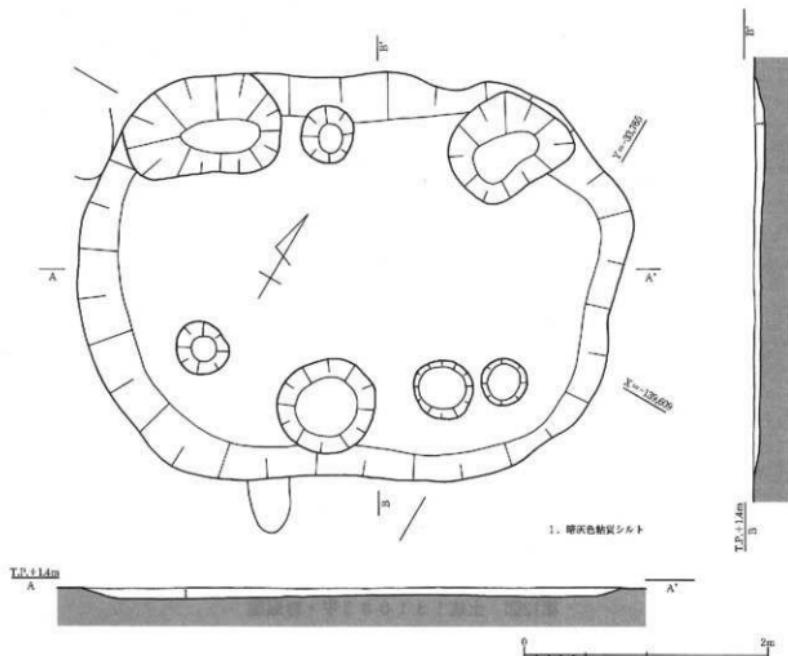
須恵器（17、18） 17は口径14.2cmを測る杯蓋で、稜線は不明瞭である。18は杯身で、立ち上がりは短く内傾し、口径17.0cmを測るやや大型品である。

土師器（19） 19は口径10.0cmを測る甕で、最大径は体部中位よりやや下がったところにある。体部外面は上半がナデ、下半が縦方向のハケ調整、内面は板状工具によるナデ調整を施す。外面下半に煤が付着する。

#### 土坑130357（第13図）

調査区の北西半部で検出した。不整橢円形状を呈する土坑で、長軸4.25m、短軸3.2m、深さ0.1mを測った。埋土は暗灰色粘質シルトで、部分的に炭や焼土を含む。埋土内から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。それらにより、土坑130357はTK10段階に位置付けられるものと思われる。

#### 土坑130357出土遺物（第15図20、21）



第13図 土坑130357平・断面図

須恵器(20) 20は杯蓋で、口縁端部は内傾し、面を持つ。口径11.7cmを測る。

土師器(21) 21は甌の口縁部で、外面にハケ調整を施す。口径13.1cmを測る。

#### 土坑131200

調査区の北西半部で検出した。不整橢円形状を呈する土坑で、古墳時代中期の遺構を切った状態で検出された。長軸3.8m、短軸1.2m、深さ0.1mを測った。埋土内から須恵器、土師器、斧状石製品などが出土した。それらにより、土坑131200はTK10段階に位置付けられるものと思われる。

#### 土坑131200出土遺物（第15図22～36）

須恵器(22) 22は杯身で、立ち上がりは短く、口縁端部は丸くおさめる。

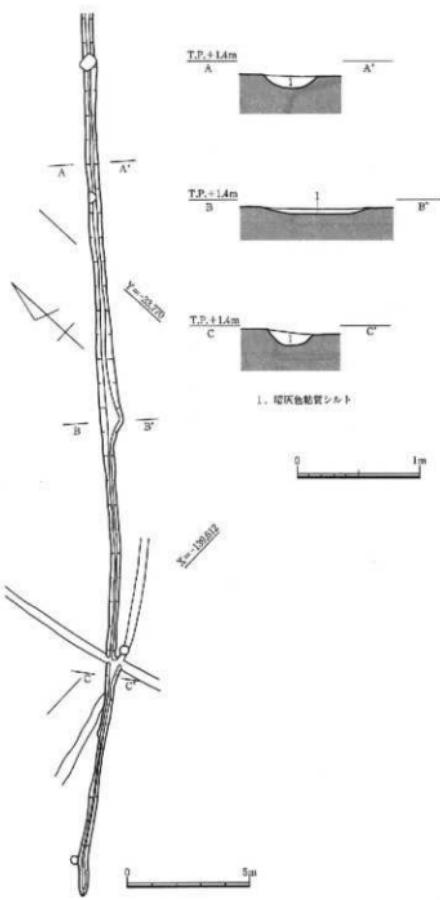
土師器(23～35) 23～29は甌の口縁部である。24～26は短く外反し面を持ち、23、27～29は内面が肥厚し、端部をつまみあげる。24は口径15.8cm、29は23.0cmを測る。32は甌底部で、外面に煤が付着する。30は口径20.2cmを測る鉢で、短く外反する口縁部を持つ。31、33は瓶の口縁部で、いずれもハケ調整する。31は口縁部が外反して延び、33は端部がわずかに内弯する。34、35は造り付けカマドの焚き口に関係する遺物と考えられているU字形板状土製品である。34は一端

をL字状に折り返して突帯をつくるもので、厚さは突帯部が2.6cm、体部が1.4cmを測る。胎土は生駒西麓産である。35は粘土帯を接着して突帯をつくるものであるが、突帯は剥落し接合痕が残る。厚さは1.9cmを測る。

石製品（36）36は滑石製模造品である。片側に刃部をつくりだすことから斧を模したものと考えられる。長さ7.8cm、幅3.3cm、厚さ1.0cmを測る。

#### 溝130288（第14図）

調査区の北西半部で検出した。調査区北端部中央から南西方に走る溝で、幅0.16mから0.9m、深さ0.1m内外を測った。埋土内から須恵器が少量出土した。それらにより、溝130288はTK43段階に位置付けられるものと思われる。



第14図 溝130288平・断面図

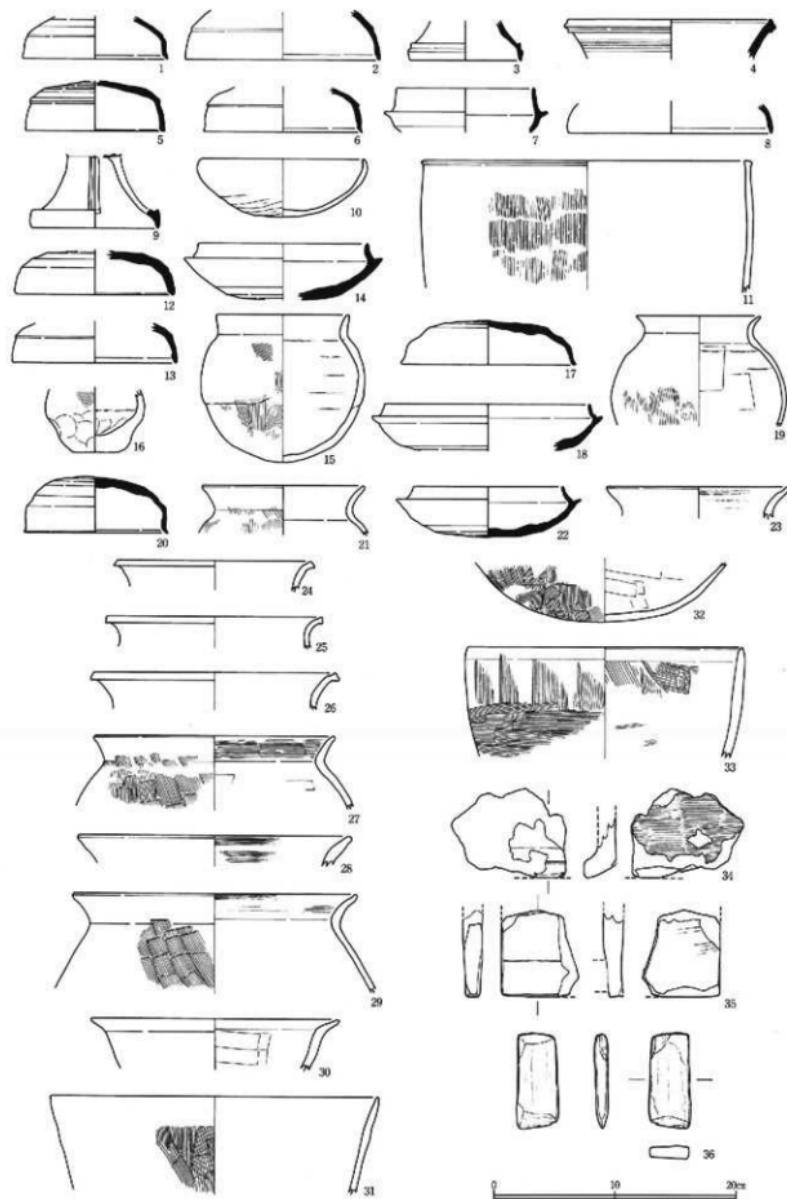
#### 2 古墳時代中期の遺構と遺物

竪穴住居址、掘立柱建物跡、墳墓、井戸、土坑、大溝、溝などがある。

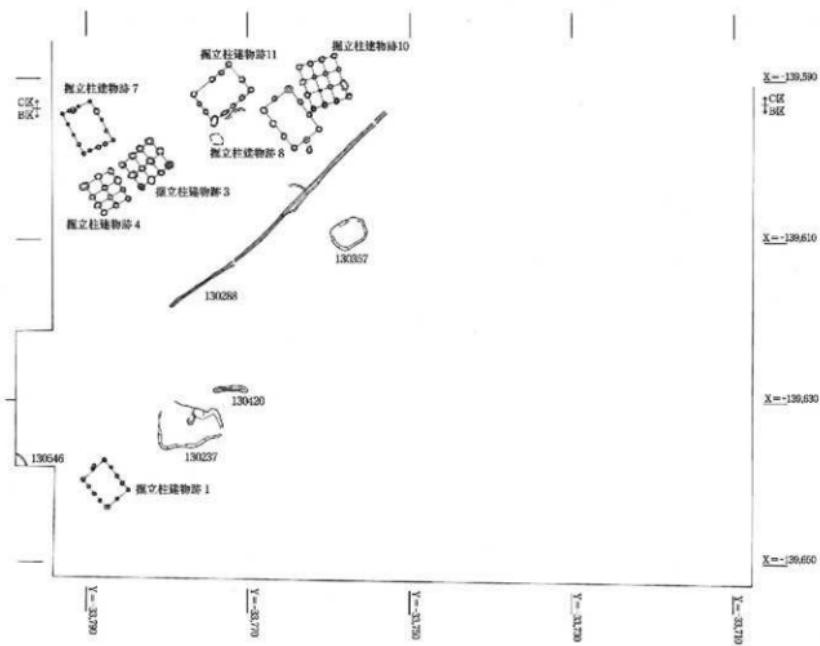
#### 竪穴住居址130475（第17図、図版9）

調査区の南西端部付近で検出した。カマドを持つ竪穴住居址で、隅丸方形状のプランを呈する。長軸5.7m、短軸5.4m、検出面から床面までの深さ約0.2mを測った。四壁の内側に沿うように、幅0.2m、深さ0.1mの壁溝を巡らす。

床面検出の際に、柱穴と思われるピットを複数検出し、住居の主柱穴4ヶ所を特定することができた。



第15図 古墳時代後期遺構出土遺物実測図



第16図 古墳時代後期遺構平面図

カマドは北壁側のほぼ中央部で検出された。遺存状態が悪く、支脚付近の床面が残存するのみで、その全容は不明である。支脚は土師器甌の口縁部が転用されており、端部を下に立てた状態で検出された（第18図、図版9）。

プラン内の埋土から須恵器、土師器などが出土した。それらにより、竪穴住居址130475は古墳時代中期後半（TK 23段階）に位置付けられるものと思われる。

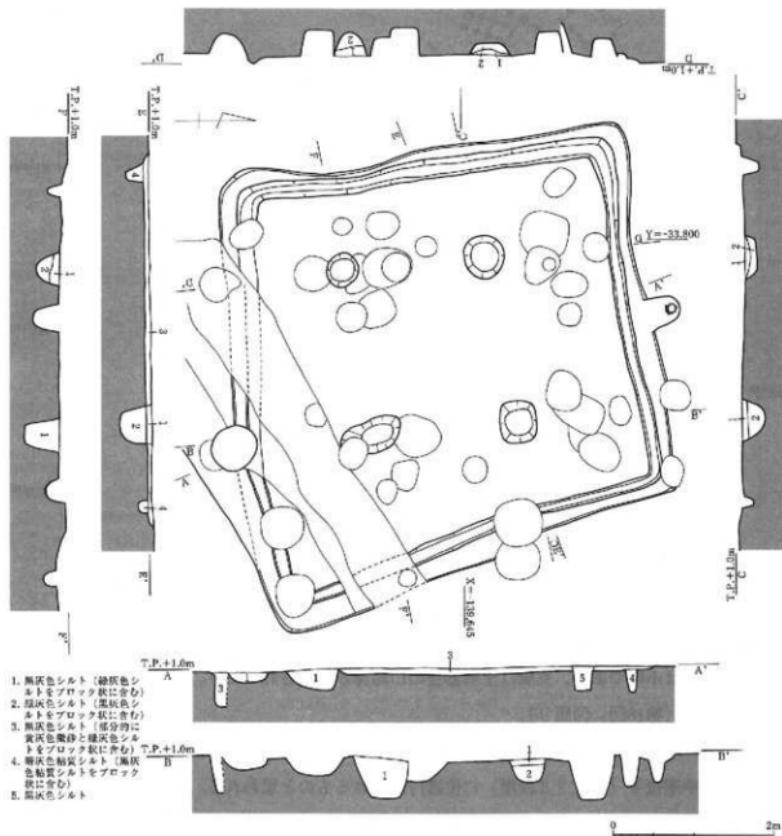
#### 竪穴住居址130475出土遺物（第25図37～39）

土師器（37～39） 37、38は甌の口縁部である。38はカマドの支脚として転用されていたもので、口径11.3cmを測る。39は移動式カマドの掛口の破片で、胎土は生駒西麓産である。天井部で屈曲し、掛口は幅約3.5cmの平坦面を持つ。

#### 竪穴住居址130902（第19図、図版10）

調査区の西北半部で検出した。造り付けのカマドを持つ竪穴住居址で、隅丸形状のプランを呈する。長軸4.6m、短軸4.4m、検出面から床面までの深さ約0.1mを測った。四壁の内側に沿うように、幅0.2m、深さ0.1mの壁溝を巡らすが、北壁側の西端部付近と東壁側の中央部付近に切れ目がある。

床面検出の際に、柱穴と思われるピットを複数検出し、住居の主柱穴4ヶ所を特定することができた。



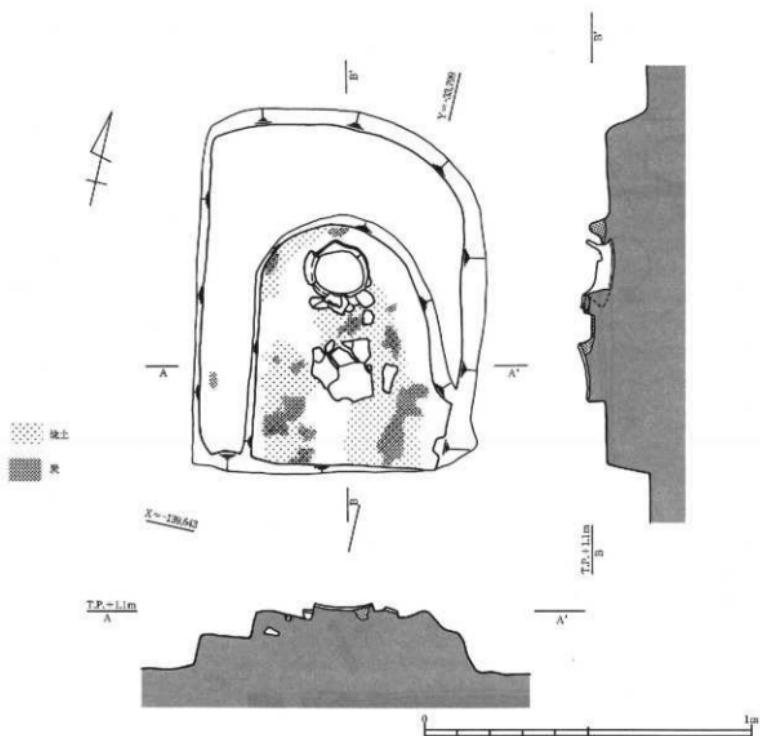
第17図 壁穴住居址 130475 平・断面図

カマドは北壁側の西端部付近で検出された。後世の遺構により搅乱をうけており、床面がごく一部残存するのみで、その全容は不明である。

プラン内の埋土から須恵器、土師器、製塩土器などが出土した。それらにより、壁穴住居址 130902 は古墳時代中期末（TK47段階）に位置付けられるものと思われる。

#### 壁穴住居址 130902 出土遺物（第25図40～44）

須恵器（40～43） 40、41は杯蓋である。40は天井部が平坦で、稜線も鋭く、TK208型式に遡る可能性がある。41は口径13.0cmを測り、器高が高く天井部は丸みを持つ。42は底部を欠く杯身で、立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさまる。口径10.9cmを測る。43は壺もしくは甕の口縁部である。口縁端部を下方へ肥厚させ稜線をつくり、その下方に波状文を施す。口径16.4cmを



第18図 竪穴 130475 カマド平・断面図

測る。

土師器 (44) 44は球形の体部を持つ壺で、口径13.0cmを測る。外面全体に煤が付着する。

掘立柱建物跡 2 (第20図、図版10)

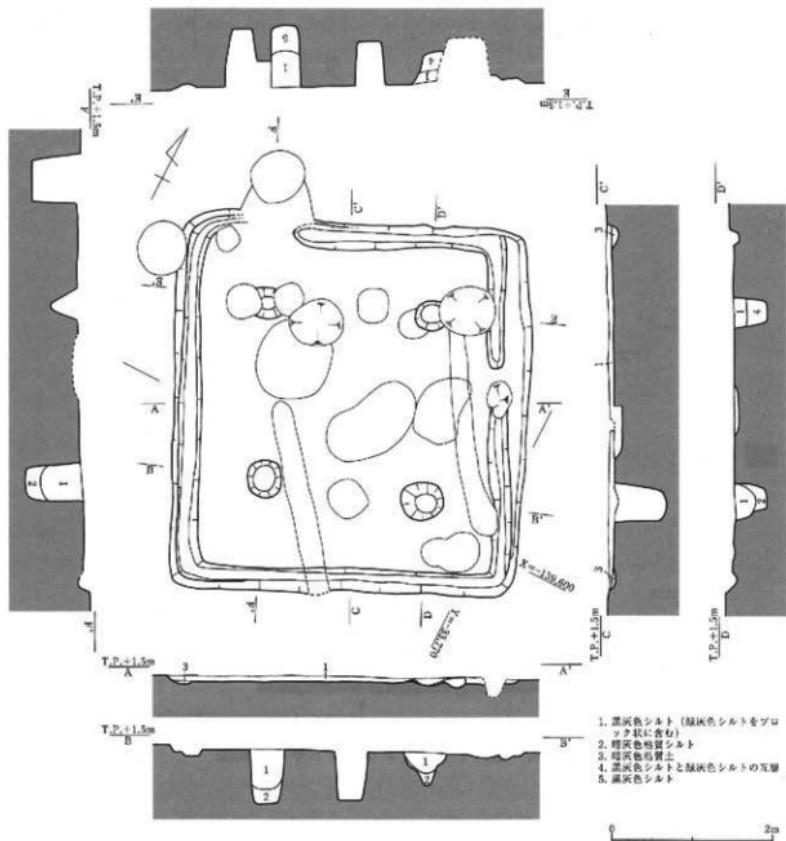
調査区の北西半部で検出した。西および東側に梁を持つ梁間2間×桁行間3間の掘立総柱建物である。北東コーナー部分の柱穴は、井戸131000に切られて欠損していた。梁間4.0m、桁行間4.75mを測った。

柱穴は0.5m～0.7mの不整円形ないしは不整梢円形状の掘方を呈し、深さは0.3m～0.5mで、柱およびその痕跡、礎板などは認められなかった。

建物を構成する各柱穴の掘方内から須恵器、土師器などが出土している。図化できるものはなかったが、これらにより、掘立柱建物跡2はTK23段階に位置付けられるものと思われる。

掘立柱建物跡 5 (第21図、図版11)

調査区の北西半部付近で検出した。西および東側に梁を持つ梁間2間×桁行間2間の掘立柱建



第19図 堅穴住居址 130902 平・断面図

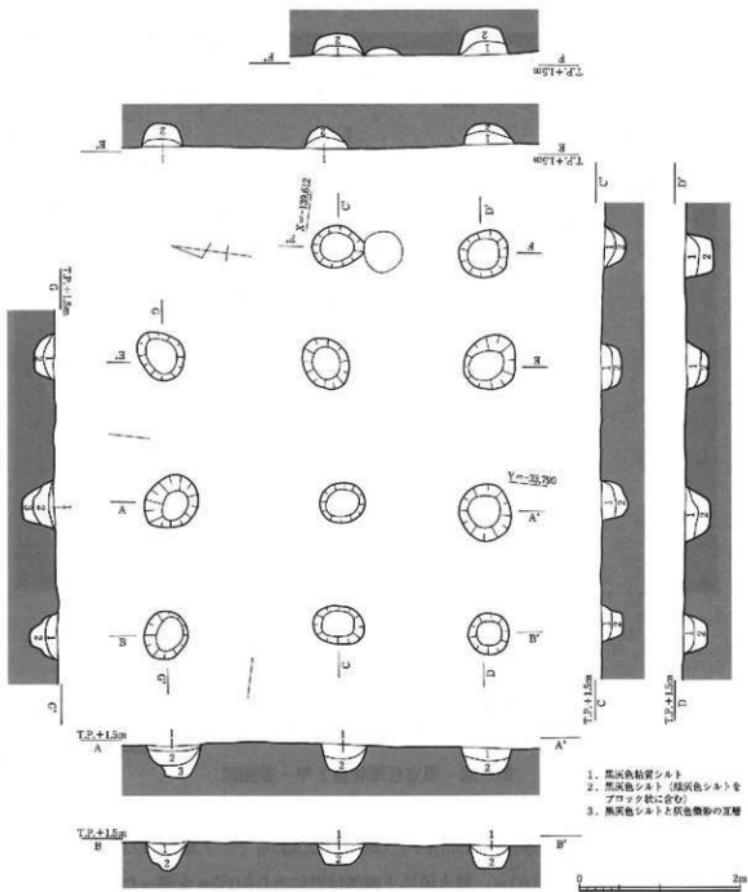
物である。梁間4.0m、桁行間4.7mを測った。

柱穴は0.5m～0.9mの不整円形ないしは不整橢円形状の掘方を呈し、深さはいずれも0.5m内外を測った。8ヶ所の柱穴のうち6ヶ所で柱根と礎板が、1ヶ所に礎板が残存していた。樹種同定の結果、柱根がいずれもヒノキで、礎板はモミ、スギ、ヒノキ、スダジイの4種が確認された。

建物を構成する各柱穴の掘方内から須恵器、土師器などが出土しており、これらにより、掘立柱建物跡5はTK47段階に位置付けられるものと思われる。

#### 掘立柱建物跡5 出土遺物（第25図45）

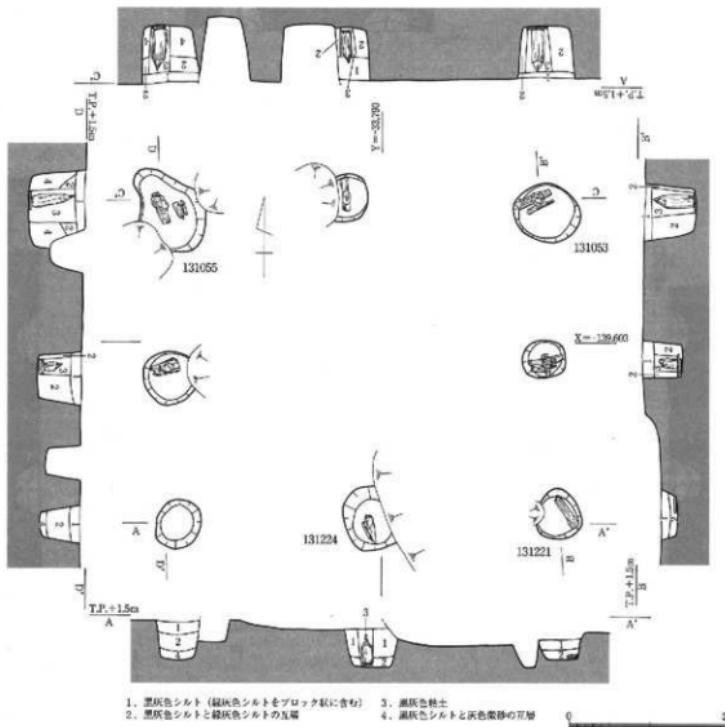
須恵器（45） 45は高杯で、脚部の破片である。台形状の透かし孔が残存する。



第20図 挖立柱建物跡 2 平・断面図

井戸 131000 (第22図、図版12)

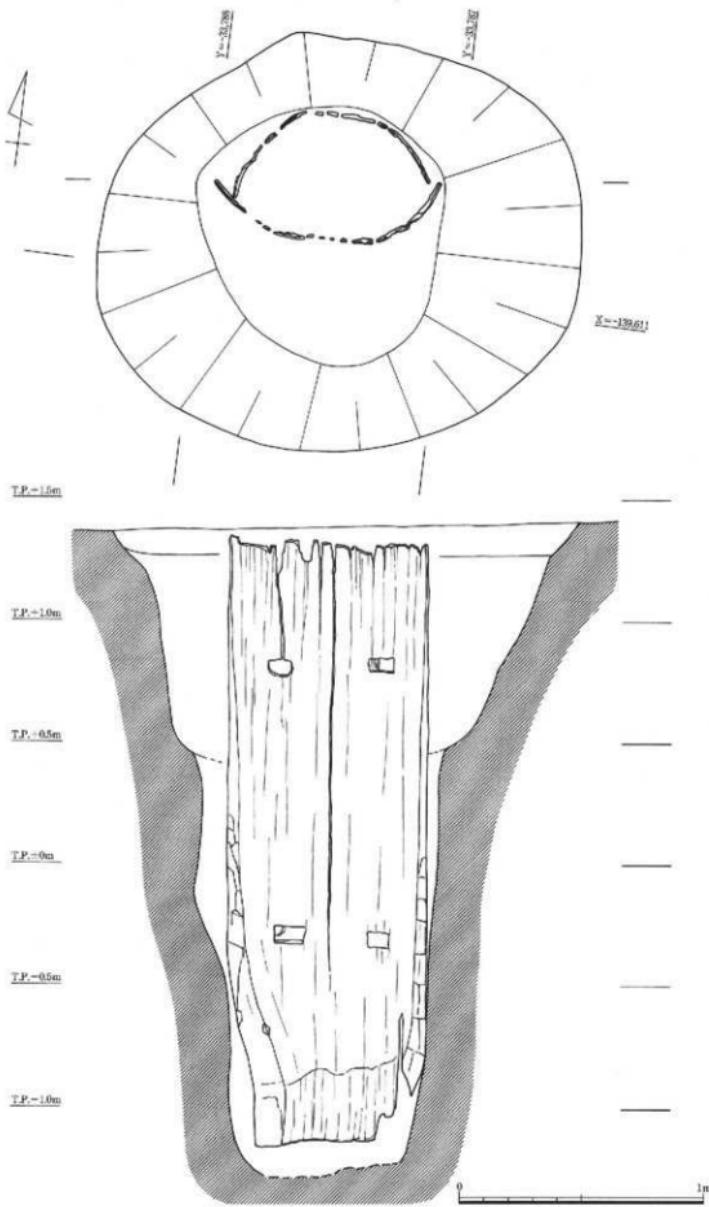
調査区の北西半部で検出した。木棒を持つ井戸で、掘立柱建物跡2の北東コーナーの柱穴を切った状態で掘方が検出された。掘方は上端が長軸1.95m、短軸1.7mの楕円形状を呈し、そこから0.9mの深度で径1mの円形にすぼまり、その後は垂直に近い形で1.7m掘り込まれ、いわゆるラッパ状の断面形を呈する。井戸底までの深度2.6mを測った。掘方内には、剝り船を切断して転用した井戸棒が据えられていた。井戸棒の平面形は長軸0.8m、短軸0.5mの楕円形状を呈し、長軸を東西方向にして、掘方中段の北壁側に寄せて据え付けたうえで、掘方を埋め戻している。



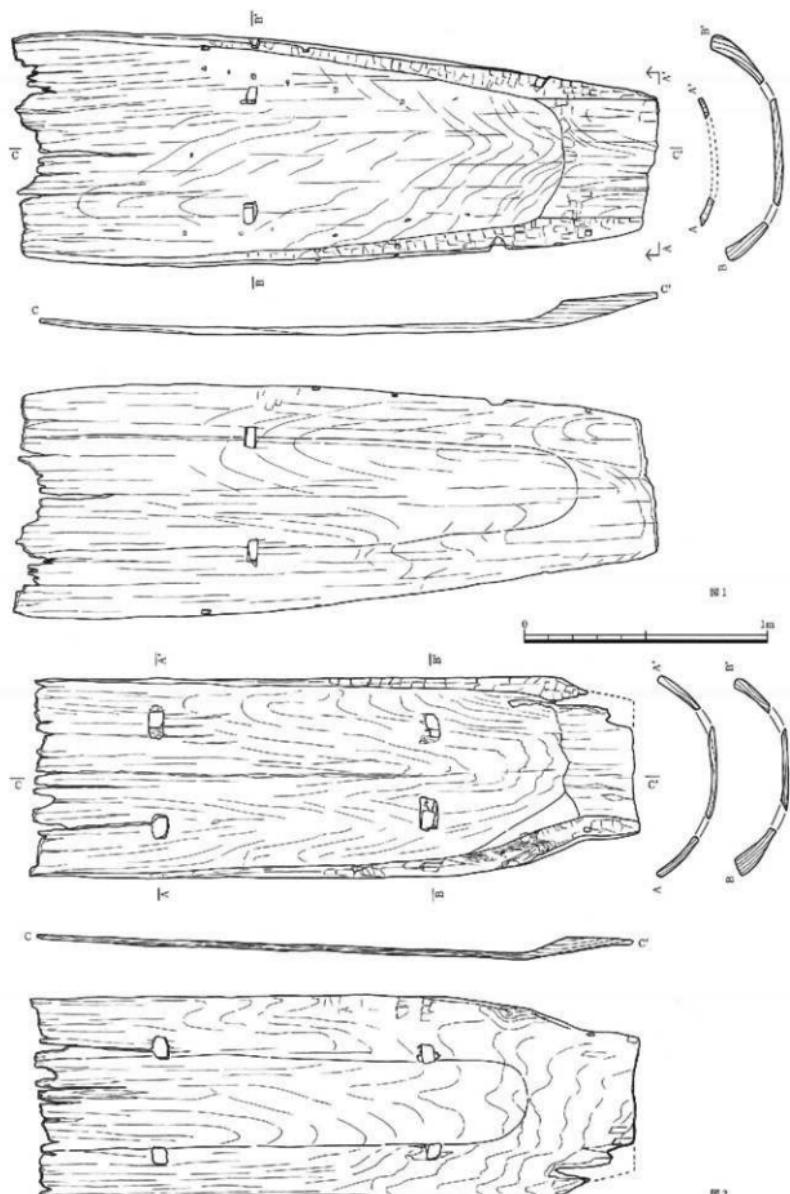
第21図 掘立柱建物跡 5平・断面図

井戸枠として使用されたのは削り船を転用した木材で、スギの巨木を削り抜いて作られている。南側の井戸枠に使用された部材（第23図1）は現存長2.635mで、上端部幅0.9m、下端部幅0.55m、厚みは上端部が最少で0.03m、最大値は下端部付近にあり0.065mを測った。上端から下端にかけて、左右対称に緩やかに内弯する形状と、下端部には内側の削り抜きがみられないことなどからみて、削り船の舳部分の部材と考えられ、さらに井戸枠として転用された際に、下端付近の内側の上面が削られていたため明確ではないが、左舷側に4ヶ所、右舷側に3ヶ所舷側板を設置するためのほぞ穴が穿たれていることから、準構造船の削り船部分の、舳付近の部材と考えられる。また、船底にも左右2個一対のほぞ穴がみられるが、この位置にほぞ穴を穿つとは考えられず、これらは井戸枠に転用した際に穿たれたものといえる。

北側の井戸枠に使用された部材（第23図2）は現存長2.495mで、上端部幅0.8m、下端部幅0.55m（復元）、厚みは上端部が最少で0.02m、最大値は下端部付近にあり0.075mを測った。上端から下端にかけて、ほぼ同幅でのび、下端部でいったんすぼまったあと再び平行に伸び終わる形

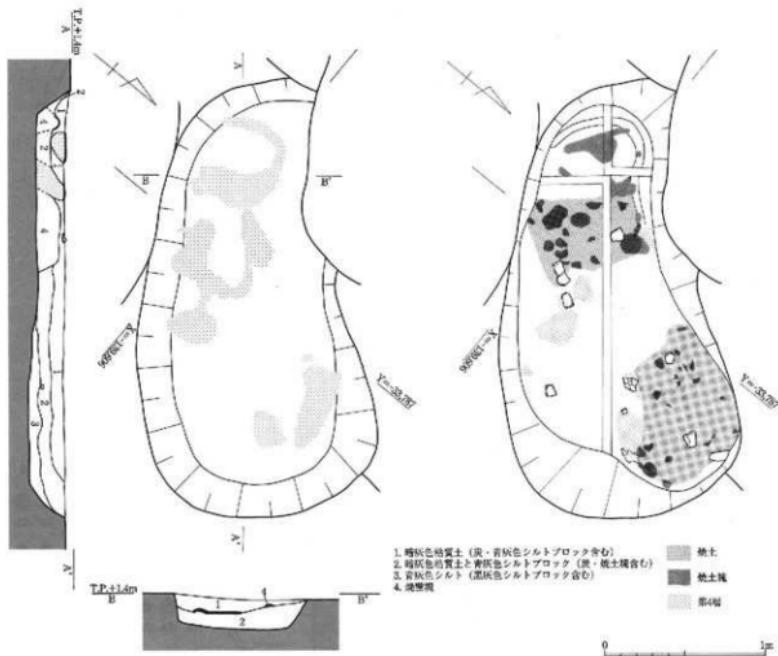


第22図 井戸131000平・立面図



第23図 井戸枠転用船材実測図

図2



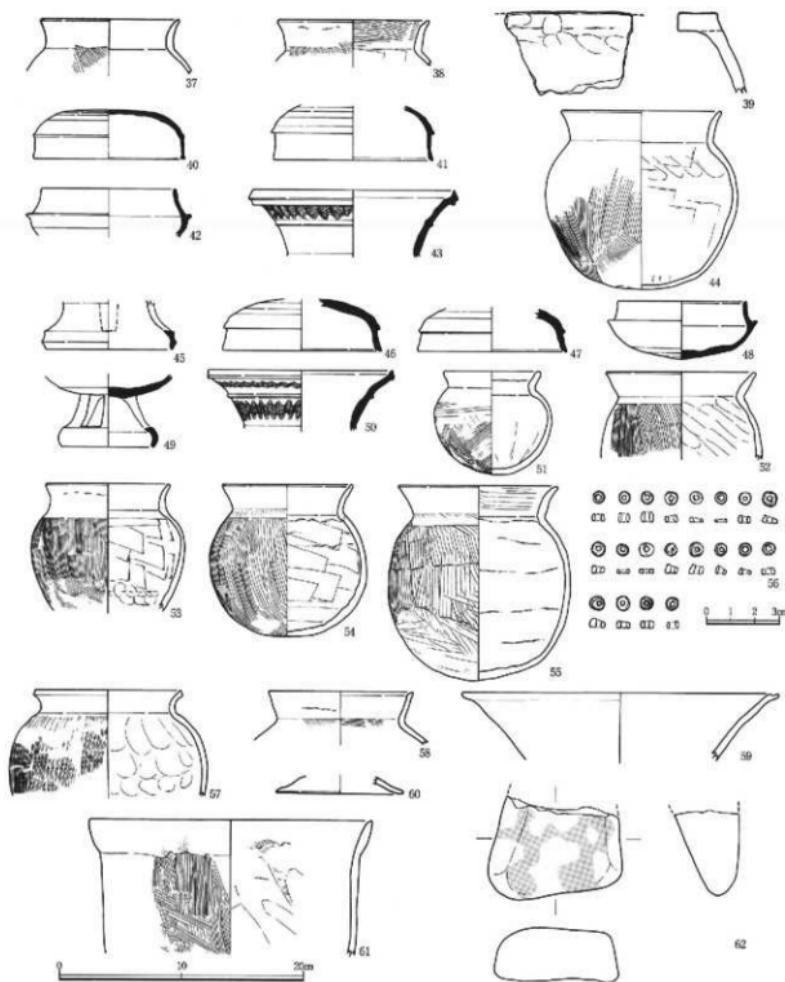
第24図 土坑131097平・断面図

状と、下端部には内側の削り抜きがみられないことなどからみて、削り船の艤部分の部材と考えられる。さらに井戸枠として転用された際に、下端付近の内側の上面が削られていたため明確ではないが、わずかにほぞ穴の痕跡がみられるため、やはり準構造船の削り船部分の、こちらは艤付近の部材と考えられる。また、船底には左右2個一対のほぞ穴が2ヶ所みられるが、1と同様にこれらも井戸枠に転用した際に穿たれたものといえる。

井戸131000からは、井戸枠内および掘方内から須恵器、土師器、獸骨、ヒョウタン、桃などの種子が出土している。これらから井戸131000はTK47段階に位置付けられるものと思われる。

#### 井戸131000出土遺物（第25図46～56、図版21）

須恵器（46～50） 46、47は杯蓋で、いずれも器壁がやや厚く、口縁部が外方へ開き、口縁部は内傾する面を持つ。口径は46が12.8cm、47が12.1cmを測る。48は杯身で、やや尖り気味の底部を持ち、口径10.5cmを測る。49は有蓋高杯の脚部で、3方に長方形の透かし孔を持つ。底径7.4cmを測る。50は壺もしくは甕の口縁部である。頸部に稜をつくり、その上方に5本原体、下方に10本原体の波状文を施す。口径16.4cmを測る。



第25図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図(1)

土師器 (51-55) 51-55は球形を呈する体部を持つ甌である。いずれも体部外面に縦または斜め方向のハケ調整を施す。内面は51、53、54は板状工具によるナデ、52、55はナデ調整を施す。55は内面底部に炭化物が付着する。口径は51が7.8cm、55が12.9cmを測る。

石製品 (56) 56は滑石製白玉である。直径4.5~6.5mm、厚さ1.2~4.5mmで、直径5.0~5.5mm前後のものが多い。いずれも色調は暗緑色を呈し、穿孔は片側からを行い、側面を研磨している。

### 土坑131097（第24図）

調査区の北西半部で検出した。不整形円形状を呈する土坑で、長軸2.8m、短軸1.2m、深さ0.2mを測った。埋土に焼土、炭などが多量に含まれ、これらを除去すると焼壁らしき痕跡が確認された。したがって土坑131097はカマド状の遺構と思われる。埋土内から韓式系土器、土師器などが出土地おり、これらから土坑131097は古墳時代中期前半（TK216段階）に位置付けられるものと思われる。

土坑131097出土遺物（第25図57～62）

土師器（58～61） 58は甌の口縁部である。端部は内傾し、面を持つ。口径は11.8cmを測る。59は口縁部が大きく外方に開く高杯の杯部で口径25.8cmを測る。60は高杯の裾部である。61は甌の口縁部で、直立する体部から口縁部がわずかに開く。外面に縱方向のハケ調整を施す。

韓式系上器（57） 57は甌である。短い口縁部を持ち、体部外面に格子状タタキ、内面はナデ調整を施す。色調は灰黄褐色を呈する。口径は13.9cmを測る。

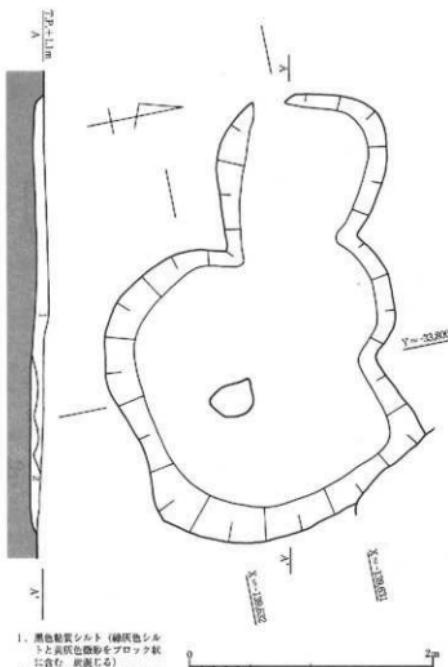
石製品（62） 62は台石である。一部研磨面を持ち、砥石として使った可能性がある。被熱による黒化が見られる。

### 土坑130567（第26図、図版13）

調査区の南西半部で検出した。長軸を東西に持つ不整形形状の土坑で、長軸3.8m、短軸1.2m、深さ0.2mを測った。検出時には確認できなかったが、本来は大小2基の不整形圓形状土坑が重複していたものと思われる。東半大型の土坑の埋土内から、須恵器、土師器などとともに大量の製塙土器が出土した（第27図）。これらから、土坑130567は古墳時代中期中葉（TK208段階）に位置付けられるものと思われる。

### 土坑130567出土遺物（第28図63～107）

須恵器（63～77） 63～72は杯蓋で、口径は11.2～13.2cmの範囲にある。63、64は天井部がやや丸みを帯びる。63、66～69の外面には自然釉が付着する。73、74是有蓋高杯の蓋で、いずれも



第26図 土坑130567平・断面図

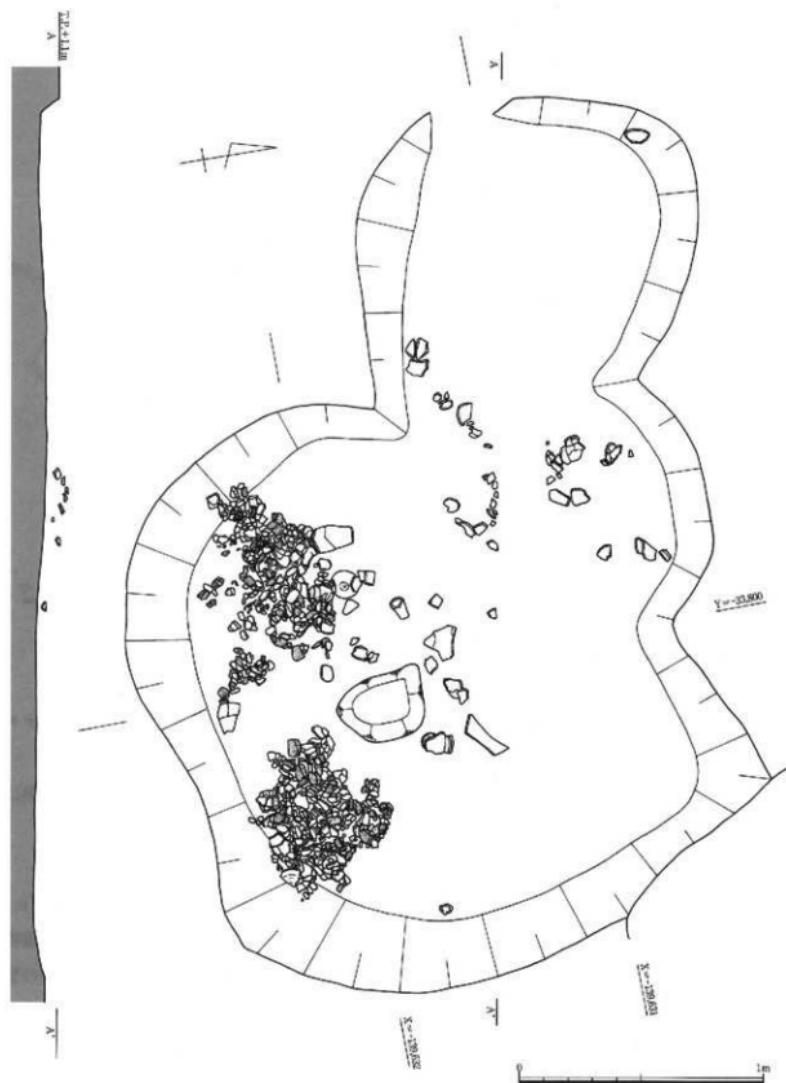
1. 黒色胎質シルト (緑灰色シルトと朱灰色胎質をブロック状に含む) 壁面に沿うる
2. 灰褐色胎質と緑灰色胎質シルトの互層

9  
2m

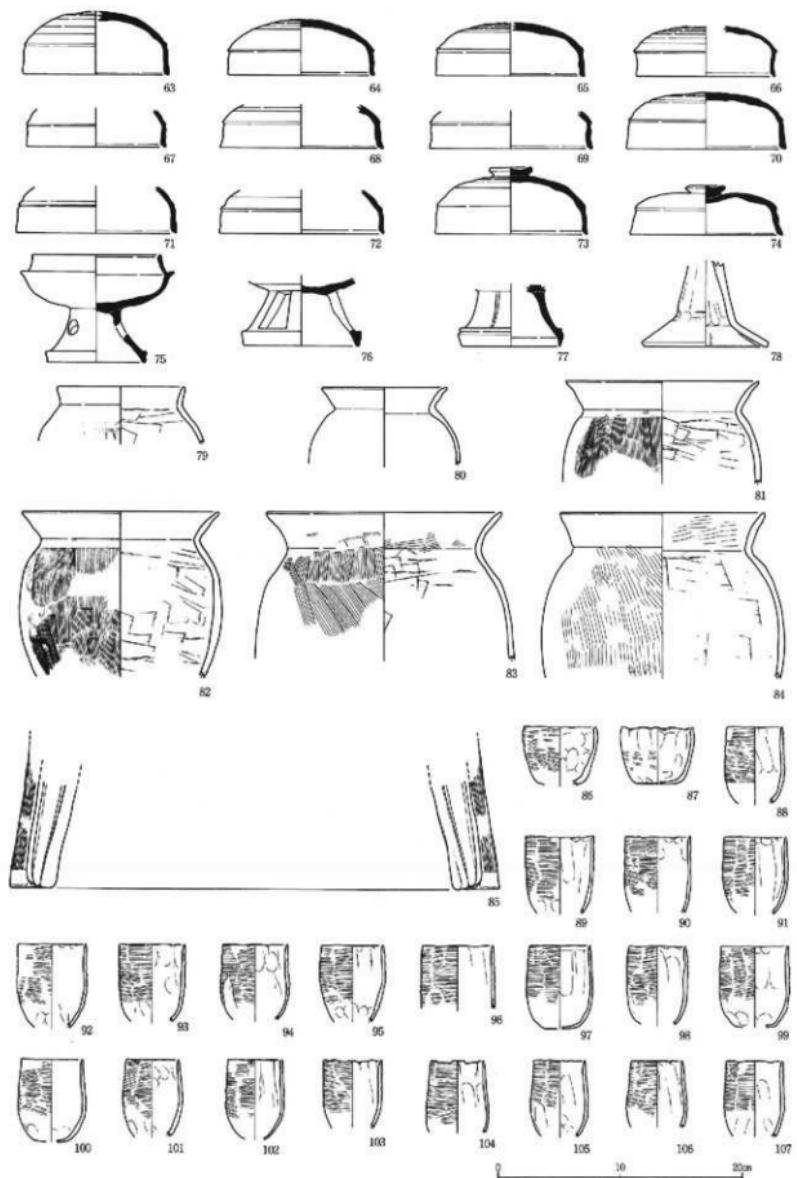
X=21.950  
Y=21.950

X=33.800  
Y=21.950

X=21.950  
Y=21.



第27図 土坑130567遺物出土状況



第28図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図（2）

中央に内側が凹むつまみが付く。73は口径12.4cm、器高5.5cm、74は口径12.3cm、器高4.0cmを測る。74の外面には自然釉が付着する。75は有蓋高杯で、杯部の立ち上がりはわずかに内傾し、脚部には3方に円形の透かし孔を持つ。口径10.8cmを測る。76、77は高杯脚部である。76は3方に長方形の透かし孔を持つ。底径は76が9.8cm、77が8.0cmを測る。

土師器（78～85） 78は高杯で、据部内面は板状工具によるナデ調整を施す。底径10.2cmを測る。79～84は甕である。口縁部は79、

84のようにわずかに外反するものと、80～83のように大きく外反するものがあり、いずれも体部外面を縦もしくは斜め方向のハケ調整、内面を板状工具によるナデ調整する。口径は79が10.3cm、83は18.9cmを測る。85は移動式カマドの基部である。外面は平行状タタキ、内面は板状工具によるナデ調整を施す。

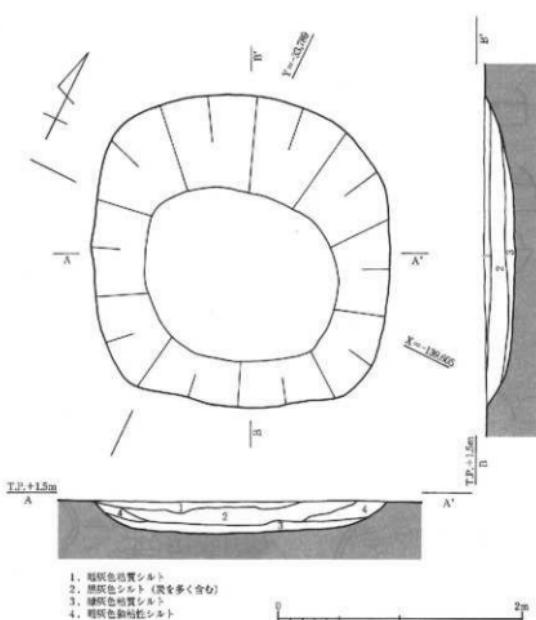
製塙土器（86～107） 88～107はいずれも薄型で丸底を持つもので外面は平行状タタキ、内面は縦方向のナデ調整する。86、87は器高が浅く、橢形を呈する。

#### 土坑131001（第29図、図版14）

調査区の北西半部で検出した。やや歪な隅丸方形状を呈する土坑で、長軸2.51m、短軸2.41m、深さ0.25mを測った。掘立柱建物跡5の柱穴や、土坑131002を切って掘られており、三者のなかで最も後出といえる。埋土内から須恵器、土師器、製塙土器が出土しており（第30図）、これらから土坑131001はTK47段階に位置付けられるものと思われる。

#### 土坑131001出土遺物（第35図108～137、第36図138～145）

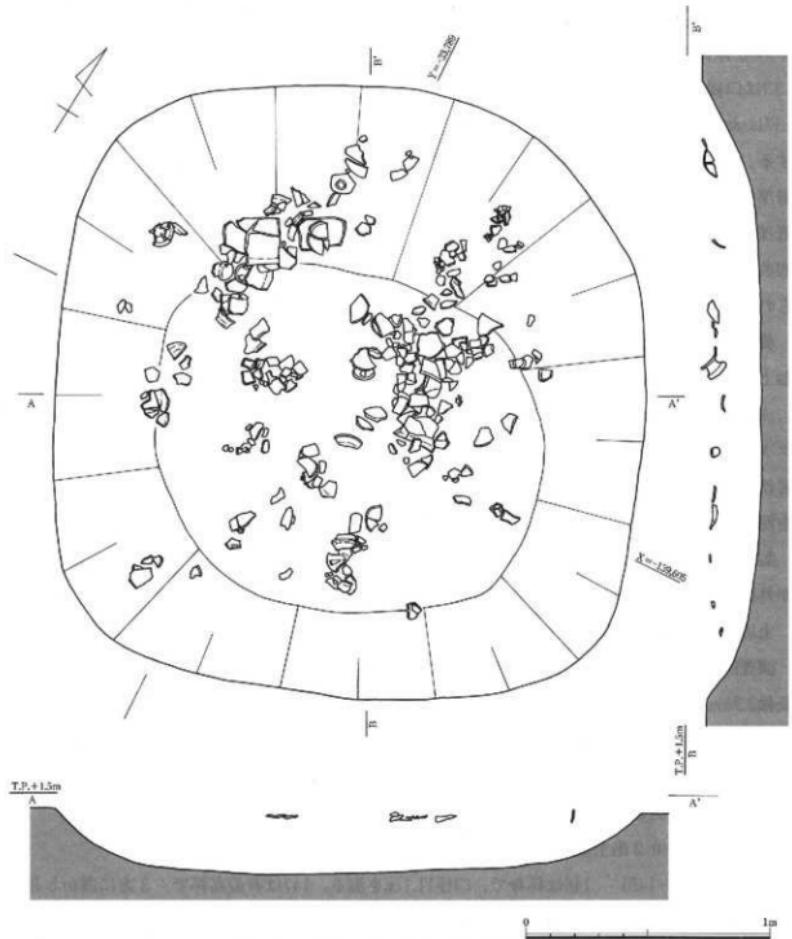
須恵器（108～126、128） 108～111は杯蓋で、口径は12.1～13.4cmの範囲にある。いずれも天井部が丸みを帯び、器高が高い。112～116は杯身で、口径は10.6～12.0cmの範囲にある。いずれも立ち上がりが内傾し、口縁端部に面を持つ。117～119は有蓋高杯である。118は口径9.9cmを測る。



第29図 土坑131001平・断面図

1. 線状色斑青シート
2. 純色シート（炭を多く含む）
3. 線状色斑青シート
4. 純色色斑青シート

1 2 3 4 0 2m



第30図 土坑131001遺物出土状況

119は3方に長方形の透かし孔を持つ。120～123は無蓋高杯で、口径は14.2～15.2cmの範囲にある。いずれも杯部外面に波状文を1段巡らせる。120は4方に長方形の透かし孔を持つ。121は3方に透かし孔を持ち、脚部中ほどにカキメを巡らせる。124、125は高杯の脚部である。どちらも3方に長方形の透かし孔を持つ。底径は124が8.0cm、125が8.7cmを測る。126は口縁部を欠損する處である。頸部に波状文、体部に櫛描き列点文を施す。128は体部が球形を呈する壺である。体部外面は平行状タタキの上にカキメを巡らせ、内面は同心円状タタキをナデ消す。

土師器（127、130～138） 127、  
130～133、135、136は甕である。い  
ずれも体部外面をハケ調整する。  
133は口縁部内面もハケ調整する。  
137は大型の甕の底部で、平底を呈  
する。134は鉢で、短く外反する口  
縁部を持つ。138は甕の底部である。  
底部中央に径約6cmの円形、周囲に  
複数の楕円形の蒸気孔を持つと考え  
られる。

韓式系土器（129） 129は甕で、  
胎土はやや粗く長石、金雲母を含み、  
にぶい橙色を呈する。外面を平行状  
タタキ調整し、体部中ほどにヘラ描  
き沈線を2条巡らせる。口径29.6cm  
を測る。

製塙土器（139～145） 139～145はいずれも薄型で、139のような丸底を持つものである。145  
が外面を平行状タタキ調整する他は外面ともナデ調整を施す。

#### 土坑131002（第31図、図版14）

調査区の北西半部の土坑131001の西側に接する位置で検出した。不整椭円形状の土坑で、  
長軸2.25m（復元）、短軸2.05m、深さ0.1mを測った。131001に切られており、前出である。  
また、掘立柱建物跡5の柱穴のひとつを切って掘られており、後出といえる。埋土内から須  
恵器、土師器が出土しており（第32図）、これらから土坑131002はTK47段階に位置付  
けられるものと思われる。

#### 土坑131002出土遺物（第36図146～148）

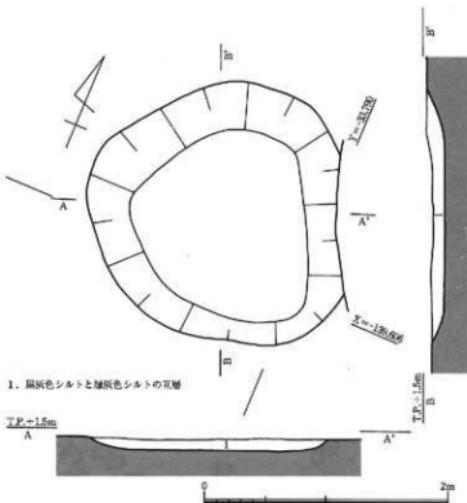
須恵器（146～148） 146は杯身で、口径11.1cmを測る。147是有蓋高杯で、3方に透かし孔の  
痕跡が残る。148は無蓋高杯の杯部で、突帶と沈線で区切られた部分に波状文を施す。

#### 土坑131103（第33図）

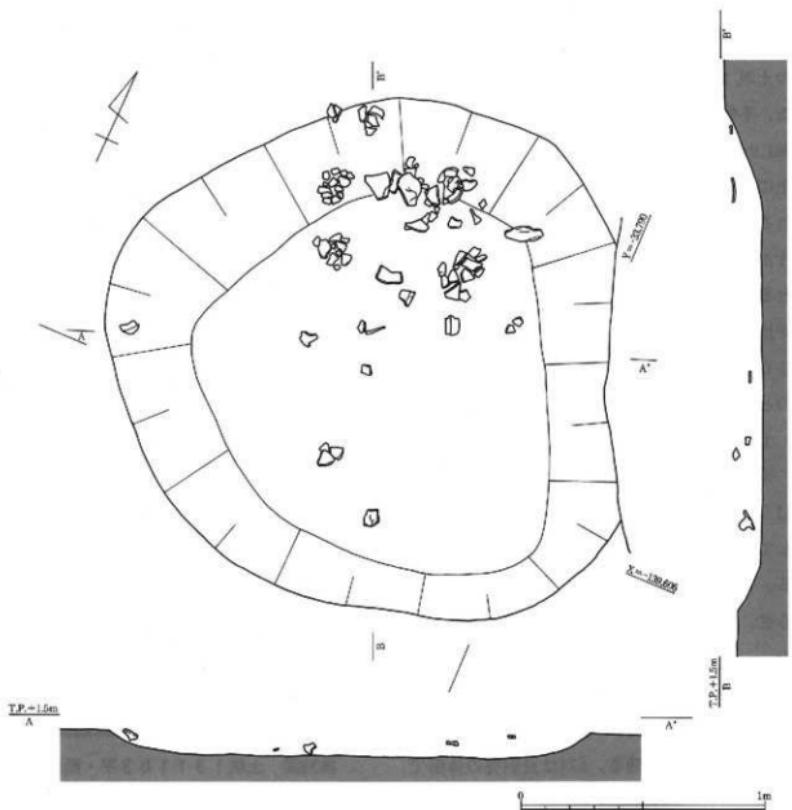
調査区の北西端部付近の周溝131101の東側に隣接する位置で検出した。不整長方形状を  
呈する土坑で、長軸2.75m（現存）、短軸1.52m、深さ0.53mを測った。周溝131101を切っ  
て掘られている。埋土内から須恵器、土師器が出土しており（第34図）、これらから土坑131  
103はTK23～TK47段階に位置付けられるものと思われる。

#### 土坑131103出土遺物（第36図149～168）

須恵器（149～162） 149～152は杯蓋で、口径は12.2～13.7cmの範囲にある。150は天井部が平



第31図 土坑131002平・断面図



第32図 土坑131002遺物出土状況

坦で口縁部がほぼ直立する。153～157は杯身で、口径は10.0～12.6cmの範囲にある。154は底部外面に一印のヘラ記号がみられる。158は無蓋高杯で、外面に波状文とカキメを施す。159は高杯の脚部で、3方に長方形の透かし孔を持つ。160、161は甕の口縁部で、160は口縁端部を下方に拡張する。161は端部が外反し下方に拡張する。162は肩部が張る甕で、外面は平行状タタキ、内面は同心円状タタキをナデ消す。

**土師器（163～167）** 163、164は甕の口縁部である。165、166は高杯である。165は楕形の杯部を持ち、口縁端部は丸くおさめる。166は3方に円形の透かし孔を持つ。167は移動式カマドの掛口の破片である。ヘラケズリで仕上げた幅約2.9cmの平坦面を持ち、外面は平行状タタキを施す。

**石製品（168）** 168は滑石製白玉である。直径6.0mm、厚さ3.5mmを測る。穿孔は片側からで、下方は若干広がり気味である。

### 土坑130965（第37図、図版15）

調査区の北西半部で、上半部をTK10段階の土坑130357に切られた状態で検出した。不整橢円形状を呈する土坑で、残存部で長軸1.9m、短軸0.85m、深さ0.2mを測った。埋土に焼土や炭が多く混じっており、壁土と思われる硬く焼け締った土もみられること、甌の破片が出土していることなどから、カマドと思われる。内部から須恵器、土師器、製塙土器などが出土しており（第38図）、これらから土坑130965はTK23段階に位置付けられるものと思われる。

### 土坑130965出土遺物（第39図169～178）

須恵器（169～171） 169は杯蓋で、口径11.9cmを測る。170は杯身で、口縁端部は内傾して面を持ち、体部の2分の1をヘラケズリする。171は高杯脚部である。外面にカキメを巡らせ、3あるいは4方に長方形の透かし孔を持つ。

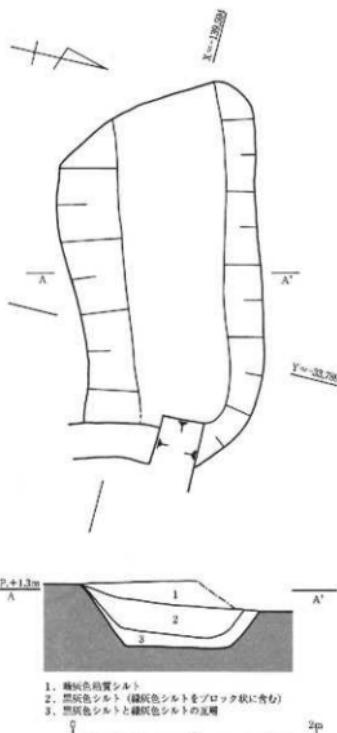
土師器（172～178） 172～174は甌である。172は球形の体部を持つもので、内面に粘土紐の接合痕が明瞭に残る。174は長胴甌の体部である。外面をハケ調整する。底部内面に炭化物が付着する。175～178は甌で、いずれも外面は縦あるいは斜め方向のハケ調整を施す。175は把手の剥離痕が見られる。176はほぼ直立する体部から口縁部がわずかに内傾する。177、178の把手は厚みがなく、先端を上方に屈曲させる。177は残存状況からみて、蒸気孔は橢円形が3個、中心に円孔が1個と考えられる。

### 土坑130417

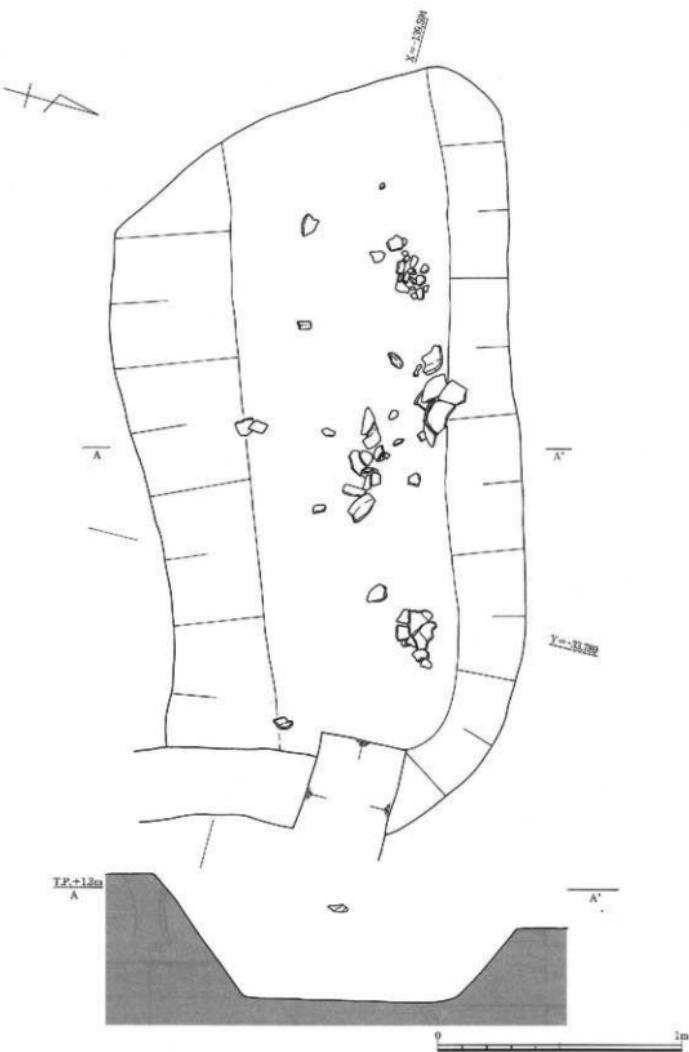
調査区の中央部付近で検出した。不定形状を呈する浅い土坑で、長軸8.5m、短軸2.7m、深さ0.2mを測った。土坑130417掘削後の床面で、土坑130765、土坑130764などが検出された。埋土内から須恵器、土師器、製塙土器、U字形板状土製品などが出土した。これらから土坑130417はTK23段階に位置付けられるものと思われる。

### 土坑130417出土遺物（第40図179～199）

須恵器（179～192） 179～182は杯蓋で、口径11.0～14.8cmの範囲にある。181はほぼ完形で、天井部を静止ヘラケズリする。183～186は杯身で、口径10.4～12.0cmの範囲にある。いずれも口

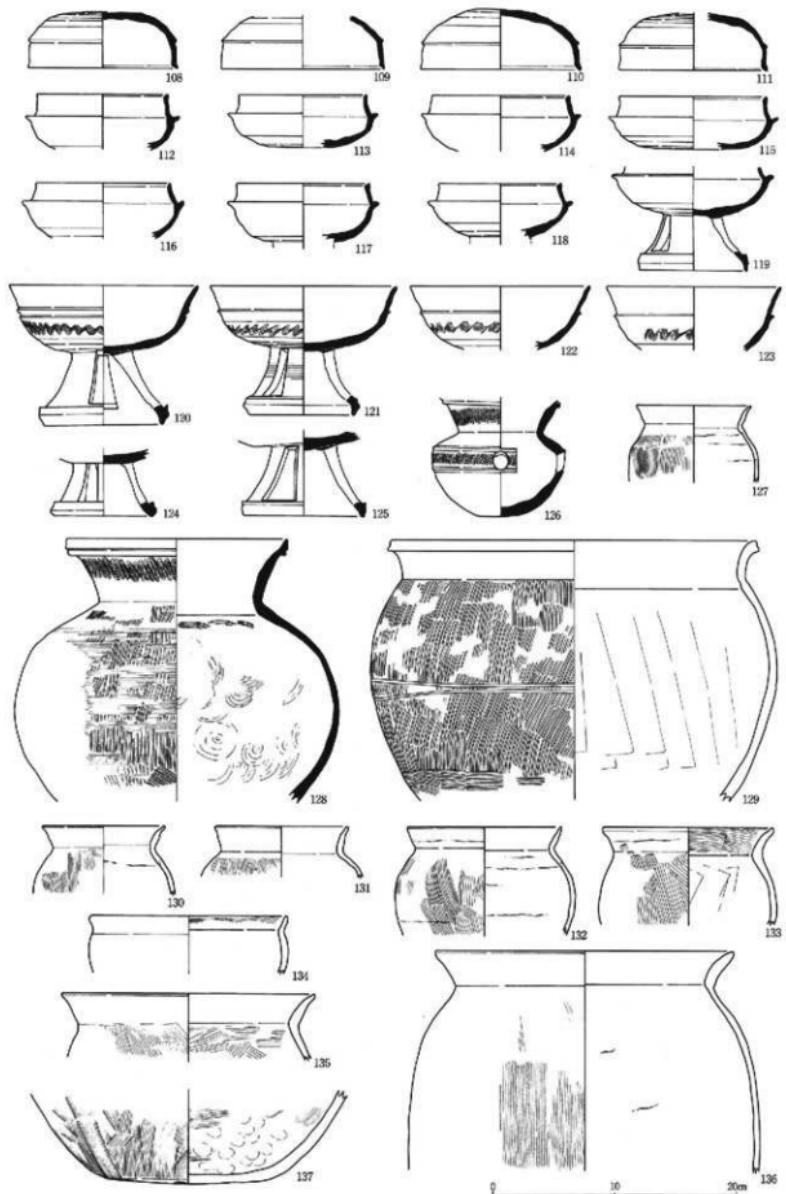


第33図 土坑131103平・断面図

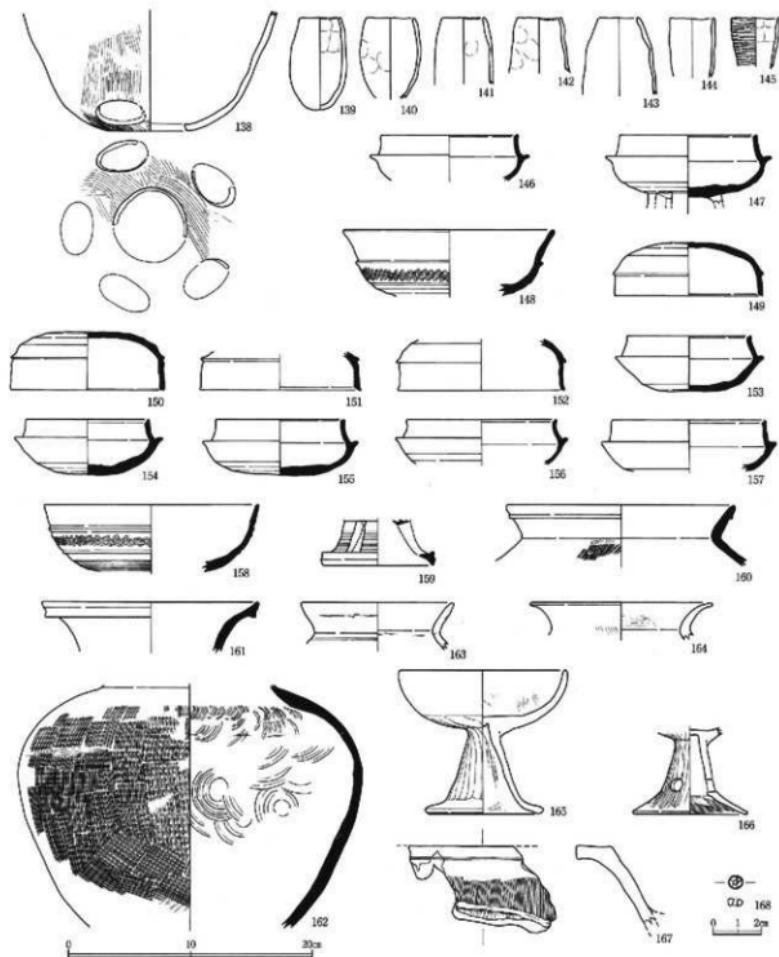


第34図 土坑131103遺物出土状況

縁端部が内傾し面を持つ。184は底部が尖る。185は立ち上がりがやや短い。187、188は高杯の脚部である。いずれも小片で、188は透かし孔の痕跡が見られるが數や形状は不明である。189、190は底で、いずれも口縁部を欠く。189は頸部に波状文、体部に櫛描き列点文を施し、円孔がわずかに残る。190は頸部が細く、体部は無文である。外面全体に灰かぶりが見られる。191、192



第35図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図（3）



第36図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図（4）

は壺もしくは甌の口縁部である。191は口縁端部を下方に拡張しており、下端に1条の稜線が巡る。192は口径20.9cmを測り、体部外面に平行状タタキ、内面に同心円状タタキを施す。

**土師器 (193~199)** 193はほぼ完形の杯で、口径12.6cm、器高5.0cmを測る。口縁部は内傾し、端部を丸くおさめる。外面底部をヘラケズリする。194は高杯である。椀形の杯部の外面と内面の口縁部をハケ調整する。口径16.8cmを測る。195、197は小型の甌で、いずれも粘土紐の接合痕が明瞭である。195の体部外面はハケメが残る。198は長胴甌で、体部外面に縦方向の粗いハケ調

整を施し、底部を除く外面に煤が付着する。口径17.5cm、器高34.6cmを測る。199はU字形板状土製品で、脚部から上部にかけてのカーブ部分に相当する。突帯を持たず、片面はナデ調整し、他面は木製作業台に置いた際の木目が残る。淡橙色を呈し、幅約10.3cm、厚さ1.9cmを測る。

#### 土坑130765（第41図）

調査区の中央部付近で検出した土坑で、土坑130417掘削後にその床面で確認された。不整円形状を呈する土坑で、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.3m（残存）を測った。埋土内から須恵器、土師器、製塙土器、用途不明の木製品などが出土した（第42図）。これらから土坑130765はTK23段階に位置付けられるものと思われる。

土坑130765出土遺物（第45図、200~202）

須恵器（200） 200は有蓋高杯である。杯部の口縁端部は内傾し面を持ち、脚部は短く、3方に長方形透かし孔を持つ。

土師器（201） 201は把手を欠く瓶である。口縁端部は内傾し、平坦面をもつ。底部に梢円形の蒸気孔がわずかに残る。

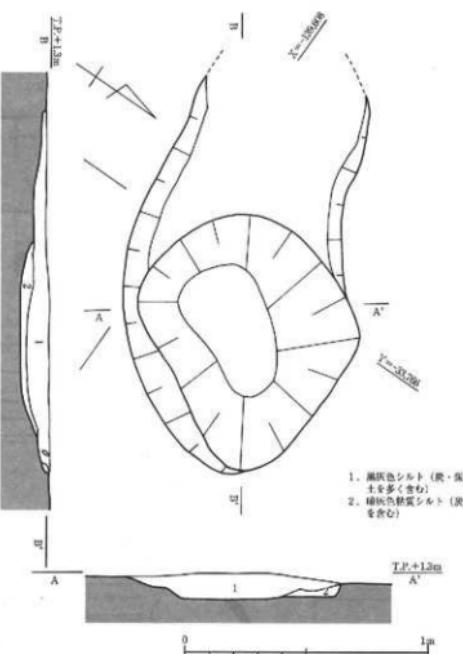
製塙土器（202） 202は器壁が薄く、内外面ともナデ調整するが粘土紐の接合痕が明瞭である。

#### 土坑130764（第43図、図版15）

調査区の中央部付近の、土坑130765の北東側に隣接する位置で検出した土坑で、同様に土坑130417掘削後にその床面で確認された。歪な梢円形状を呈する土坑で、長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.6m（残存）を測った。埋土内から須恵器、土師器、製塙土器、移動式カマド、曲柄又鋤、船材と思われる木製品などが出土した（第44図）。これらから土坑130764はTK23段階に位置付けられるものと思われる。

土坑130764出土遺物（第45図203~209）

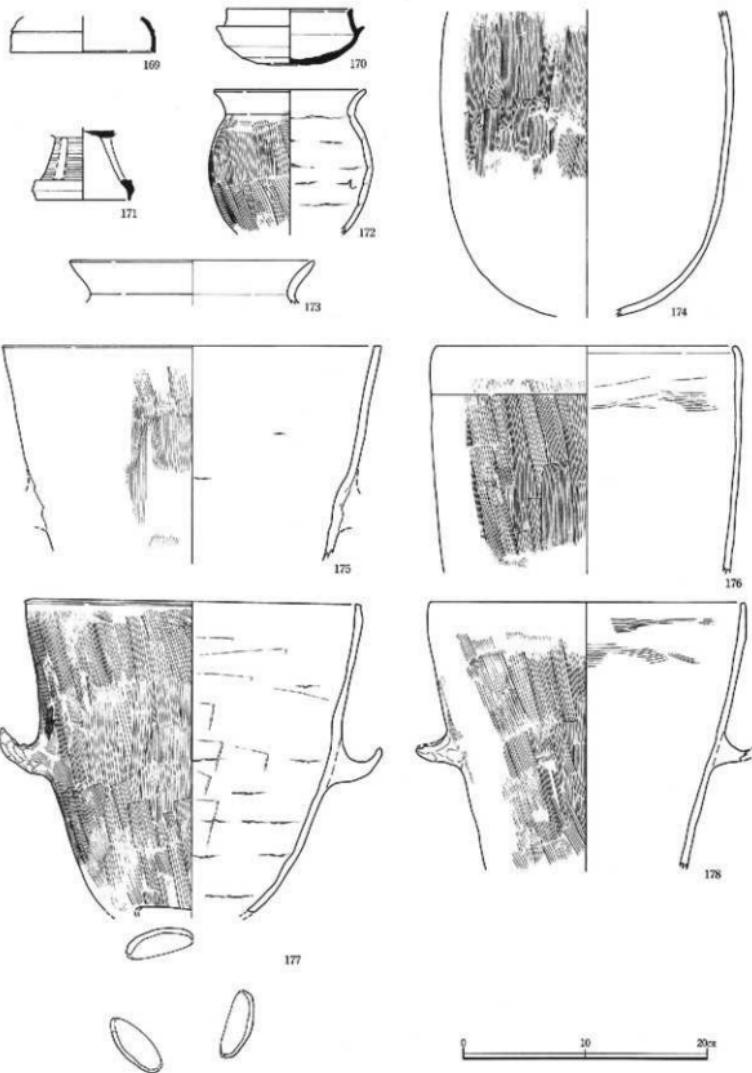
須恵器（203~206） 203、204は杯身で、いずれも口縁端部が内傾し面を持つ。204はほぼ完



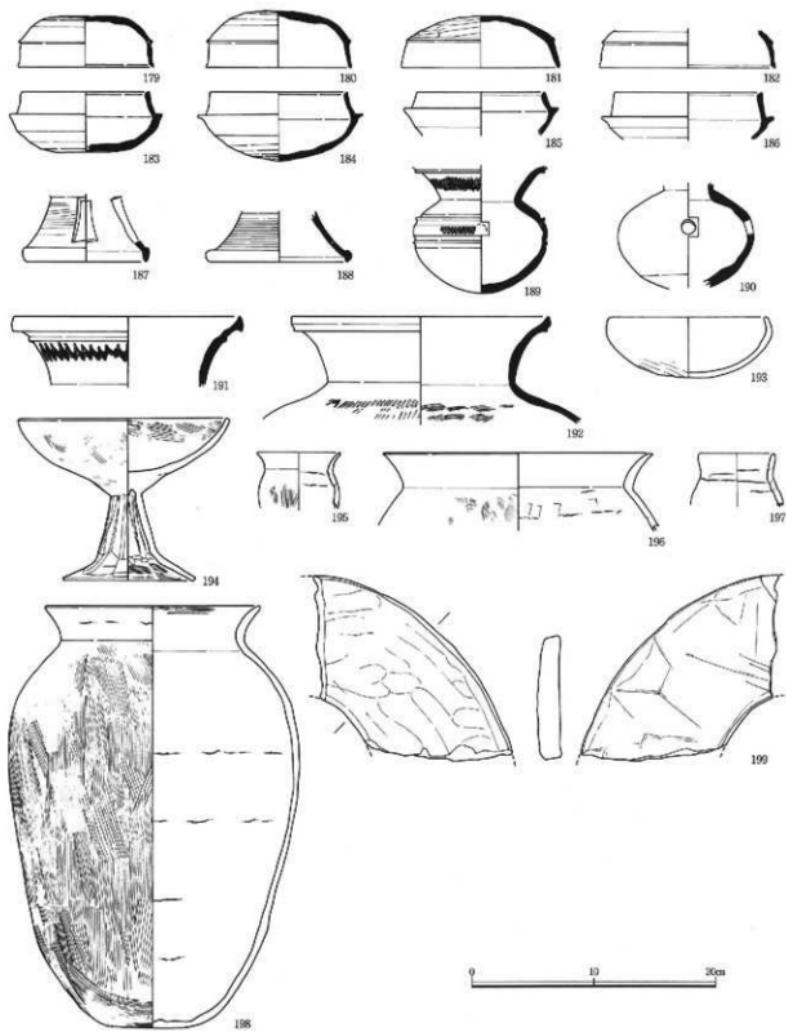
第37図 土坑130965平・断面図



第38図 土坑130965遺物出土状況



第39図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図（5）



第40図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図（6）

形で、底部は平坦である。口径10.8cmを測る。205、206は高杯である。205は口径9.6cmを測る。206は3方に長方形透かし孔を持つ。

土師器（207、208） 207は甕である。口縁部は器壁が厚く、端部は外反する。208は移動式カマドの掛口から底部分に当たる部分で胎土は生駒西麓産である。掛け口は幅2.5cmのヘラケズリで

仕上げた平坦面を持ち、庇は後から接合している。

木製品（209） 209は曲柄又鋸である。全体の約半分は残存状態が悪い。長さ43.4cm、厚さ1.2cmを測る。柄の装着部分に約5mmの段を有する。

周溝131101（第46図、図版16、17）

調査区の北西端部で検出した。一辺約7.5mの正方形形状の区画の周間に幅1.2m～2m、深さ0.5m内外の周溝を巡らせた遺構である。主軸方位はN-65°-Eを示し、区画内の中央南西寄りに埋葬主体部と考えられる土壇が認められており、周溝131101は墳墓と思われる。しかし、墳丘は後世に削平を受け、基底部の一部が確認できるのみの状況であった。

木棺直葬の主体部で、墓壇は隅丸の台形状を呈し、長軸3m、短軸1.7mを測る。後世の削平を受けているため残存深度は0.3mにすぎない。主軸方位はN-65°-Eを示す。墓壇内には、木棺の痕跡が2.2m×1mの長方形状に残存していた（第47図、図版16）。主体部と周溝の位置関係から見て、複数埋葬（2体）の可能性がある。

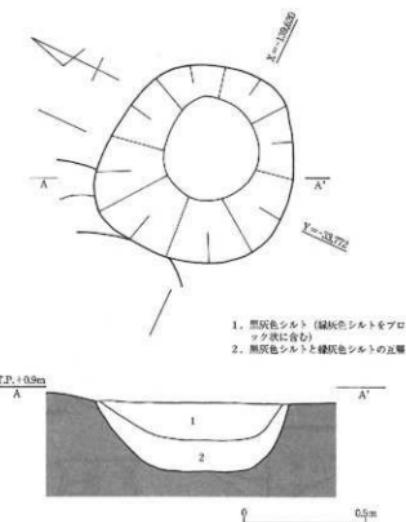
周溝131101からは韓式系土器、須恵器、土師器などが出土した。これらから周溝131101は古墳時代中期前半（TK7.3～TK21.6段階）に位置付けられるものと思われる。

周溝131101出土遺物（第48図210～230、図版21）

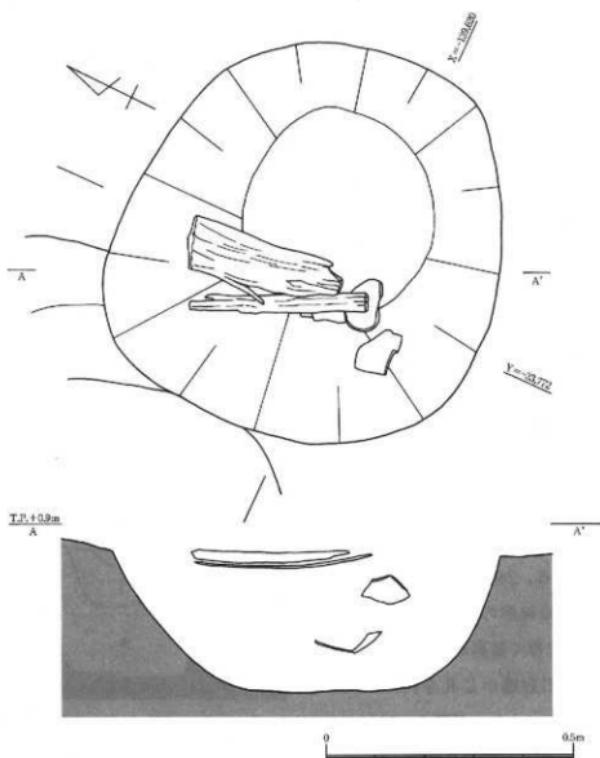
須恵器（210） 210は把手付椀で平底を呈し、口径9.4cm、器高8.3cmを測る。体部に波状文を2段巡らせる。

韓式系土器（211～219） 211～214は軟質の甕の口縁部で、いずれも色調は灰黄色～にぶい黄橙色を呈し、体部外面を格子状タタキ調整する。213は短い口縁部を持ち、口縁端部が短く外反する。215～217は平底の鉢もしくは甕の底部である。216は体部外面を平行状タタキ、217は繩縫状タタキ調整する。218、219は体部外面をタタキ調整する薄手の盃である。いずれも口縁部がほぼ直立し、口縁端部がわずかに内傾する。219はほぼ完形で、口径7.85cm、器高10.5cmを測る。

土師器（220～229） 220～223は甕である。221は長胴甕で、口縁部は小さく外反し、口径は体部径よりも小さい。223も長胴甕で肩部が張り出す。224は直口壺である。体部外面に細かなハケ調整を施す。225～228は高杯である。225、226は楕円形の杯部と、3方に円形の透かし孔のある脚部を持つ。228は口縁部が大きく外反する杯部を持つ有段高杯で、内外面に縦方向のヘラミガ



第41図 土坑130765平・断面図



第42図 土坑130765遺物出土状況

キを施す。229は額の口縁部である。

その他(230) 230は土錘で、色調は灰白色を呈する。長さ7.25cm、幅4.1cmを測り、直径1.5cmの円孔を穿つ。

#### 周溝131250 (第49図、図版17)

調査区の北西半部で検出した。長軸7.7m、短軸5.8mの長方形形状の区画の周囲を幅0.5m~1m、深さ0.4m内外の溝で区画した遺構である。主軸方位はN-67°-Eを示す。西側コーナー付近の一角は複数の遺構に切られている状況を呈しており、溝の存在は確認できなかった。区画の内部も他の遺構による削平を受けており、墓壙などが認められなかつたため、周溝131250が墳墓である確証は得られなかつた。溝内から須恵器、土師器、韓式系土器、砥石などが出土した。これらから周溝131250は古墳時代中期前半(TK216段階)に位置付けられるものと思われる。

#### 周溝131250出土遺物 (第50図231~245)

須恵器 (231、232) 231は杯身である。口縁部は内傾し、底部は丸みを帯びる。232は高杯の脚部である。器壁が薄く、端部の肥厚が小さい。透かし孔の痕跡は見られるが小片であるため、その幅と数は不明である。

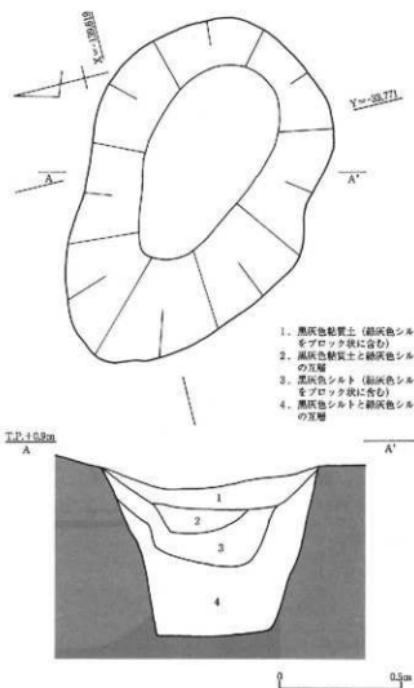
韓式系土器 (233、234、239) 233、234、239は甕である。233は体部外面を時計回りに格子状タタキ調整する。234は色調はにぶい黄橙色を呈し、体部外面を繩目状タタキ調整する。239はやや内傾する体部から口縁部が短く外反する。体部外面を平行状タタキ調整する。

土師器 (235～238、240～244) 235～238は甕である。235は外面をハケ、内面をタタキ調整する。240～244は高杯である。240～243は楕円形の杯部を持つ。240は器壁が全体に厚く器高が高い。242は脚部に3方の円形透かし孔を持つ。243は杯部外面下半にハケメが残る。244は口縁部が外方に開く有稜の高杯で、杯部はひざんで歪である。内外面ともハケ調整する。

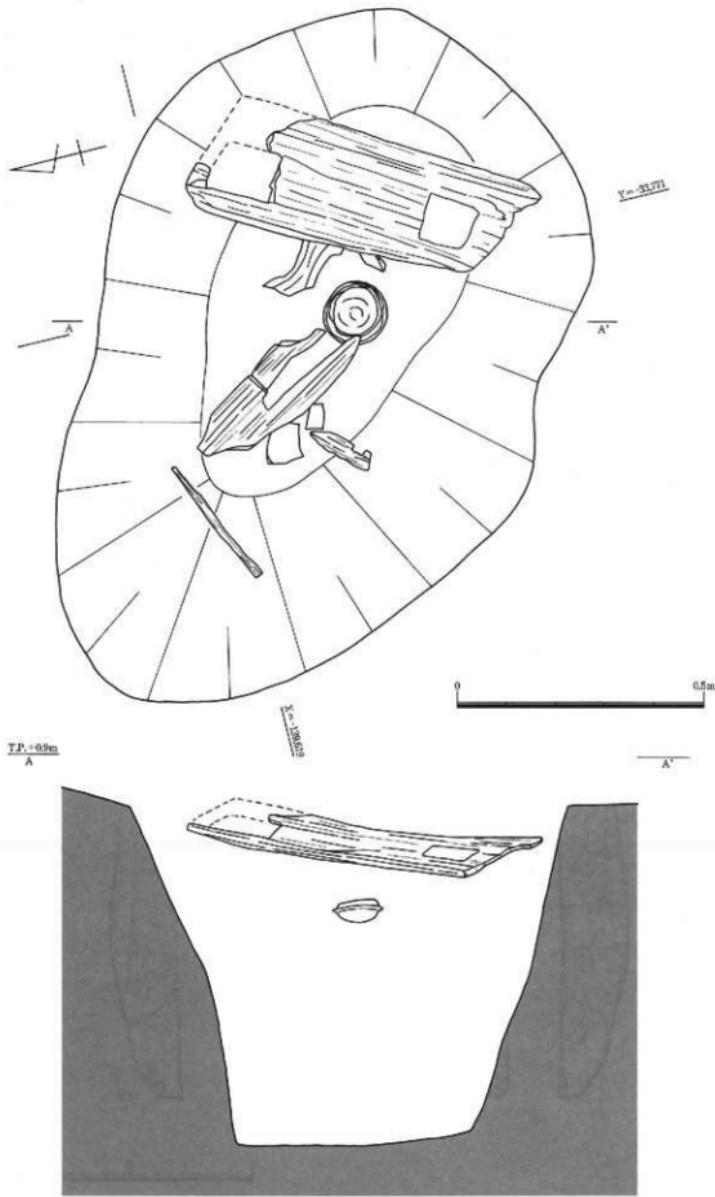
石製品 (245) 245は砥石である。両端を欠損する。

大溝130240 (第51図、図版18、19)

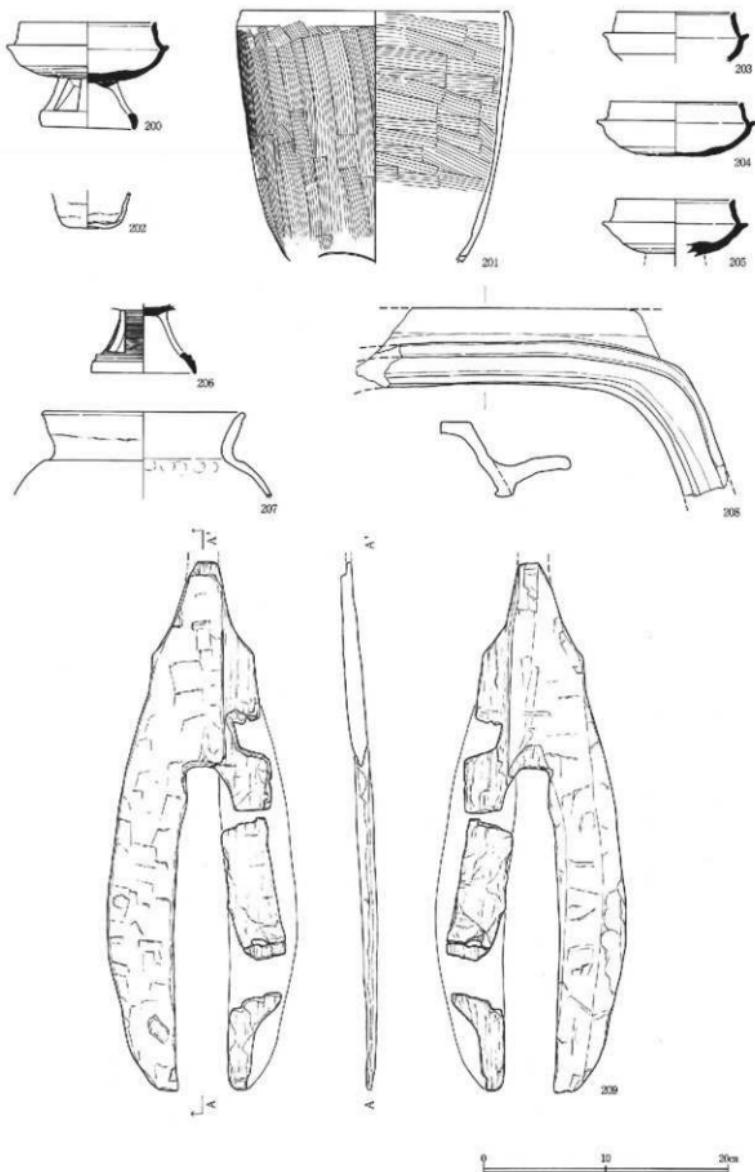
調査区の南西半部で検出した。最も遺構の密集する北西半部からC地区にかけてひろがる上段と、その南西側に広がる中段の境界となる斜面上を、北北西から南南東方向に緩やかな弧を描いて走る溝で、調査区の南西端部からA調査区の北西端部に至り、A地区ではSD950として報告されている。幅1.3m～3.8m、深さ0.3m～0.6mを測った。埋土は概ね上層(黒灰色シルト)、中層(緑灰色シルトのブロックが混じる黒灰色シルト)、下層(黒灰色粘質シルト)の3層に分層でき、各層から遺物が大量に出土した。掘削に際して出土遺物は上層と中・下層そして最上層(溝の上面を精査した際に検出されたもの)に分けられ、最上層からは須恵器、土師器、上層からは須恵器、韓式系土器、土師器、U字形板状土製品、石製品などが、中・下層からは須恵器、韓式系土器、土師器、U字形板状土製品、石製品などが出土した(第52図)。これらから中・下層がTK208段階、上層がTK23～47段階と考えられ、MT15～TK10段階には埋没



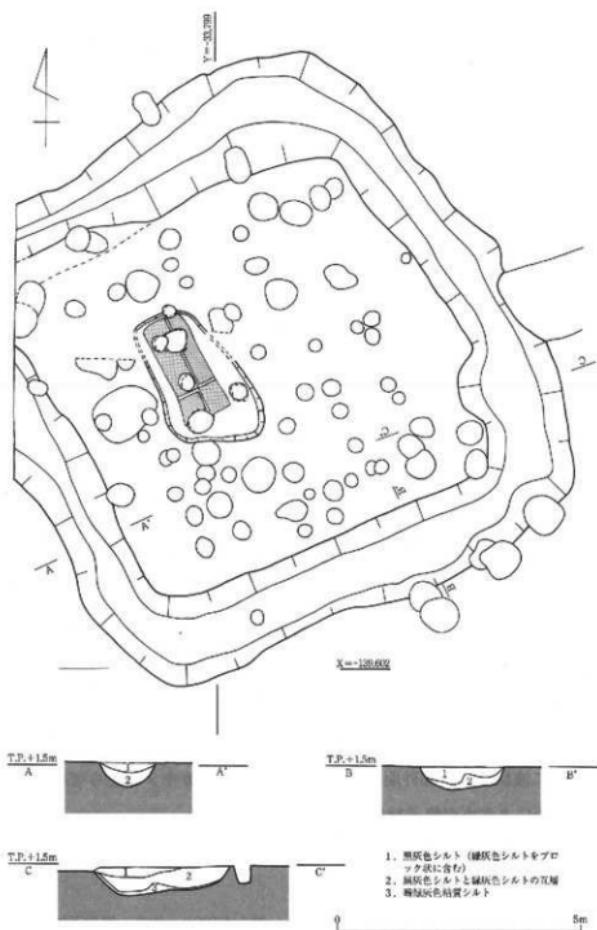
第43図 土坑130764平・断面図



第44図 土坑130764遺物出土状況



第45図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図（7）



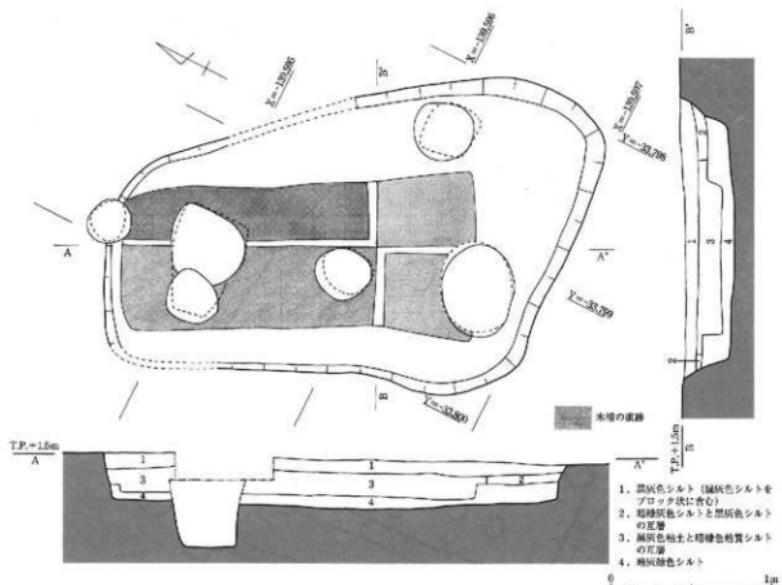
第46図 周溝131101平・断面図

したと考えられる。

大溝130240出土遺物（第53図246～295、第54図296～319、第55図320～346、第56図347～372、第57図373～395、第58図396～404、図版22、23）

溝130240最上層出土遺物（第53図246～258）

須恵器（246～257） 246～250は杯蓋である。口径は11.0～14.8cmの範囲にある。246、250は天井部と口縁部の境の稜線が鈍く、口縁部が外に開く。247～249は稜線が明瞭で口縁部はほぼ直立する。251は杯身である。底部は平坦で、口径11.0cmを測る。252は高杯の脚部で、円形透かし



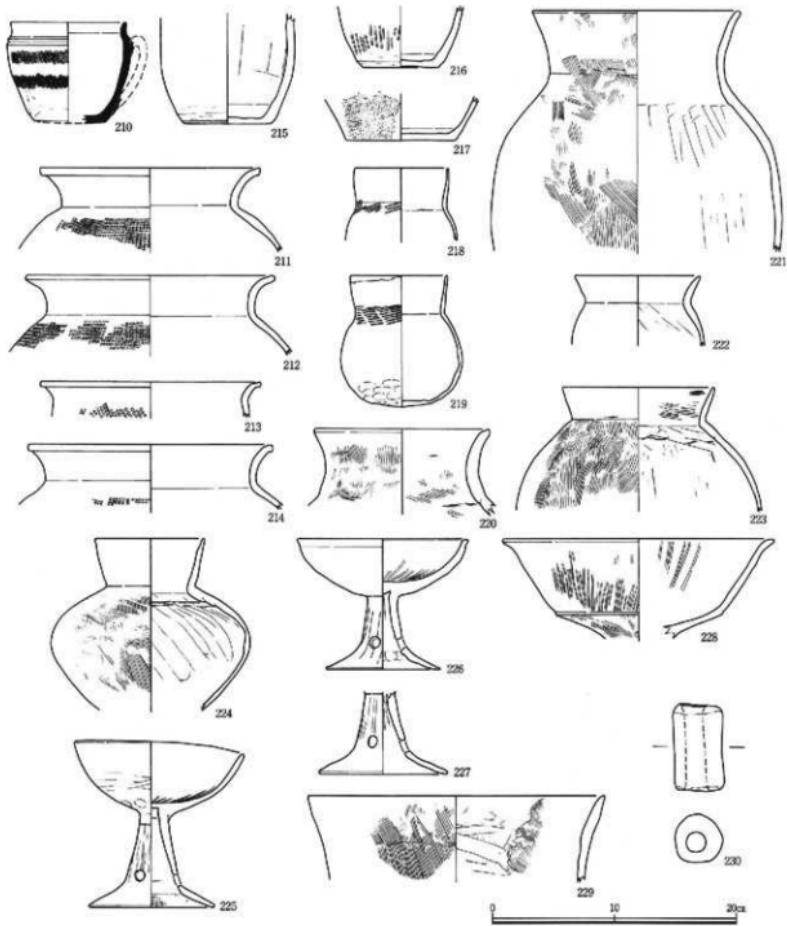
第47図 周溝131101内検出主体部平・断面図

孔の痕跡がわずかに残る。253は浅い鉢で、口縁部は短く外反する。口径9.8cmを測る。254～257は壺もしくは甕の口縁部である。いずれも口縁端部を下方に拡張しており、256の口縁部の下端には稜線が巡る。255は体部外面を格子状タタキ、内面を同心円状タタキ調整する。256、257はいずれも頸部外面に波状文、体部外面は平行状タタキの上にカキメを巡らせる。256はタタキ具の木目が明瞭なためにタタキが格子状に見える。

土師器 (258) 258は高杯の脚部である。透かし孔はなく、裾部は大きく開く。柱状部外面に縱方向のヘラミガキを施す。

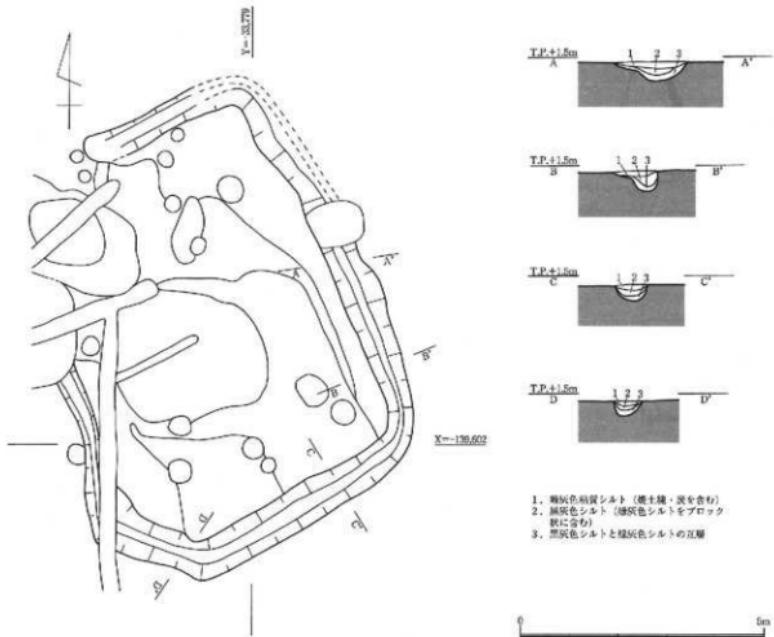
溝130240上層出土遺物 (第53図259～295、第54図296～317、第55図320～346、第56図347～356)

須恵器 (259～310、324) 259～271は杯蓋である。口径は11.4～14.7cmの範囲にある。259、260は完形で、いずれも天井部が丸みを持つ。272～286は杯身である。口径は9.8～11.8cmの範囲にある。いずれも器高が高く丸みを持つ。274は底部に×印のヘラ記号がある。279はほぼ完形で、口径10.7cmを測る。287～294は無蓋高杯である。口径は12.6～16.8cmの範囲にある。287はほぼ完形で、口径14.6cm、器高10.5cmを測る。杯部外面下半をヘラミガキする。288は杯部外面を静止ヘラケズリする。289は脚部に巡らせた1条の稜線の直上に3方の円形透かし孔を穿つ。292は杯部外面に波状文を施す。290、291、294は口縁部が大きく開く杯部を持つものである。294は体部外



第48図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図（8）

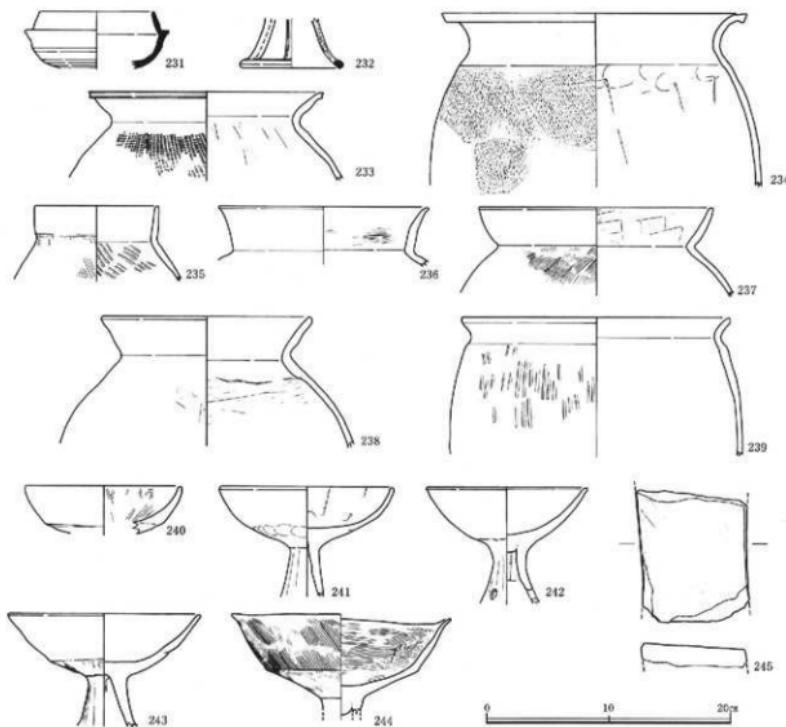
面に波状文を施す。293は杯部が半分残り、中位に小さな把手がつく。波状文を巡らせた上に3本のヘラキズがある。295、296は有蓋高杯である。295は脚部を欠損するが、3方に長方形透かし孔を持つと推測できる。296は脚部にカキメを巡らせる。297~301は高杯の脚部である。297~299は円形、300、301は長方形の透かし孔が残る。299は完形で、底径9.0cmを測り、3方に円形透かし孔を持つ。302、303は把手付椀である。302は直立する薄い口縁部を持ち、体部以下は器壁が全体に厚い。体部外面にやや難な波状文を巡らせ、底部を静止ヘラケズリする。口径5.8cm、器高4.3cmを測る。303は口縁部が大きく内湾し、底部は平底である。体部中位に2条、下位に1



第49図 周溝131250平・断面図

条の波状文を巡らせる。304は平底を呈する鉢もしくは甌の底部で、外面をヘラケズリする。305は壺の口縁部で、頸部外面に波状文を巡らせる。306は直口壺である。最大径は肩部にあり、やや長胴を呈する。頸部外面に波状文を2条巡らせる。307～310は壺もしくは甌の口縁部である。308～310は無文である。307は直立する口縁部から端部が外反し、頸部に波状文が巡る。324は透かし孔のない無蓋高杯である。

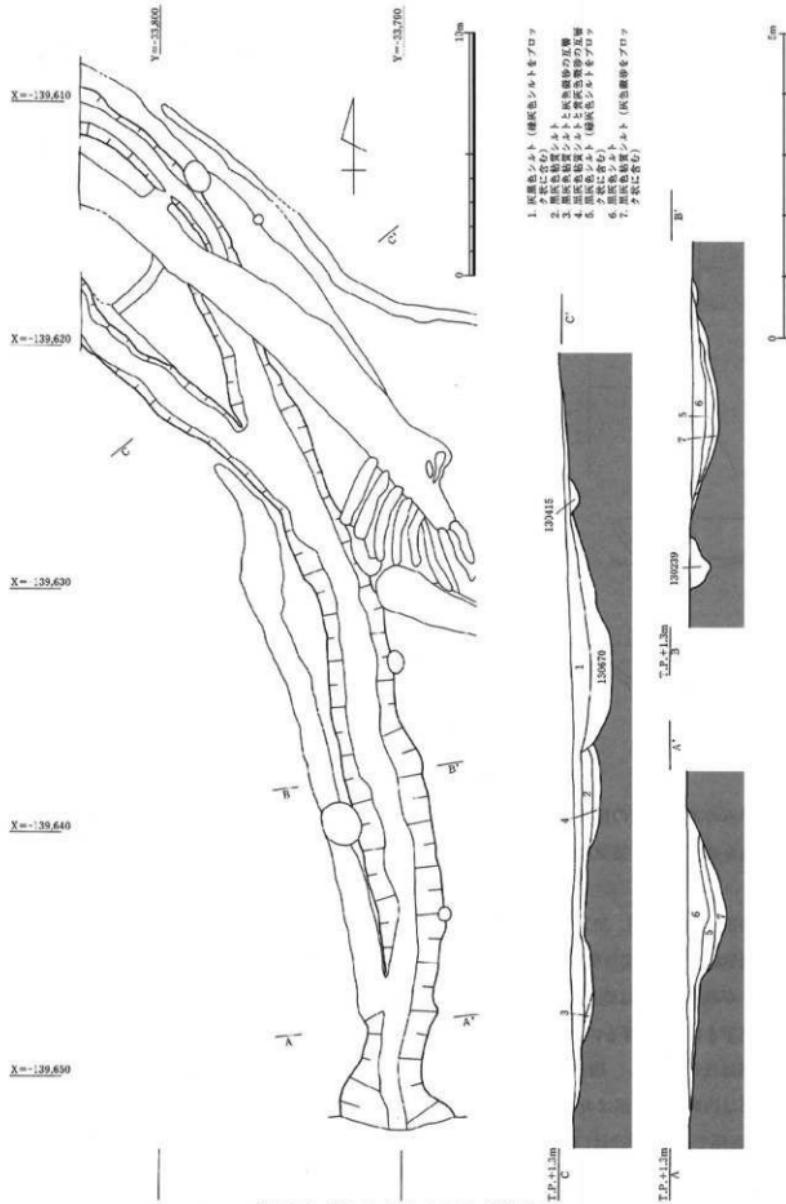
韓式系土器 (314～316、346、347) 314は復元口径21.0cm、残存器高8.3cmを測る甌で、口縁部および体部上半の破片である。315は口径29.6cm、器高25.3cmを測る把手付鍋で、色調はにぶい褐色を呈する。口縁部は短く外反し、端部は面を持つ。丸底を持つ体部の中位に上面に切り込みを入れた把手を付ける。調整は外面を縦もしくは斜め方向の平行状タタキ、内面は板ナデである。316は口径29.5cm、器高22.85cmを測る把手付片口鍋で、色調はにぶい灰黄褐色を呈する。端部がわずかに内傾する口縁部の一部を外側下方に拡張させ、片口を形成する。丸底を持つ体部の中位に上下面に切り込みを入れた把手を付ける。調整は外面を縦もしくは斜め方向の平行状タタキ、内面は同心円状タタキ後板ナデである。346は甌もしくは鉢で、色調はにぶい黄橙色を呈する。わずかに内傾する体部の外面を繩縫状タタキで形成する。347は口径27.4cm、器高28.5cmを測る平底を呈する瓶である。口縁部はわずかに内傾する体部から短く外反し、端部は面を持つ。体部中



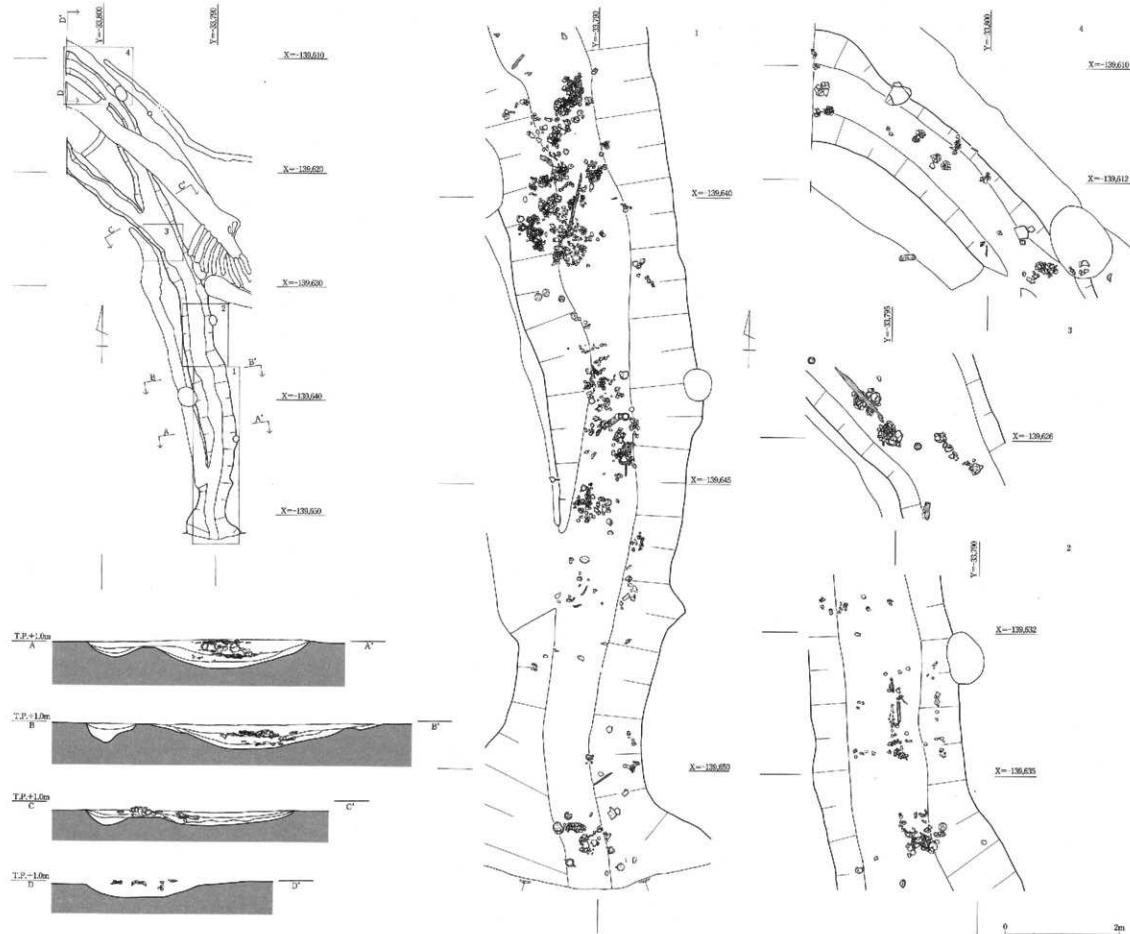
第50図 古墳時代中期遺構出土遺物実測図（9）

位に厚みのある角状の把手を付ける。調整は外面を縦方向の平行状タタキで、体部中位にヘラ描き沈線を巡らせる。蒸気孔は残存状況からみて底部は大円、周囲は7個の小円であると考えられる。

土師器（311～313、317～323、325～345、348～353） 311、312は甕もしくは鉢である。311は平底気味、312は尖り気味であるが平底に成形する意識が見られる。313は平底を呈し、外面にハケメが残る。317は底部を欠損する把手付鍋で、口径25.6cmを測る。体部上位に先端を屈曲させた把手を付け、体部を内外面ともハケ調整する。318は口径12.2cm、器高4.55cmを測る杯である。口縁部はほぼ直立し、端部がわずかに内傾する。319は口径10.5cm、器高6.3cmを測る楕である。口縁部は内弯し、端部は丸くおさまる。底部外面をヘラケズリするため平底を呈する。320～323、325は高杯である。320は口径12.45cmを測る。323は深い楕形を呈する杯部の内面に放射状暗文が残る。325は浅い楕形を呈し、口径15.8cmを測る。326～345、348は甕である。326～335は球形を呈する体部を持ち、いずれも体部外面を縦および斜め方向のハケ調整をする。328はほぼ完形の



第51図 満130240平・断面図



第52図 溝130240遺物出土状況

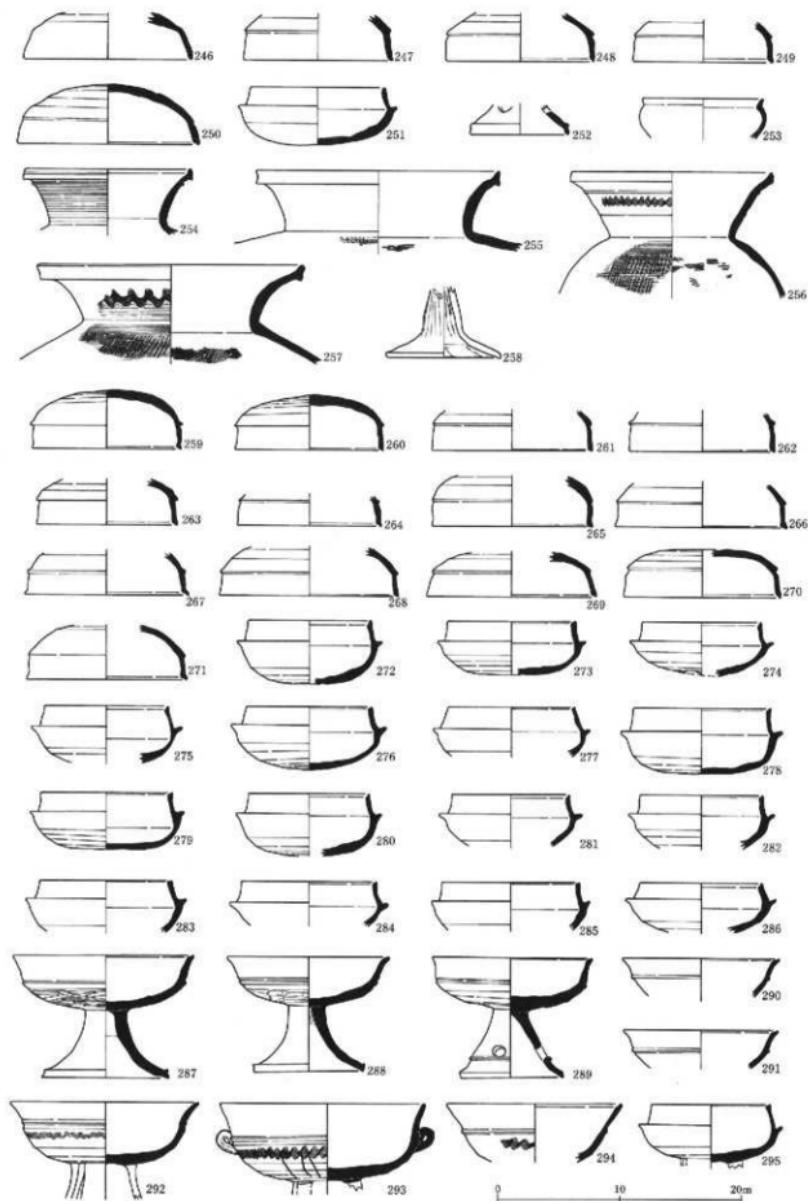
小型甕で、口径8.0cm、器高6.5cmを測る。内面に指頭圧痕が残る。329もほぼ完形で口径7.3cm、器高9.15cmを測る。内面を板状工具で調整するが粗く、その下に粘土紐の接合痕が残る。335は底部を欠く以外は完形であるが体部がひざんで歪である。336～345、348は甕の口縁部である。349は羽釜の鋸である。幅約4.0cmの鋸を体部に接合する。体部内面には接合の際の指頭圧痕が残る。鋸下面に煤が付着する。350～353は移動式カマドの破片で、胎土はいずれも生駒西麓産である。350、351は天井部から掛口にかけての部分、352、353は基部に当たる。350の掛口は幅約2.2cmのヘラケズリで成形した平坦面を持ち、天井部外面を平行状タタキ調整する。351の掛口も350と同様の調整で、幅約2.4cmの平坦面を持つ。352、353はいずれも別の粘土帯を接着して突帯を作る。

石製品（354～356） 354は長方形を呈する滑石製有孔板である。約1cm間隔で2孔が穿たれる。355は滑石製臼玉である。直径4.0～5.1mm、厚さ1.0～4.0mmを測り、いずれも側面を研磨している。356は叩き石である。中央に使用痕が残る。

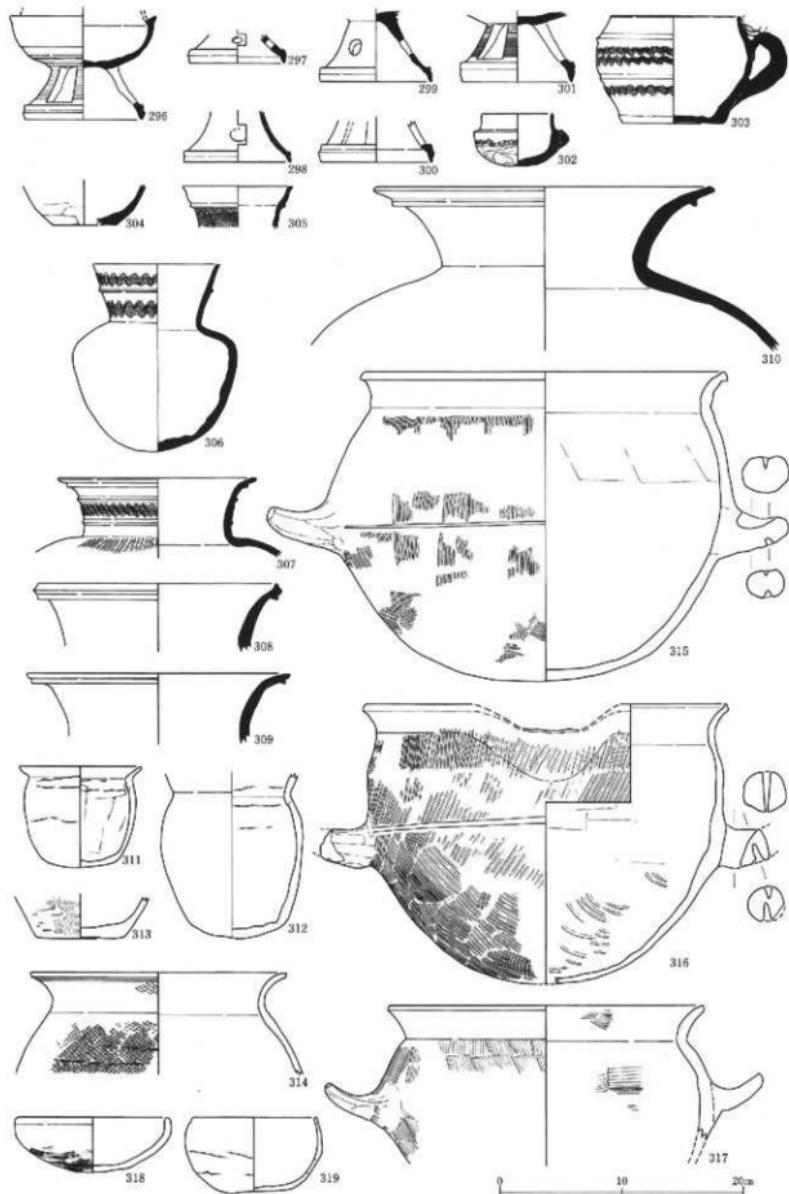
#### 溝130240中下層出土遺物（第56図357～372、第57図373～395、第58図396～404）

須恵器（357～367） 357～359は杯蓋で、口径は11.1～12.3cmの範囲にある。360は杯身で、底部3分の2を回転ヘラケズリする。361、362は有蓋高杯の蓋で、いずれも中央に内側が凹むつまみが付く。361は天井部が丸みを帯びる。363、364は脚部を欠く有蓋高杯である。いずれも杯部は完形で、363は口径10.7cm、364は口径11.1cmを測る。365、366は無蓋高杯の杯部である。いずれも口縁端部を外側につまみ出す。内面に工具によるナデが残る。367は壺の頸部である。色調は赤灰色を呈し、外面に1単位7条の鋸歯状の文様を線刻し、下位にカキメを巡らせる。

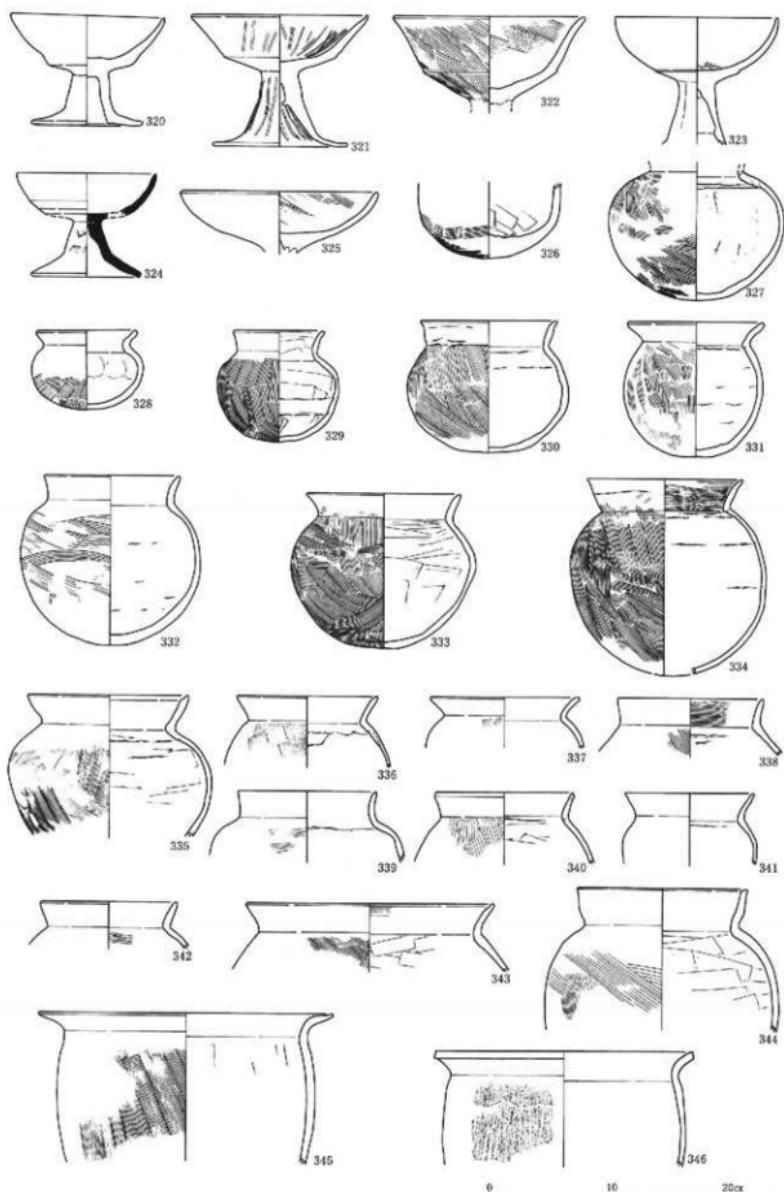
土師器（368、370～400、402、403） 368、370は平底の甕もしくは鉢である。370は全体に摩滅するが内外面にハケメが残る。371は把手付片口鍋である。把手は接合部分がわずかに残る。口縁部は外反し、端部は平坦面を持つ。372～386は高杯である。373は口縁部が外上方に直線的に開くもので、口径13.5cmを測る。374は杯部下方に段を持つもので、口径15.8cmを測る。375は口縁端部を外側につまみ出したもので、口径13.8cmを測る。376、377は口縁部が大きく開く有稜高杯である。376は杯部内面に放射状暗文を施す。口径23.0cmを測る。377は口縁端部をわずかに外側につまみ出す。378は杯部内面に放射状暗文、脚部外面にヘラミガキを施す。379は口縁端部が平坦面を持つ。脚部に円形の透かし孔がわずかに残る。380は杯部内面を細かなハケ調整する。381は口径13.65cmを測る。382は脚部に円形透かし孔が2個残る。口径16.7cmを測る。383は口径20.2cmを測る中型の高杯である。384～386は脚部である。いずれも裾部がハの字状に開くもので、透かし孔は持たない。387は楕である。器壁が全体的に厚く、口縁部は短く外反する。内面にハケメが残る。388は短頸壺である。球形の体部を持ち、口縁部は短く直立し端部は丸くおさまる。389、390は直口壺である。389は体部外面をハケ調整、内面をヘラケズリする。390は体部外面の下半から底部にかけてヘラケズリし、底部は平底を呈する。内面は粘土紐の接合痕が明瞭である。外面にヘラミガキが残る。391～400は甕である。391は体部が球形を呈し、口縁部は強いヨコナ



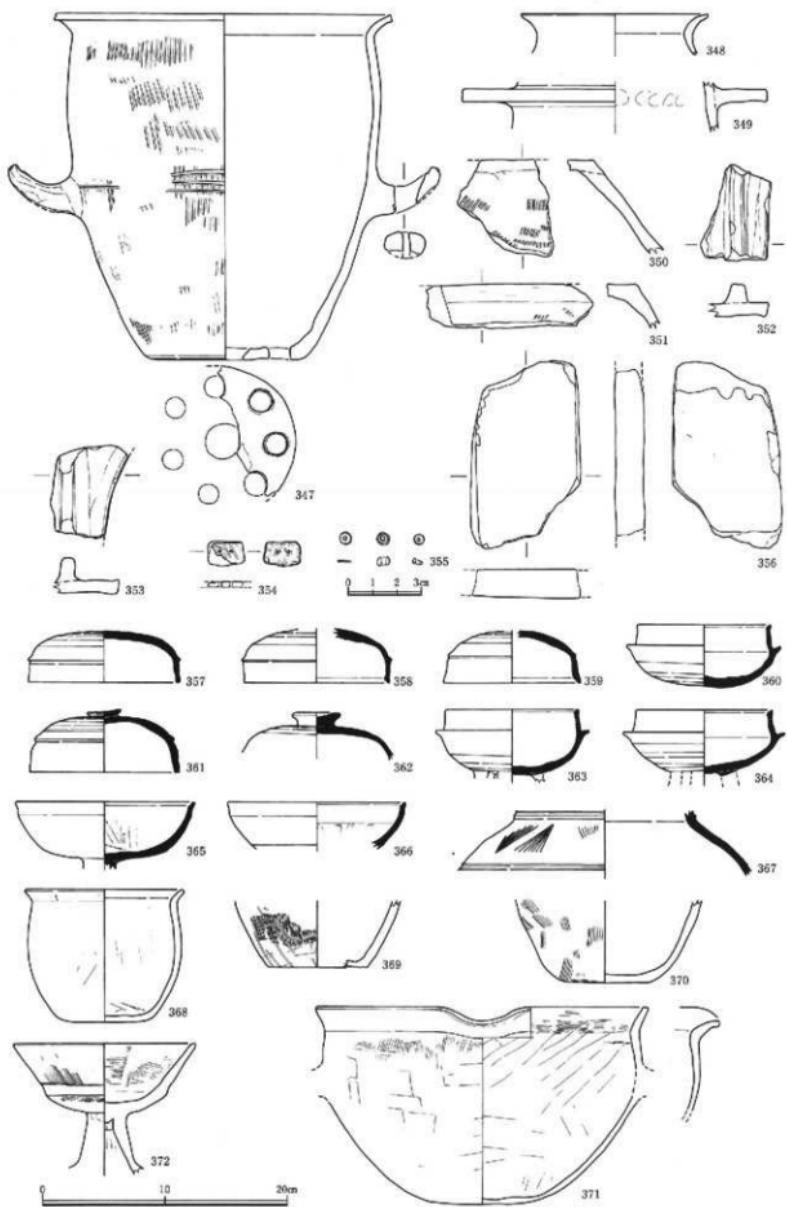
第53図 溝130240出土遺物実測図(1)



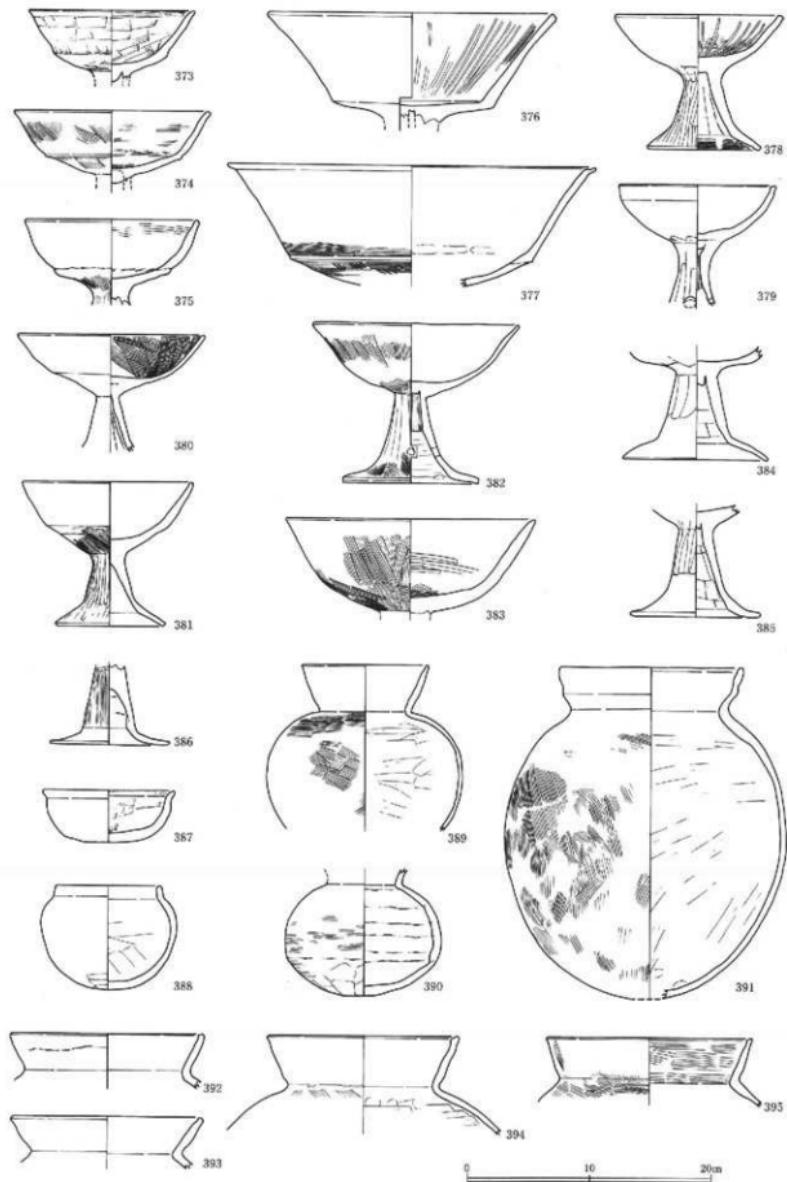
第54図 溝130240出土遺物実測図(2)



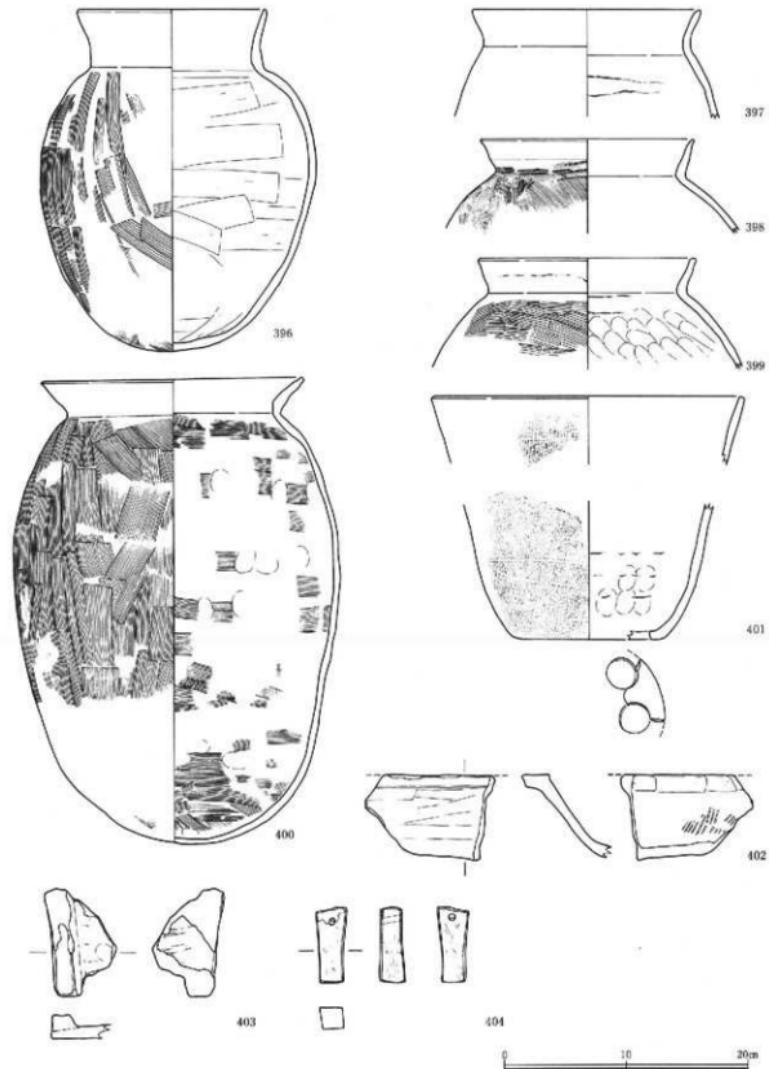
第55図 溝130240出土遺物実測図(3)



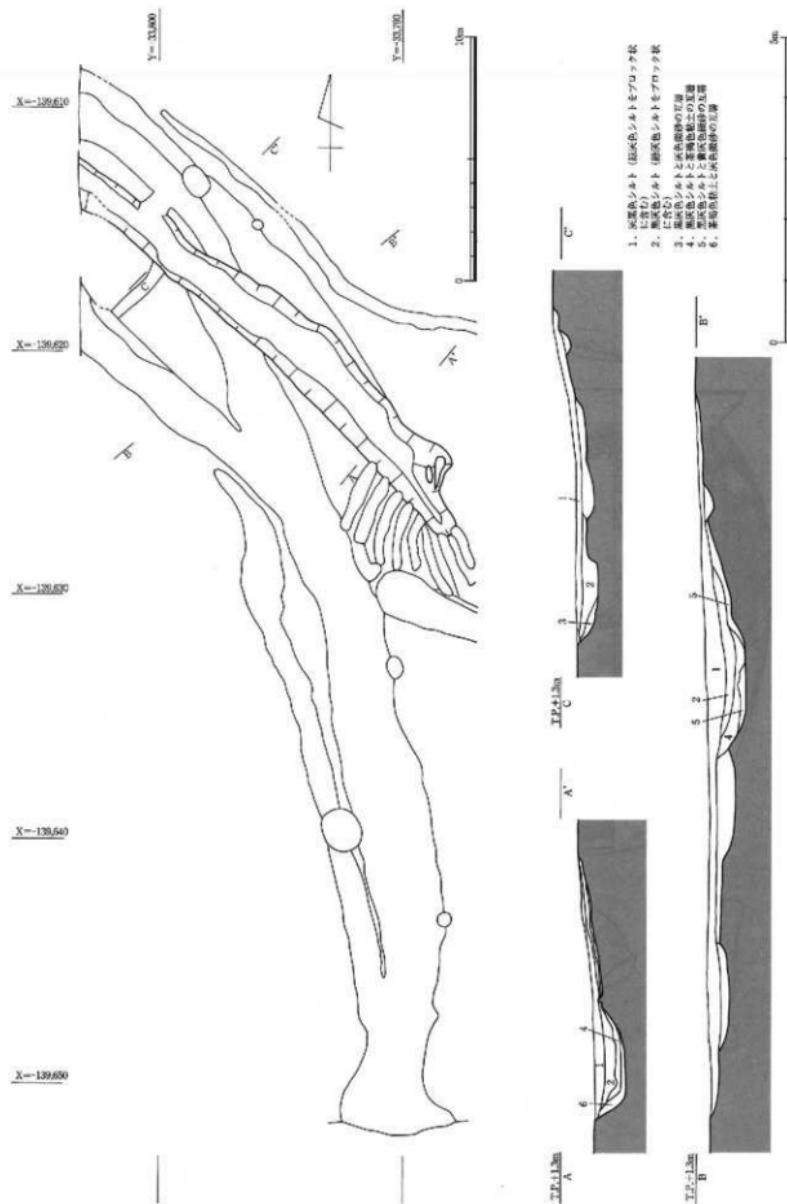
第56図 溝130240出土遺物実測図(4)



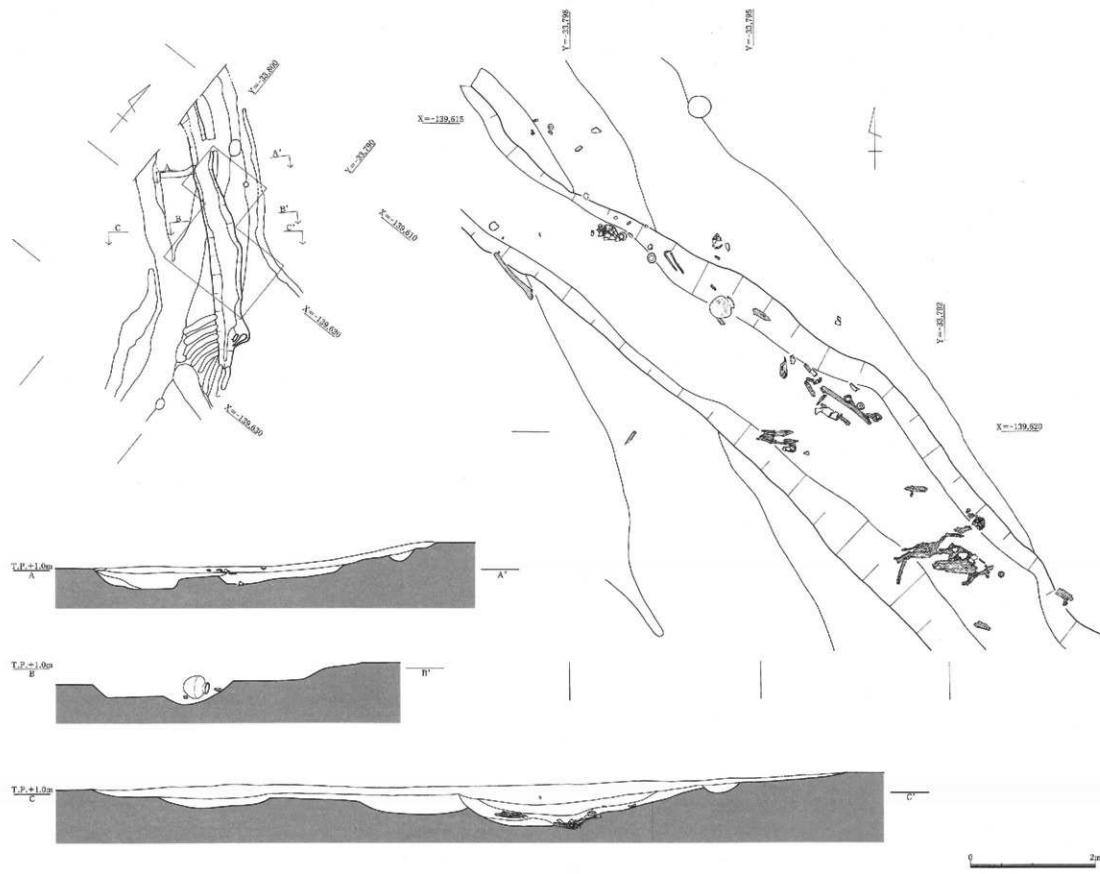
第57図 溝130240出土遺物実測図(5)



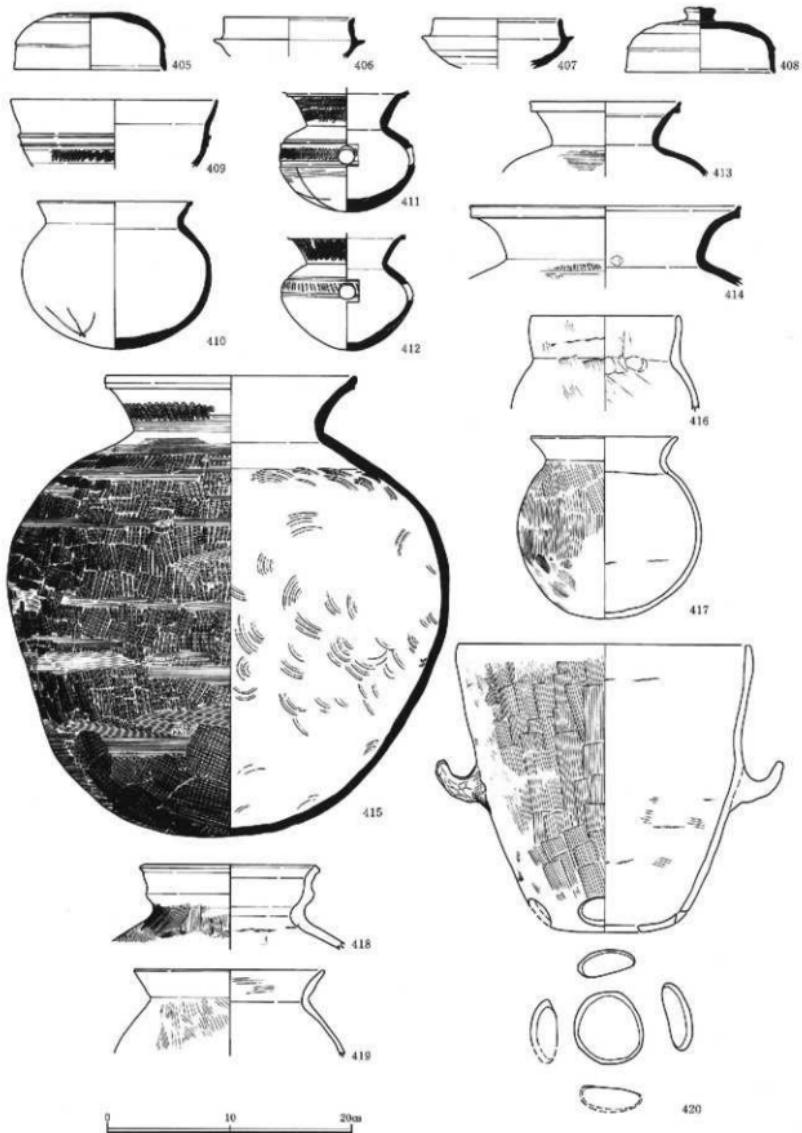
第58図 溝130240出土遺物実測図(6)



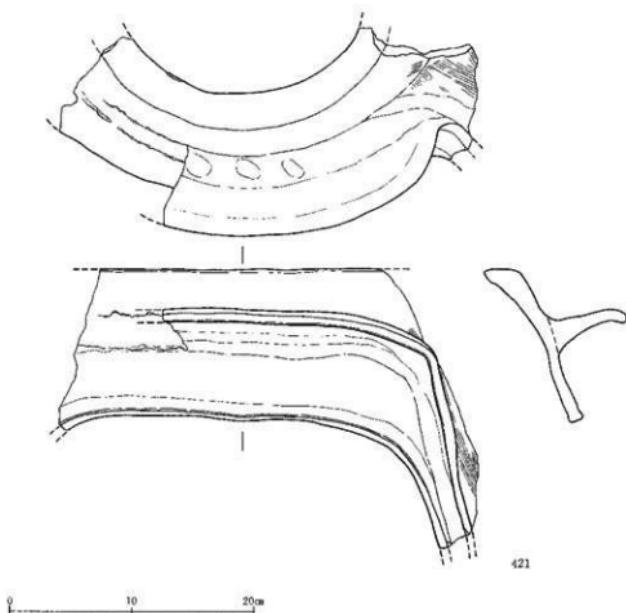
第59図 溝130670平・断面図



第60図 溝130670遺物出土状況



第61図 溝130670出土遺物実測図（1）



第62図 溝130670出土遺物実測図(2)

デによって中位が外側に張り出し、内側に稜線を作る。396はやや長胴を呈し、口径15.2cm、器高28.05cmを測る。口縁部はほぼ直立し、端部がわずかに内傾する。体部外面を縦および左上がりのハケ調整、内面をヘラケズリする。397～399は壺の口縁部である。397は内外面ともナデ調整する。400は長胴壺で、口径21.0cm、器高38.15cmを測り、ほぼ完形である。口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。体部外面は縦および斜め方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整する。底部を除く外面全体に煤が付着する。402は移動式カマドの掛口である。掛けは幅約2.3cmの平坦面を持ち、ヘラケズリで仕上げる。外面は平行状タタキの後ナデ調整する。403はU字形板状土製品である。粘土帯を接着して高さ約1cmの突帶をつくるもので、本体の厚さは1.9cmを測る。

韓式系土器(369、401) 369は平底の鉢もしくは壺の底部である。外面を平行状タタキ、底部周囲をヘラケズリする。401は把手を欠損する瓶である。口縁部は外上方にゆるやかにのびる。体部外面を縄縞状タタキ調整し、ヘラ描き沈線を巡らせる。わずかに残る底部に円形の蒸気孔が2個認められることから、多孔であると推測される。

石製品(404) 404は砾石で、長さ6.0cm、幅2.6cm、厚さ1.7cmを測る。端に直径5mmの紐通しの円孔を穿つことから携帶用と考えられる。

#### 大溝130670 (第59図、図版20)

調査区の北西半部で検出した。大溝130240と交差するように北西から南東方向に約20m

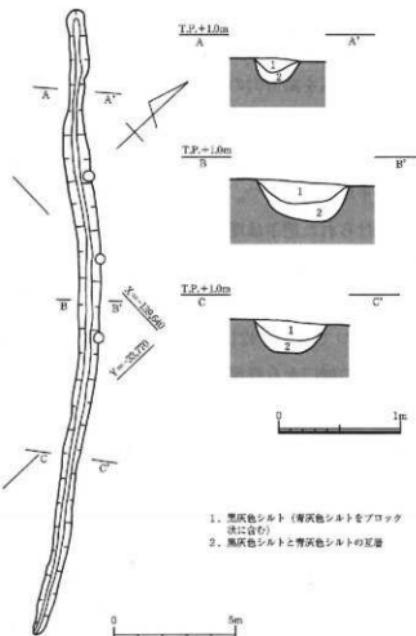
直線的に走り、終わる。幅1.5m～2.5m、深さ0.4m～0.6mを測った。大溝130240を切っており、後出のものといえるが、3層に分かれる埋土のうち、上層は大溝130240と同時期に埋まっており、中・下層のみが大溝130670となる。埋土内から須恵器、韓式系土器、土師器などが出土した（第60図）。これらにより大溝130670はTK47段階に位置付けられるものといえる。

大溝130670出土遺物（第61図405～420、第62図421、図版24）

須恵器（405～415）405は口径12.3cmを測る杯蓋である。天井部約2分の1をヘラケズリする。406は口縁端部を外側につまみ出し、407は口縁上端の内側に面を持つ。いずれも底部を欠損する杯身である。408は口径12.2cm、器高5.4cmを測る完形の有蓋高杯の蓋である。中央

に上面がほぼ平坦なつまみが付く。409は無蓋高杯の杯部である。体部に2条の稜線を持ち、その下に波状文を巡らせる。410は口径12.6cm、器高12.1cmを測るほぼ完形の壺である。外面の底部近くに鳥足状のヘラ記号がある。411、412は趣で、いずれも口縁端部を欠損する。411は外面頸部に波状文を2条、体部にヘラ描き沈線を2条巡らせた間に櫛描き列点文を施し、その下にカキメを巡らせる。体部外面下半に三叉状のヘラ記号がある。412はやや尖り気味の底部を持ち、体部はほぼ球形をなす。外面の調整は411とほぼ同様であるが、波状文と櫛描き列点文の施文単位がやや粗い。413～415は甕で、いずれも口縁端部を下方に拡張させる。413は体部外面をカキメ、414は平行状タタキ調整する。415は口径20.4cm、器高37.8cmを測るほぼ完形の甕である。最大径は球形に近い体部の中ほどにある。体部の調整は外面は格子状タタキの上にカキメ、内面は同心円状タタキをナデ消している。

土師器（416～421）416は直口壺の口縁部と考えられる。口縁部はほぼ直立し、端部がわずかに内湾する。417は口径11.9cm、器高14.9cmの甕で、球形を呈する体部に短く外反する口縁部を持つ。外面をハケ調整するが体部と底部でハケメの単位が異なっている。418は壺もしくは甕の口縁部で、口径12.0cmを測る。口縁部が強いヨコナデによって中位が外側に張り出し、内側に明瞭な稜線を作る。体部外面はハケ調整する。419は甕の上半で、口縁部は内側に肥厚し、体部の



第63図 溝130236平・断面図

1. 黒色シルト（青灰色シルトをブロック  
法で含む）  
2. 黒色シルトと青灰色シルトの互層

器壁は薄い。体部外面と口縁部内側にハケメが残る。420は瓶である。外面を縦方向のハケ調整したほぼ直立する体部からわずかに内弯する口縁部を持ち、端部は平坦な面を持つ。体部中位につけられた把手は厚みがなく先端を上側に屈曲させる。蒸気孔は中心が円形、その周囲が椭円形4つである。421は移動式カマドの掛口から底部分にかけての破片で、胎土は生駒西麓産である。掛口は幅約3.2cmの平坦面を持ち、上面をヘラケズリする。体部外面をハケ調整する。底の内側に煤が付着する。

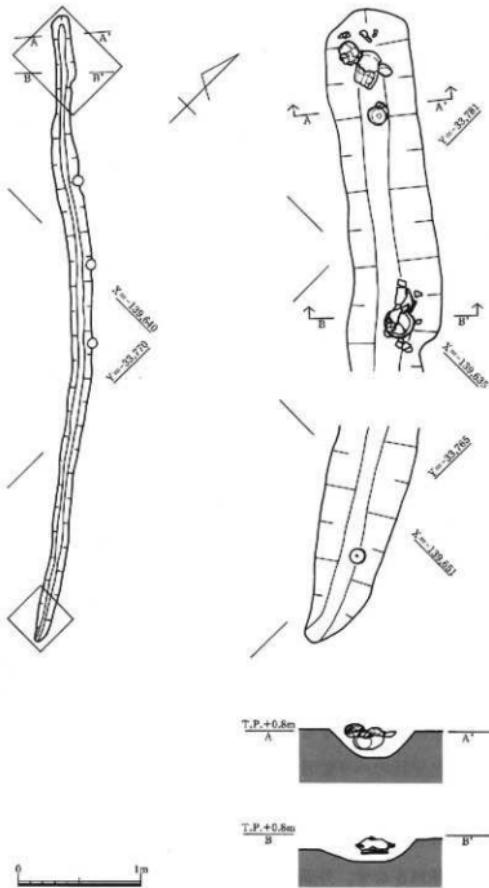
#### 溝130236（第63図、図版20）

調査区の南西半部で検出した。大溝130240の東側を北西から南東方向に直線的に走る溝で、北端部は上段と中段の境目あたりで終り、南端部はA地区へ延び、A地区の北端部で終わる。幅0.5m～1m、深さ0.2m～0.3mを測った。埋土内から須恵器、土師器などが出土した（第64図）。これらにより溝130236はTK208段階に位置付けられるものといえる。

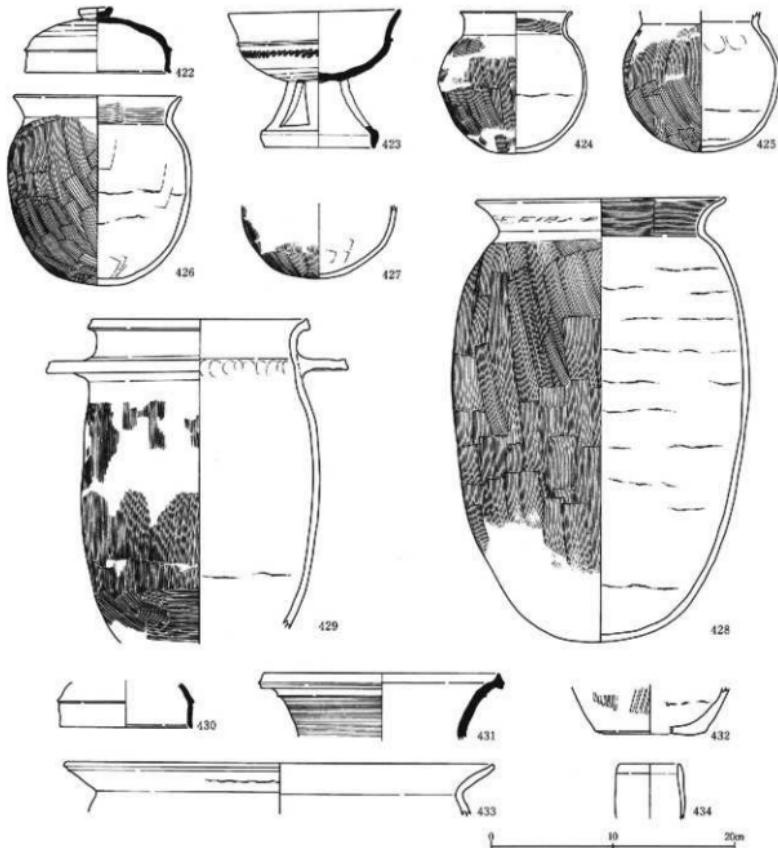
#### 溝130236出土遺物（第65図422～429、図版24）

須恵器（422、423）422は有蓋高杯の蓋で、ほぼ完形で口径11.8cmを測る。中央に内側がなんだつまみが付く。423は無蓋高杯で、ほぼ完形で口径13.9cm、器高11.2cmを測る。脚部に3方の長方形透かし孔を持ち、杯部外面に波状文を巡らせる。

土師器（424～429）424～427は甕である。いずれも体部外面をハケ調整、内面を板ナデ調整する。424はほぼ完形で口径9.0cm、器高11.7cmを測る。426はやや体部の長い甕で、最大径は体部



第64図 溝130236遺物出土状況



第65図 溝130236・130239出土遺物実測図

の中ほどにある。口径13.4cm、器高15.55cmを測る。428はほぼ完形の長胴甕で、口径20.2cm、器高36.35cmを測る。口縁端部上方はわずかに外側につまみ出し、口縁部内側に横方向のハケメが残る。体部外面は継および左上がりのハケ調整、内面はナデおよび板ナデ調整する。429は底部を欠損する長胴の羽釜である。口径17.5cm、器高26.5cmを測り、色調は褐灰色を呈する。口縁部は外反し端部は面を持つ。口縁部直下に幅約3.8cmの鋸を接合し、体部外面を平行状タタキ調整する。

#### 溝130239

調査区の南西半部で検出した。大溝130240の西側を沿うように北北西から南南東方向に走り、南端部付近で大溝130240に合流する。幅1m～1.7m、深さ0.2m～0.4mを測った。

埋土内から須恵器、土師器、韓式系土器、製塙土器などが出土した。これらにより溝130239はTK47段階に位置付けられるものといえる。

溝130239出土遺物（第65図430～434）

須恵器（430、431） 430は天井部を欠く杯蓋である。外面に自然軸が付着する。431は甕の口縁部である。口縁端部を下方に拡張し、口縁部の下端に稜線が巡る。頸部外面にカキメを巡らせる。

韓式系土器（432） 432は平底の甕もしくは鉢の底部である。外面を平行状タタキ調整した後、底部をナデ調整する。

土師器（433） 433は甕の口縁部である。大きく外反する口縁部を持ち、色調はにぶい黄橙色を呈する。

製塙土器（434） 434は底部を欠く製塙土器で、内外面をナデ調整する。

#### 4 まとめ

平成13年度に開始された蔚屋北遺跡の発掘調査も順調に進行しており、平成15年度から16年度に実施されたB地区をもって、水処理施設建設予定地17,200m<sup>2</sup>を対象とした調査が終了した。

B地区に先行して実施されたA地区およびC地区の調査成果については、既に概要報告がなされている。ここでは、まずB地区の調査結果についてまとめを試みた上で、水処理地区全体の様相について考えてみたい。

#### B地区の調査成果

当調査区では、本来は古墳時代中期の遺構面の上に堆積した包含層の上面が古墳時代後期の遺構面となっていたと思われるが、土色や土質から包含層と遺構を判別することが困難であったり、後世の耕作による削平や攪乱により、包含層の厚みが本来より薄くなっていたため、後期の遺構の多くが中期の遺構面で検出される結果となった。この状況は隣接するA地区、C地区にも共通するものである。

B地区における古墳時代中期の遺構面は、調査区中央部分から北東端にかけての位置で北西から南東方向に、そして調査区南西半部から西端にかけての位置で北東から南西方向に傾斜面が存在し、その上側の上段と、下側の中段でそれぞれ集落域が認められた。

B地区では、上段の調査区北西端部付近で検出されたTK73段階に属する2基の周溝状遺構と、TK216段階に属する土坑1基を第1期の遺構と考えた。この段階では区画溝の類は認められず、中段にはこの段階の遺構が検出されなかった。

TK208段階に属する遺構をもって第2期とした。この段階で大溝130240が掘削され、これによって集落域が明瞭に区画された。前段階に上段で形成された墓域は、この段階にはみられず、他の遺構も土坑や溝がいくつかみられるのみである。一方、中段ではこの段階ではじめて

遺構が認められた。中段で検出されたのは土坑1基のみであるが、この土坑からは大量の製塙上器が出土しており、第2期には馬の飼育が行われていたことがうかがえる。

TK23からTK47段階を第3期とした。第3期に属する遺構としては、大溝130670とそれにほぼ直交する数条の溝で区画された上段で竪穴住居址、掘立柱建物跡、井戸、土坑など多数の遺構が検出され、大溝130240の西側に広がる中段では竪穴住居址、掘立柱建物跡、土坑などが検出された。B地区で検出した古墳時代の遺構のうち、相当数がこの段階に属するものであった。

第3期の遺構のなかで、井戸131000で検出された井戸枠は準構造船の船底部分の部材を転用したもので、舳先と艤付近の部材を先端部を下に向け、内合せにして立てられていた。

船形埴輪の形状をもとにして、古墳時代の準構造船には菩提池西式と西都原式がみられることが指摘されているが、今回検出した準構造船は、側面に存在するぼぞ穴列が先端に向かって外に開き、両小口が開く構造になっており、船底部そのものは先端に向かって狭まっているが、その上に乗る舷側板は狭まらない形状を呈する。また、船底部先端の狭まる部分から先の加工が、他の部分に比べて粗くなっている。さらに、船底部先端が厚みを増し匙状を呈しており、船底のみで先端の形状が完結する、などの特徴がみられ、これらの特徴から西都原式の準構造船の例り船船底部と推定される。従来より各地で検出されている古墳時代の準構造船の実物資料はいずれも菩提池西式であり、西都原式の形状は埴輪でしかうかがうすべがなかったが、今回西都原式の実物資料が検出されたことは、古墳時代の準構造船研究を助長する契機となるものと思われる。

MT15からTK10段階を第4期とした。第4期に属する遺構としては、上段で掘立柱建物跡1棟、土坑、溝などが、中段では土坑2基が確認されているのみで、前段階に比べて遺構、遺物ともに減少傾向にある。さらに集落の中核を成す遺構が、上段の掘立柱建物跡1棟のみとなっている。

TK43段階を第5期とした。第5期に属する遺構としては、上段で掘立柱建物跡3棟、溝などが、中段ではピット1基が確認されているのみで、前段階から引き続いて遺構、遺物ともに少ない。しかし上段では総柱2棟を含む3棟の建物が検出されており、この段階でも蔀屋北集落は機能し続けていたことがうかがわれる。

これ以降は、包含層からの遺物の出土はみられるものの、遺構は確認されていない。

#### 水処理施設地区の調査成果

次に、A、B、C地区を統括した水処理施設建設予定地地区全体の調査成果について、簡単にまとめておきたい。

蔀屋北遺跡における古墳時代の集落は、弥生時代後期までに形成された自然堤防上の微高地に展開している。微高地はC地区からB地区の北西半部に広がり、さらにC地区の西方に延びるT.P.+1.5m～1.7mの上段と、B地区の南西半部からA地区の北西半部に広がり、さらに西方に延びる地域、A地区の東半部で東方に延びる地域の二ヶ所がみられるT.P.+1.0m～1.2mの中段

がある。

これら三ヶ所の微高地上に、上段に展開する北集落域、中段の西側に展開する西集落域、中段の東側に展開する東集落域という集落のまとまりがみられる。

北集落域は最も高い位置にあり、遺構の検出密度も濃く、茆屋北遺跡における中核を成した地域といえる。古墳時代の集落が出現した第1期から、終息をむかえた第5期までの全期間にわたって遺構が存在し、竪穴住居12棟、掘立柱建物43棟、井戸3基、墳墓2基をはじめとして、大溝や複数の溝で区画された範囲内に2000を超える遺構がみられる大規模な集落域である。

西集落域は第2期から第5期にかけての遺構が存在し、大溝の南西側に竪穴住居3棟、掘立柱建物2棟、井戸2基、馬埋納土坑2基、製塙土器埋納土坑などがみられた。

東集落域は第2期から第5期にかけての遺構が存在し、竪穴住居4棟、掘立柱建物2棟、井戸5基などがみられた。

・第1期の遺構は北集落域にのみ存在した。検出された遺構としては、南西部で墳墓が2基、北東部で土坑が2基認められたのみで、建物などの主要な遺構は、調査区北東端部の東側に展開するものと考えられる。

第2期には遺構の検出数が増加するとともに、北集落域に加えて東集落域と西集落域にも遺構が認められた。大溝130240が掘削されたのはこの段階になる。ただし、この段階で竪穴住居、掘立柱建物などが検出されているのは北集落域のみで、他の集落域では認められていない。特筆すべきは西集落域で検出された製塙土器埋納土坑で、多量の製塙土器が埋納された土坑は、茆屋北遺跡の集団の生業を推察するうえで重要な遺構のひとつと考えられる。

第3期は茆屋北遺跡の古墳時代集落の最盛期といえる時期で、すべての集落域で竪穴住居、掘立柱建物、井戸などをはじめとする多数の遺構が検出されている。特に北集落域では、大溝130670とそれに直交する溝群で区画された範囲内に、竪穴住居および総柱を含む掘立柱建物が相当数建ち並んでいたと思われる。また、西集落域で検出された2基の馬埋納土坑は馬1頭が横たえられて埋葬されたことを思わせる状態で検出され、なかでもそのうちの1基は遺存状態が非常に良好で、ほぼ全身の骨格が残存しており、これにより、埋葬されていた馬が5~6歳で、体高約125cmと計測された。計測値からみれば、この馬は日本の在来馬でいう御崎馬と同等の体高であったと思われ、これまで推定の域を出なかった、古墳時代中期に飼育されていた馬の骨格の全容が明らかにできた貴重な資料であるといえる。

また、各集落域で検出された井戸には、船材を転用した井戸枠を有するものが複数みられたが、なかでも北集落域で検出された井戸131000の井戸枠に使われていた船材は、西都原式の準構造船の船底部で、舳先あるいは艤部分の部材と判明した。西都原式の準構造船は、前後の先端に竪板を有する菩提池式と異なり、前後の両小口が開き、舷側部の先端に丸棒と貫を通すのみの構造で、荷物の輸送に適している。また、船形埴輪をもとに復原された外洋航海が可能とされる準構造船は全長10mを超えたとされるが、今回検出された船底部の部材から復原した全長は10

m内外となり、外洋航海が可能な準構造船を保持していたことが判明した。当地は古墳時代には大阪湾から繋がる河内潟の湖岸線付近に位置しており、準構造船で外洋まで直接航行することが可能な環境にあったといえる。

第4期では、前段階に比べて遺構の検出数が減少する傾向が顕著で、北集落域では掘立柱建物や井戸が検出されているが、他の集落域では認められず、遺構の検出数も総体的に少ない。集落の縮小化がうかがわれる様相を呈する。

第5期においても、引き続き集落の縮小化や遺構、遺物の減少傾向がうかがわれ、建物などが認められたのは北集落域のみで、ここには掘立柱建物の住居や倉庫が複数存在していたが、他の集落域には遺構がほとんどみられない。

次に出土遺物からみると、概ね5世紀の範間に想定される第1期から第3期までには、百濟系と思われる陶質土器、多種の韓式系上器、U字形板状土製品、移動式のカマドなど、朝鮮半島との直接的な繋ぎりを示す遺物が出土しており、また大量の製塩土器、馬齒・馬骨、さらに木製輪鉗など生業を想定させるにたる遺物が多数出土している。これに対して6世紀にあたる第4期および第5期では、韓式系土器は認められるものの製塩土器などは激減しており、馬齒・馬骨の類もほとんどみられなくなる。

水処理施設地区で検出された遺構および遺物にかかる知見をもとに検討すると、茆屋北遺跡の古墳時代集落は、百濟から渡来した人々の集落であったことが推定される。集落は第1期の5世紀前半に形成され、第5期の6世紀後半まで、ほぼ絶えることなく連綿と営まれていた。

そして馬の埋納土坑の検出、大量の製塩土器、馬齒・馬骨、さらに木製輪鉗が出土していることなど、第1期から第3期では馬にかかる遺構、遺物が多く認められており、この段階には馬の飼育を生業としていたと考えられる。

これに対して第4期以降では馬にかかる遺構、遺物が激減する。第3期と第4期の間に遺構の空白期間が認められず、出土遺物のなかに韓式系土器もみられるので、居住集団が変わったとは考えにくく、あるいは生業が変化したとも思われるが、現時点では明瞭ではない。

水処理施設地区的調査成果からは、上記のように集落の中核部分を成す居住域の大まかな様相を把握することができ、さらに、当地が日本書紀に記載された馬飼部へと直接につながる、馬の飼育を生業としていたと推定させるいくつかの知見を得た。

しかしながら、今回得た知見からのみでは、第4期にいたって生業が馬の飼育から他へ変化したことを確定するにはいたらなかった。この点については、現在調査が進行中の地区、あるいは今後予定されている地区もあるので、これらの調査が進展するにしたがって解明され、そして茆屋北遺跡の古墳時代集落の全貌が、より明確になってくるものと考える。

#### 参考文献

大阪府教育委員会 「讚良郡条里遺跡（茆屋北遺跡）発掘調査概要・IV」 2002年

大阪府教育委員会 「藤屋北遺跡発掘調査概要・Ⅰ」 2004年

大阪府教育委員会 「藤屋北遺跡発掘調査概要・Ⅱ」 2005年

最後になりましたが、1年6ヶ月の長期間にわたる現地調査、そして遺物整理に参加された大勢の皆さんに感謝申し上げます。

# 図 版



調査区全景



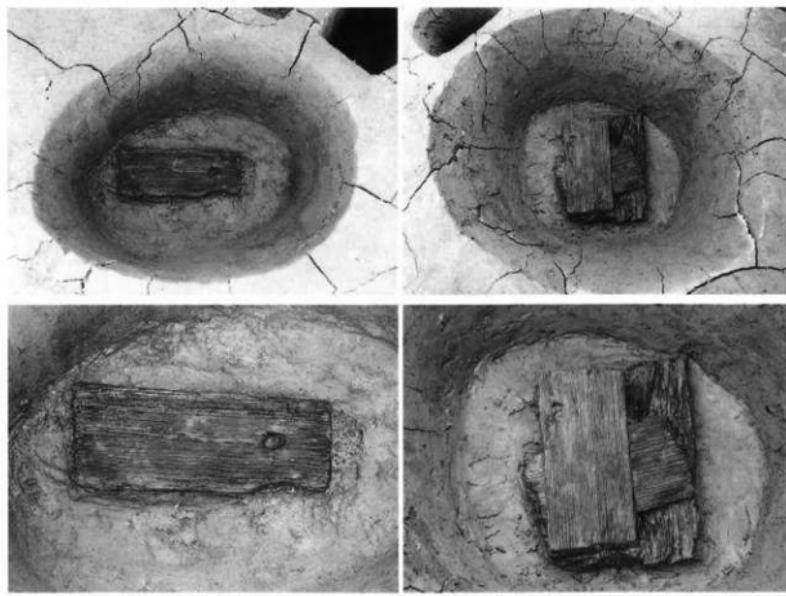
調査区全景（北より）



第12構造面全景（北より）



掘立柱建物跡 3



(左上) 掘立柱建物跡 3 柱穴 131043

(左下) 柱穴 131043 硙板検出状況

(右上) 掘立柱建物跡 3 柱穴 131074

(右下) 柱穴 131074 硙板検出状況



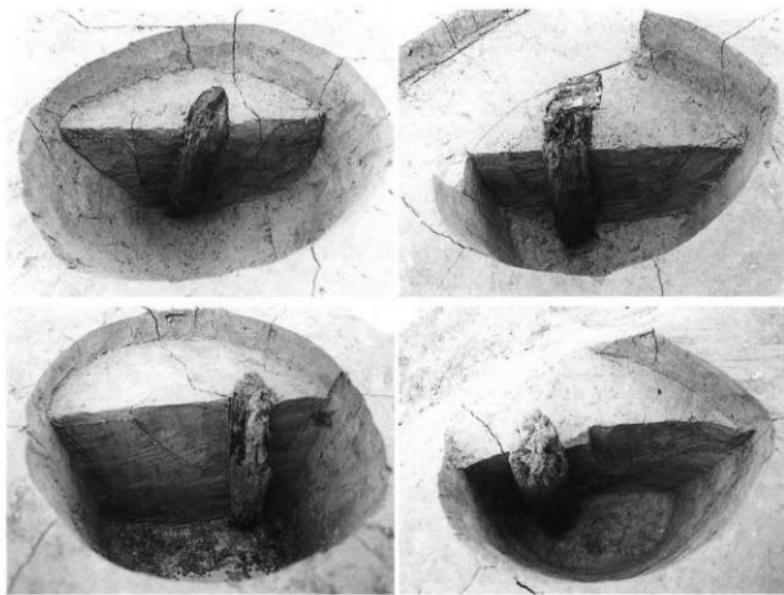
掘立柱建物跡 4



掘立柱建物跡 3・4



掘立柱建物跡 8

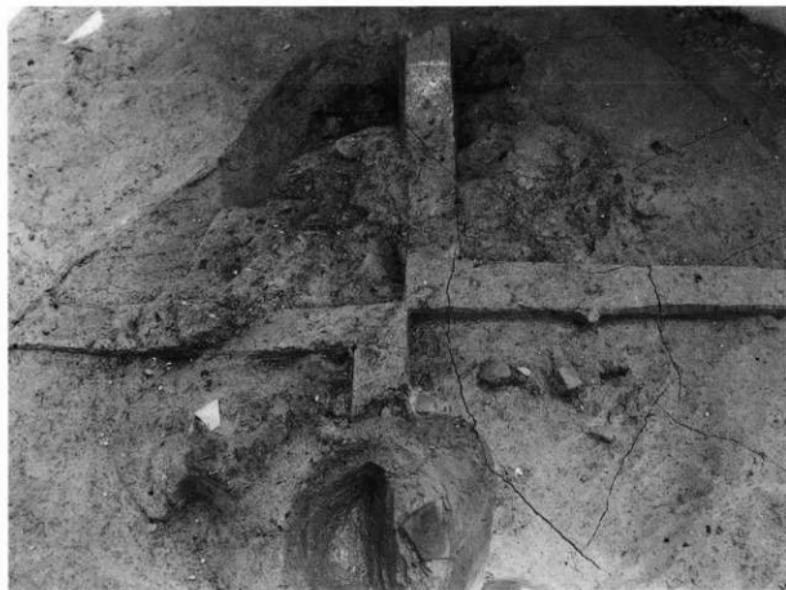


(左上) 掘立柱建物跡 8 柱穴 120010  
(左下) 柱穴 120014

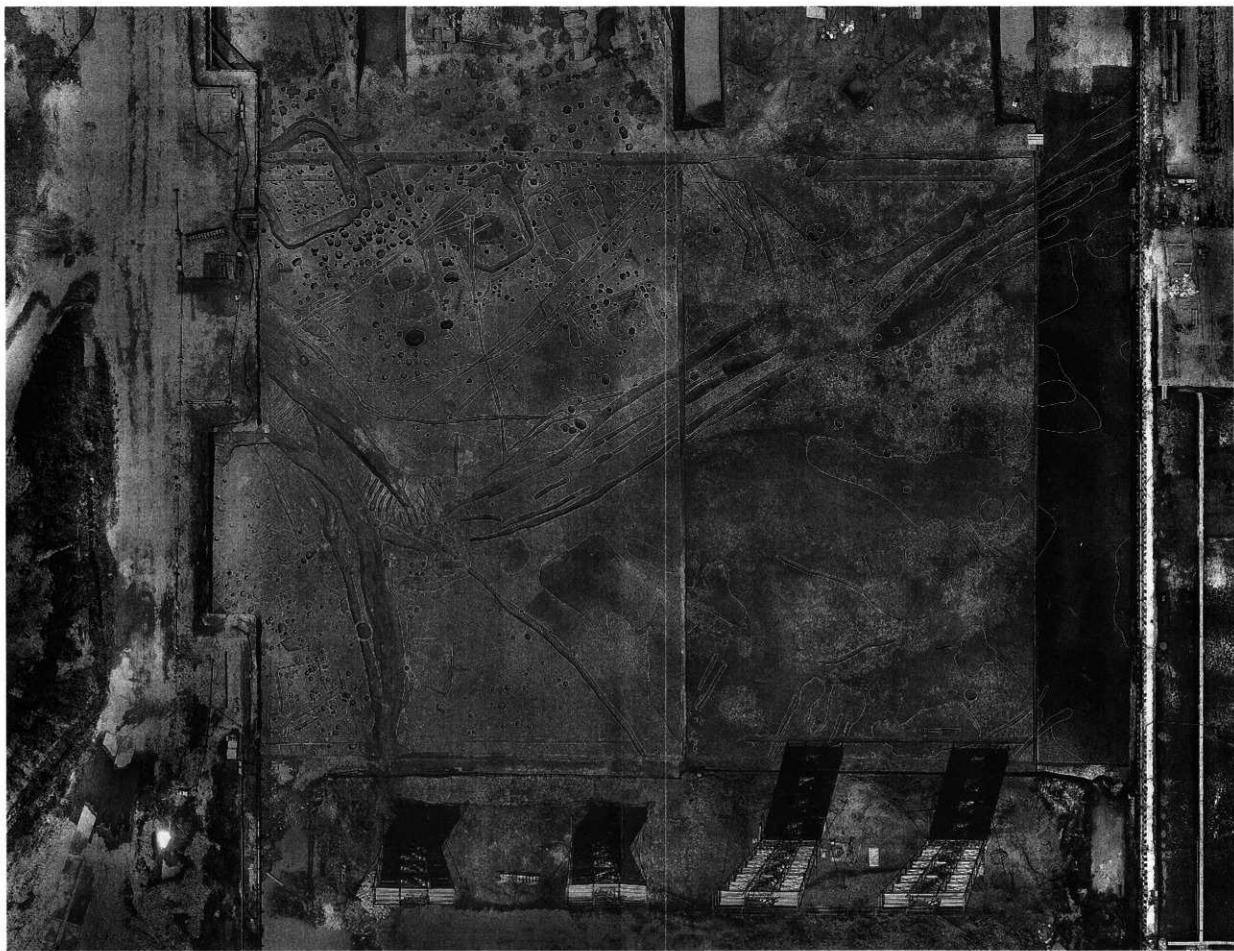
(右上) 掘立柱建物跡 8 柱穴 120015  
(右下) 柱穴 120016



カマド 131300



カマド 131301



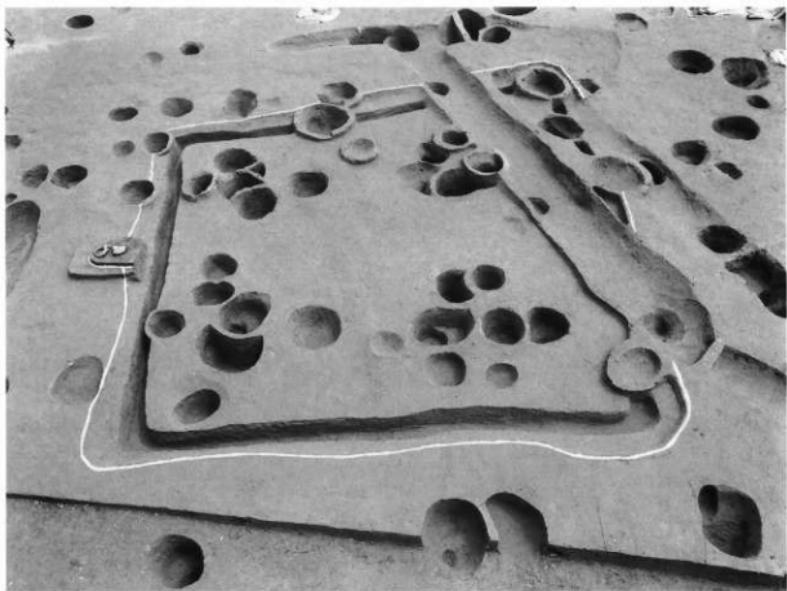
第13橋面全景



第13遺構面南西半部全景（南より）



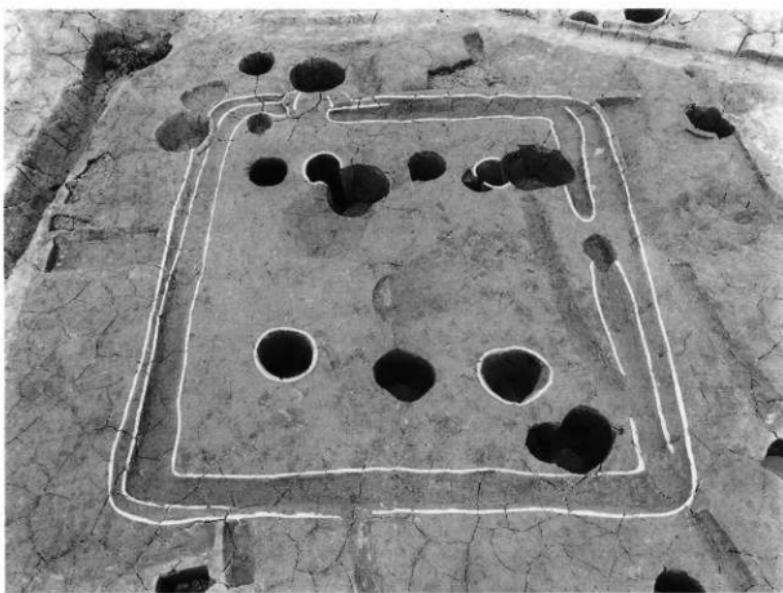
第13遺構面北西半部全景（北より）



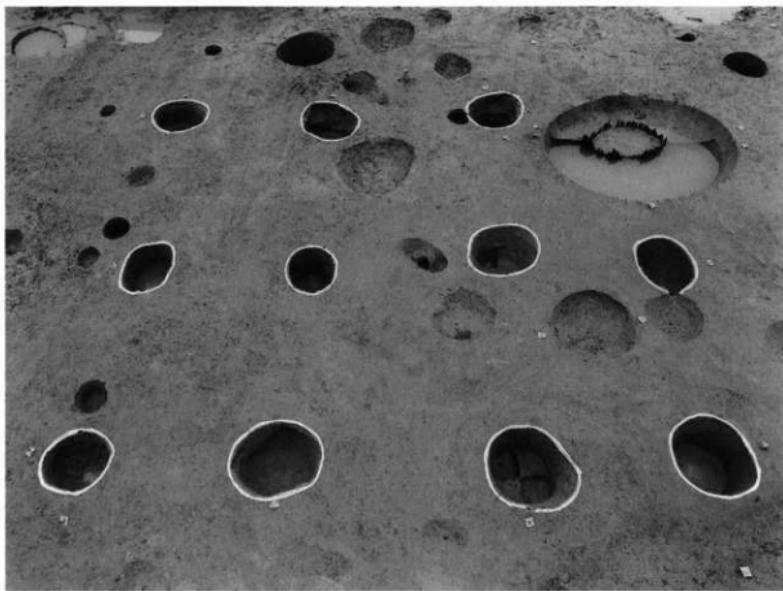
竪穴住居址 130475



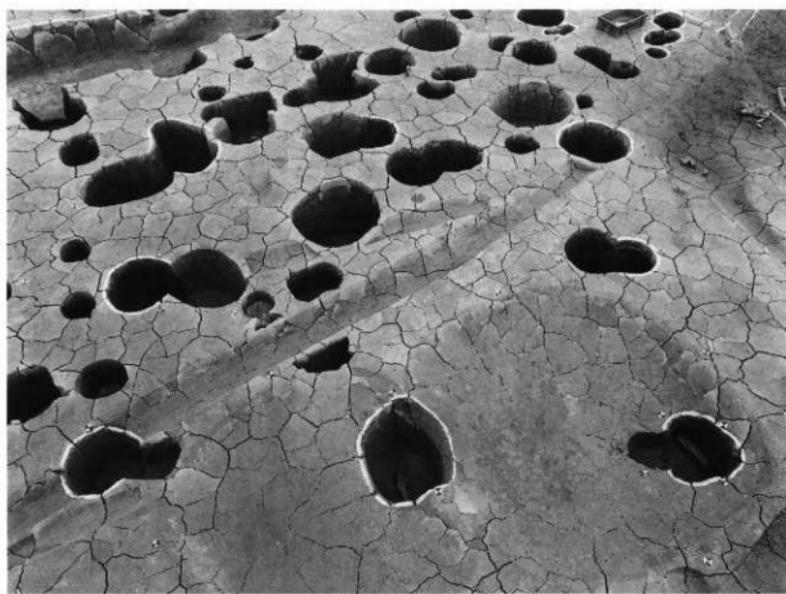
竪穴住居址 130475 カマド



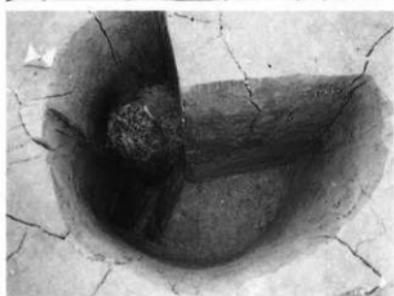
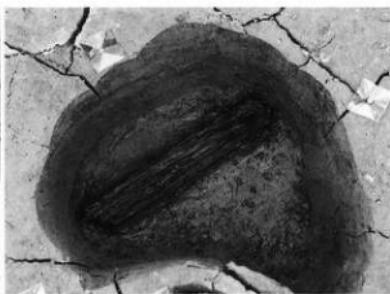
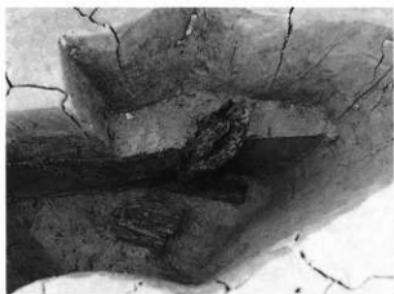
竪穴住居址 130902



掘立柱建物跡 2



掘立柱建物跡 5



(左上) 掘立柱建物跡 5 柱穴 1 3 1 0 5 8  
(左下) 柱穴 1 3 1 0 5 3



(右上) 掘立柱建物跡 5 柱穴 1 3 1 2 2 1  
(右下) 柱穴 1 3 1 2 2 4



(左) 井戸 131000



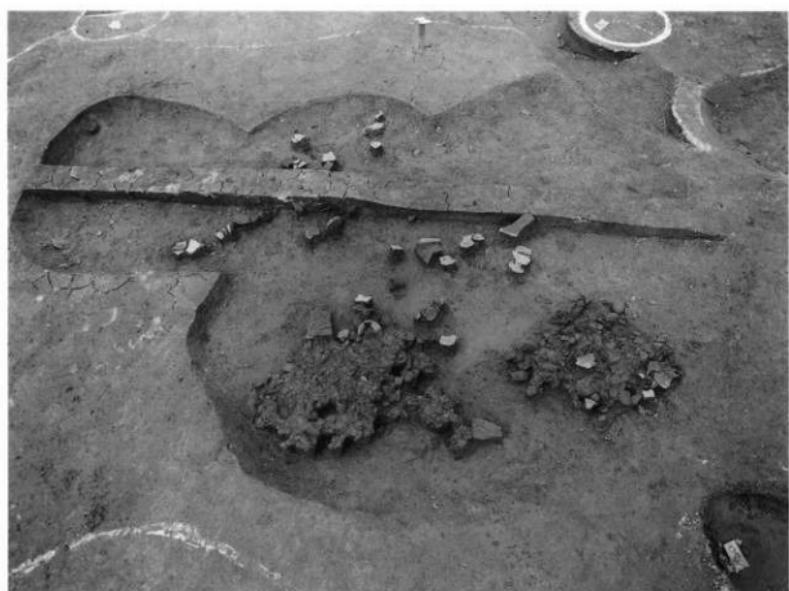
(右) 131000 井戸棒内掘削後



(左) 井戸棒 1



(右) 井戸棒 2



土坑130567製塙土器出土狀況



同上部分拡大



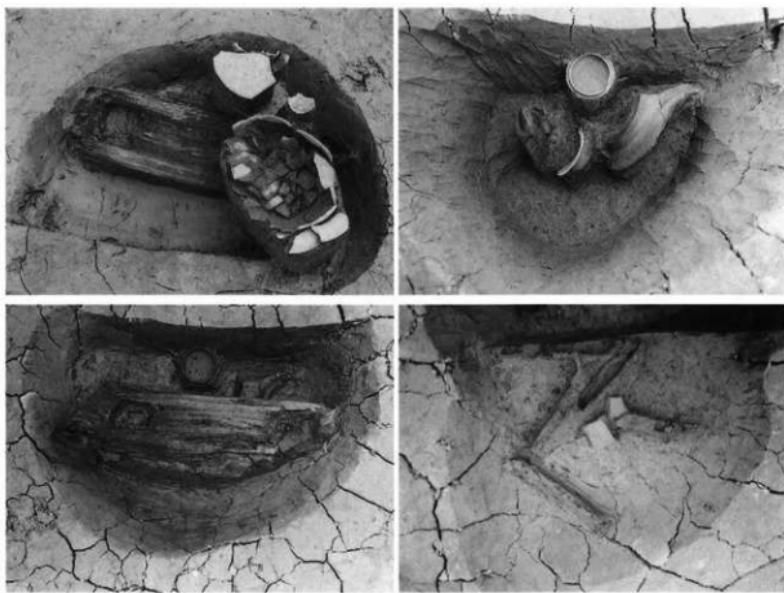
土坑131001遺物出土狀況



土坑131002遺物出土狀況



土坑130965遺物出土狀況



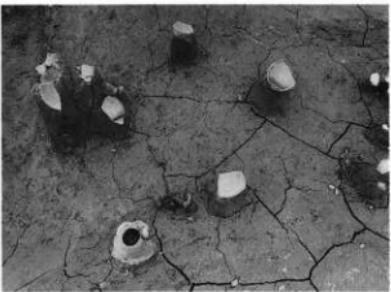
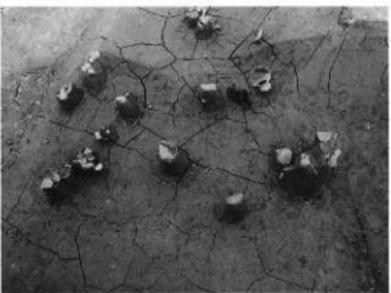
(左上) 土坑130764遺物出土狀況西半上層 (右上) 土坑130764遺物出土狀況西半下層  
(左下) 土坑130764遺物出土狀況西半中層 (右下) 土坑130764遺物出土狀況東半中層



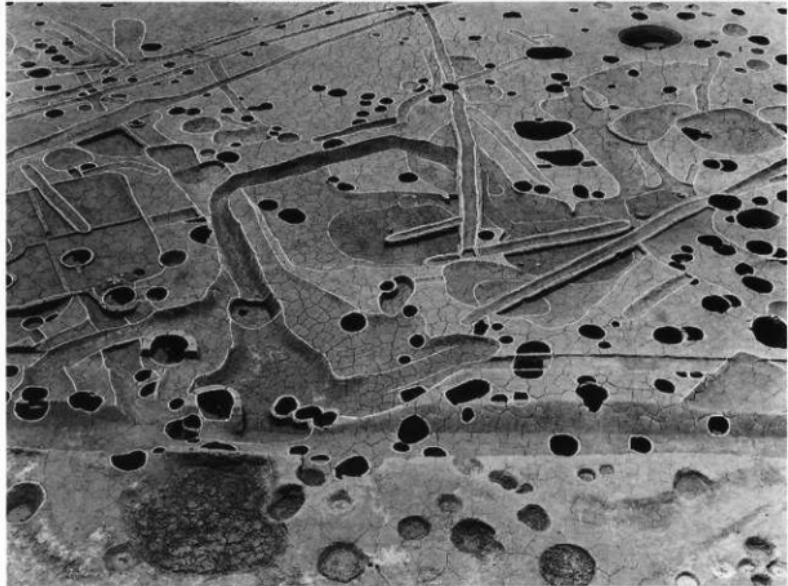
周溝131101



周溝131101内検出主体部



(左上) 周溝131101周溝遺物出土状況1 (右上) 周溝131101周溝遺物出土状況2  
(左下) 同上部分拡大 (右下) 同上部分拡大



周溝131250



大溝130240



(左上) 大溝130240上層遺物出土状況1  
(左下) 同上部分拡大



(右上) 大溝130240上層遺物出土状況2  
(右下) 同上部分拡大



(左上) 大溝 130240 中・下層遺物出土狀況 1 (右上) 大溝 130240 中・下層遺物出土狀況 2  
(左下) 同上部分拡大 (右下) 同上部分拡大



(左上) 大溝 130240 中・下層遺物出土狀況 3 (右上) 大溝 130240 中・下層遺物出土狀況 4  
(左下) 同上部分拡大 (右下) 大溝 130240 中・下層遺物出土狀況 5



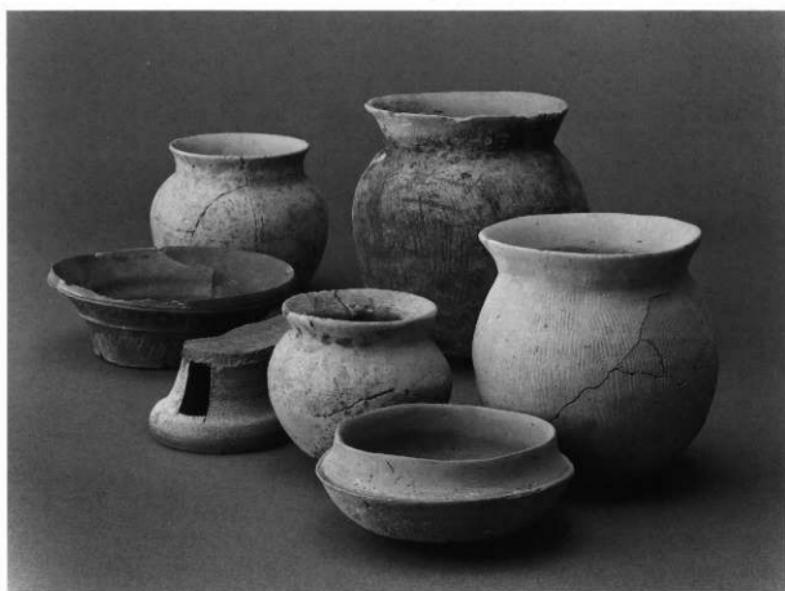
(左上) 大溝 130670 遺物出土狀況 1  
(左下) 同上部分拡大

(右上) 大溝 130670 遺物出土狀況 2  
(右下) 同上部分拡大



(左上) 溝 130236 遺物出土狀況 1  
(左下) 同上部分拡大

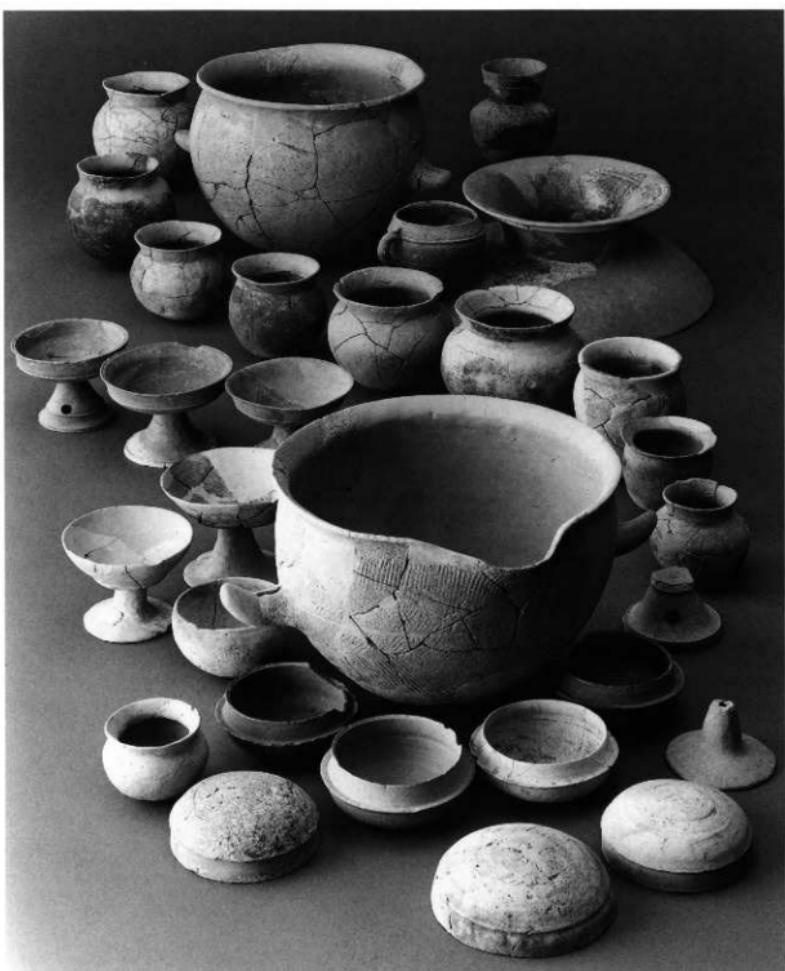
(右上) 同左部分拡大  
(右下) 溝 130236 遺物出土狀況 2



井戸 131000 出土遺物



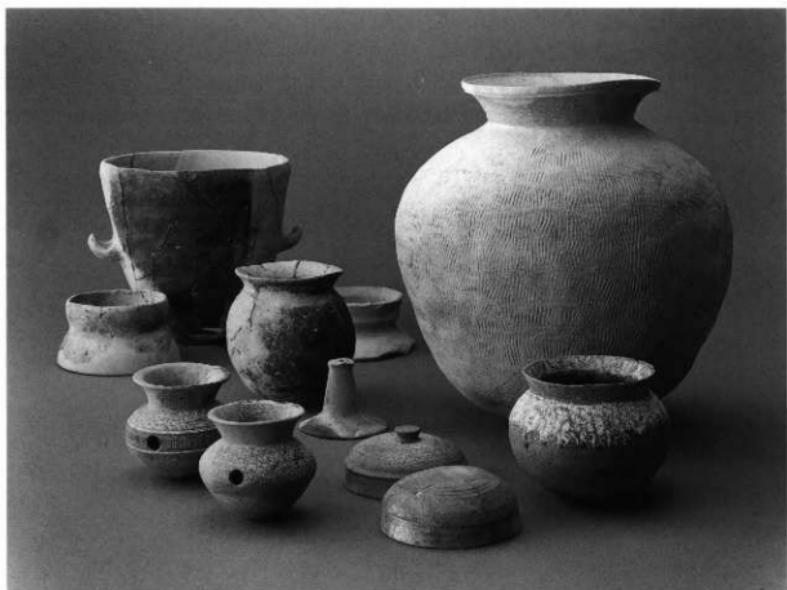
周溝 131101 出土遺物



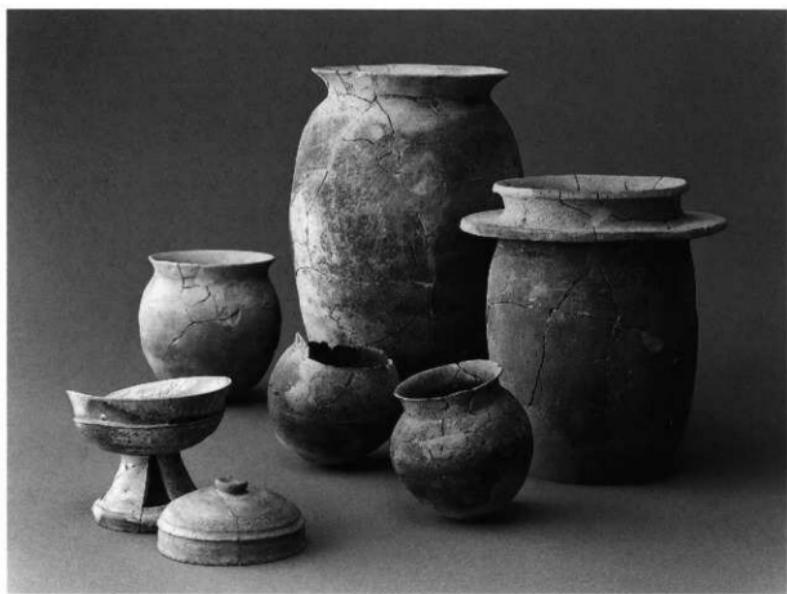
大溝130240出土遺物



大溝130240出土遺物



大溝130670出土遺物



大溝130236出土遺物

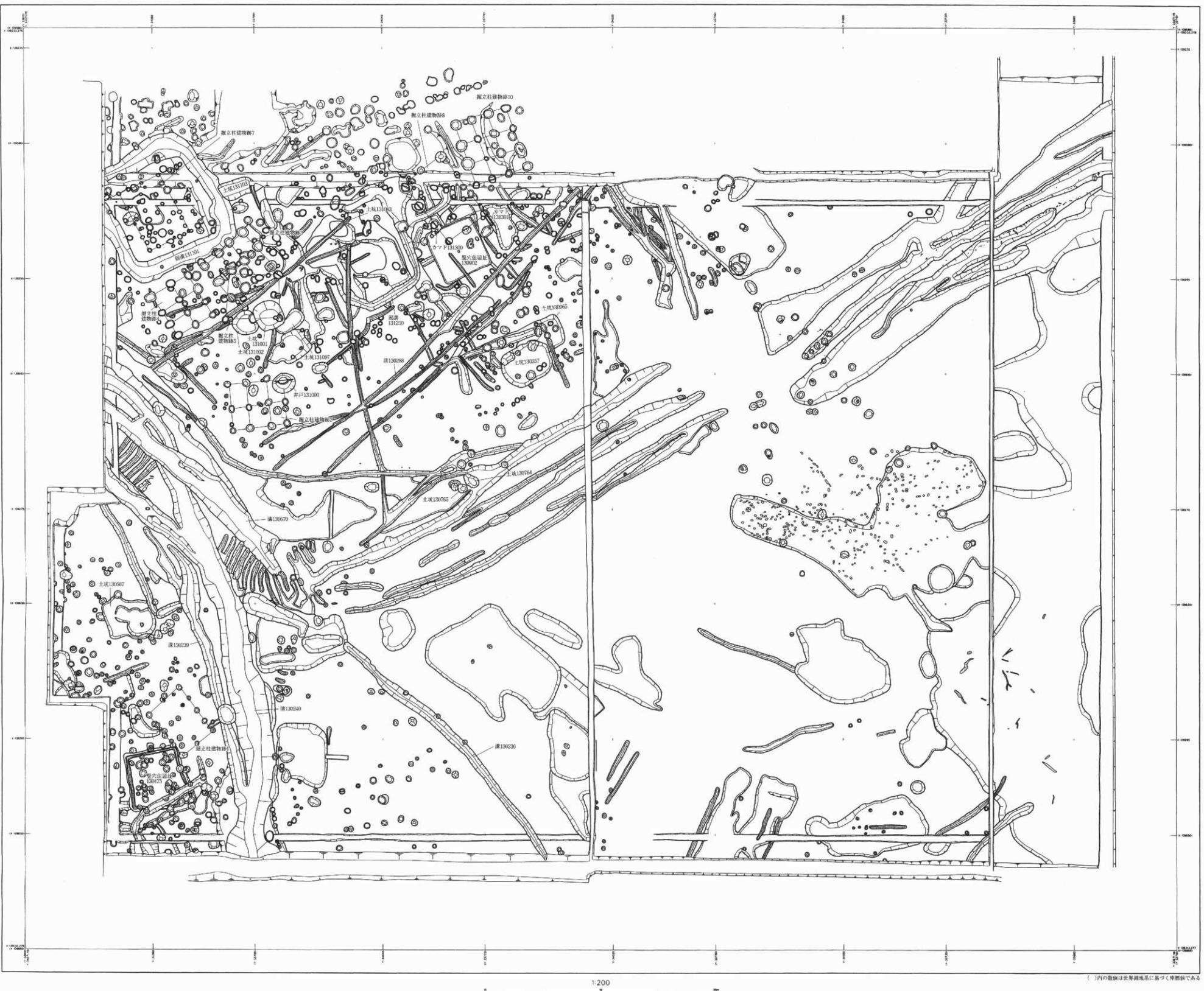
# 報告書抄録

ふりがな	しとみやきたいせきはくつちょうさがいよう・さん							
書名	部屋北遺跡発掘調査概要・Ⅲ							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	岩瀬 透、瀬山まり							
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	°			
部屋北遺跡	四條畷市 部屋・砂	27229	7(51)	34° 44' 25"	135° 37' 52"	平成15年4月16日から 平成16年7月28日	5,400m <sup>2</sup>	なわて水 環境保全 センター 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
部屋北遺跡	集落跡・ 生産域	古墳時代	住居址、墳墓、井戸、溝、土坑	陶質土器、輪式系土器、須恵器、上飾器、U字形板状土製品など	柱根や礎板が良好に残存している建物、準構造船の船底材を転用した井戸枠を持つ井戸や、朝鮮半島からの移住民の存在を予想させる遺物

## 部屋北遺跡発掘調査概要・Ⅲ

発行日 2006年3月31日  
 発 行 大阪府教育委員会  
 〒540-8571  
 大阪市中央区大手前2丁目  
 TEL 06-6941-0351  
 印 刷 (株)近畿印刷センター  
 〒582-0001  
 柏原市本郷5丁目6-25



付図 古墳時代中・後期遺構平面図

( )内の数値は世界測地系に基づく座標値である

